

小林好目

東北の方言

三省堂

著者略歴

東京都出身。明治十九年生。東京高等師範學校を経て、明治四十五年東京帝國大學國文學科卒業。現在東北帝國大學教授。著書に「日本文法史」「國語學の諸問題」等あり。

序

奥羽の方言の調査を始めたのは昭和十三年からであつた。各地有志の援助によつて今日までに蒐集した資料は今自分の研究室に山積してゐる。元來自分は國語史學研究の目的の下に方言の調査に従事するやうになつたもので、今日遽に之を本書の如き形に纏めて世に公にしようとは考へてゐなかつた。自分にはかゝる題名の下に奥羽方言の全貌を語る資格は未だあるまい。この叢書の編輯者から乞はれるまいにこゝに之を著したのであるが、もしその懇請がなかつたならば、かゝる書冊に筆を執ることはいつのことであつたか分らない。この書は多く自分の志す所に従つて史的研究の基調の上に方言を語つてゐる。日本語の發達途上に生じた地域的に違ふ日本語が即ち日本の方言である。文獻による言語研究と共に地域的に異なる日本語を研究する方言學は國語の發達を明にする所以であり、此が取りも直さず國語學ともなる。東北地方は遠い昔に日本民族の進出した地方で、その方言の研究が國語學建設に重要にして興味多いことは云ふまでもない。説明は成るべく通俗を旨とした。調査に關する餘談の如きものを挾んだのも、多少なりとも記述の乾燥に陥ることから免れ

ようと欲した爲に過ぎない。

「東北方言の成立」の一章は二三試みた講演をまとめたものである。アクセントの章は余と業を共にしてゐる東京府立高等學校教授平山輝男君の調査研究の結果に成るもので、この方面の研究が同君の努力によつて明かになつたことは嬉しい。

平山君並に余の研究は瘡藤報恩會並に服部報公會の援助によるもので、われ／＼の深く感謝する所である。方言票に對する回答は各地男女師範學校並に國民學校教員諸氏を煩し、江戸時代諸侯領地圖は東北帝國大學奥羽史料研究室の調査の結果を利用した。各地有志との懇談も亦調査に裨益する所大なるものがあつた。余の研究室にあつて終始調査の補助をつとめた人は藤崎知子氏である。この機會にいづれにも謝意を表する。

昭和十八年四月

著 者

凡 例

一、方言例は片假字を用ひて表音的に記し、長音、促音、拗音は次の如くした。

長音 ボーシ（帽子）

促音 ニッボン（日本）

拗音 チョキン（貯金） クワシ（菓子）

一、ガ行鼻濁音を特に假名では表示せず、たゞ音聲記號を以て明かにした。

一、「ヂ」「ヅ」も「ジ」「ズ」と記し、音聲記號に於てのみ音價を示した。

一、書中に掲げる統計表上、郡名の下に示す數字は方言調査回答により或事實の行はれることを確め得たる町村數を示す。市は該回答の全部の數を録した。

一、東北方言を北奥方言（青森縣、秋田縣、岩手縣南部領、山形縣庄内地方）と南奥方言（福島縣、宮城縣、山形縣の村山置賜地方、岩手縣伊達領）に二大別したが、その下位の小方言についてはまだその時期でないから論及しなかつた。然し特徴を同じうする事實を地域的に述べた所もあるから、その名稱を左に掲げる。

青森縣津輕領（東津輕郡、西津輕郡、中津輕郡、南津輕郡、北津輕郡、青森市、弘前市）、青森縣南部領

(上北郡、下北郡、三戸郡、八戸市)

岩手縣南部領(九戸郡、二戸郡、下閉伊郡、上閉伊郡、岩手郡、紫波郡、禰賀郡、和賀郡、盛岡市)、

岩手縣伊達領(膽澤郡、江刺郡、氣仙郡、東磐井郡、西磐井郡)

山形縣庄内地方(東田川郡、西田川郡、飽海郡、鶴岡市、酒田市)

福島縣會津地方(北會津郡、南會津郡、大沼郡、河沼郡、耶麻郡、若松市)、福島縣海岸地方(相馬郡、

双葉郡)

目次

第一章 東北方言の成立

一、言語の傳播

二、日本民族の東北進出

三、蝦夷基層

四、關東方言の成長

五、東北方言と關東方言

六、東北方言と關西方言

第二章 東北方言の區劃

第三章 東北方言の音韻

一、母音

二、子音

三、アクセント

第四章 東北方言の語法

- 一、假定條件の云ひ方……………一五
- 二、既定條件の云ひ方……………一六
- 三、形容詞の語形……………一七
- 四、未來推量形……………一八
- 五、動詞の命令形……………一九
- 六、使役の助動詞……………二〇
- 七、助詞の省略……………二一
- 八、感動助詞「なむし」「なもし」……………二二

第五章 東北方言の語彙

第一章 東北方言の成立

一 言語の傳播

日本語は日本民族の發展に伴つて日本全土に擴つたものである。東北方言もこの民族の東北地方へ發展するにつれて擴つた日本語であるから、遠くその昔に遡ると、中央の言語と起源に於て違つた言語ではない。これは今日の日本全國すべての方言について同様に云はれることで、従つて或方に特有の事實と考へられてゐるものでも、嘗ては中央にもあつたが、それが中央で失はれた爲に今日地方の或特殊の方言の特殊の事實のやうに思はれるものもある。勿論各地の方言が中央の言語から分化した後に、その地方地方で作り出した特徴もあるには違ひないが、それと共に中央で失つた性質を地方で持ち續けて、それが特殊の地方の方言の特徴となつたものもあると思はなければならぬ。それであるからさう云ふものは、嘗ての中央の言語の俤を今日に示して居るもので、従つて或地方に於て持つてゐる性質がそれとは遠く離れた他の極端の地方に共通してゐる場合があることは容易に想像のできることである。吾々が東北方言の上で知つてゐる現象で、他の全く關係のな

い遠い地方で行はれてゐるものを幾つか擧げることができる。例へば牛のことをベコと云ふことは東北地方全體にひろく行はれてゐる習慣で、東北方言特有の語であるかのやうに思はれてゐる。現に橋正一氏の「方言學概論」にも語彙の方言區劃を論じてある章にはこの語を東北の部に擧げてある。アイヌ語でもベコと云ふために之をアイヌ語からはひつたものだとか考へた人もある。東北地方では通俗にはさう考へてゐるやうだ。方言研究家でもさう考へてゐる人があるらしく、伊能嘉矩氏の「遼野方言誌」にはアイヌ語の *peko* より出づと註してある。然るに江戸時代の方言集「丹波通辭」を見ると、犢のことを「べいこうじ」とあるから、京都の近くの丹波でも嘗ては子牛のことではあるが、ベイコと云つてゐたことが分る。安永四年の越谷吾山の「諸國方言物類稱呼」にも犢（うし）を四國にて。ベベの子といふ。中國東國ともに。ベコといふ。

とあるから、江戸時代にはこの語が相當に廣く行はれたやうに見える。中國四國にもあり、關東地方にもあつたのである。

今日の方言集について見ると、三ヶ尻浩氏の「大分方言の研究」には、大分縣全體にベイベンコ又はベベンコと子牛のことを云つてゐるし、後藤藏四郎氏の「出雲方言考」にも牝牛の子をベイベノコ、ベイベンコと云ふとある。今一つ熊本縣の方言を田中正行氏の「熊本縣動物方言分布」(「方言」第五卷第三號)から擧げると、

ビービー(天草郡)

ビビンコ(羣北郡)

ビヤビヤノコ(阿蘇郡)

ビヤビヤノコ(同)

ビョー(球磨郡)

ビョービョーノコ(同)

ビュビュ(同)

べべ(宇土郡・天草郡)

ベベコ(天草郡)

ベベノコ(全縣)

ベベンコ(鹿本・飽託・羣北三郡を除く全縣)

とあつて、子牛のことである。

これらを見ると、ベイコとかベベノコとかその他の類の語は、他の方言ではもつぱら子牛のことを云ふやうであると思つて居たところ、最近奈良女子高等師範學校教授木枝増一氏から來信があり、氏の郷里丹波の綾部地方(京都府何鹿郡)では今日も牛をベコ、牛の子をベコジと云つてゐるとある。恐らく是は氏の郷里だけではあるまい。もつと廣く探したならば、牛その者をベコと云ふ地が他にも方々にあるに違ひない。

廣く牛を意味したり、子牛を指したり或は牝牛兒の意味になつたり、意味の廣い狭いの動搖は語の歴史の上では絶えずある事であるから、ベコは北と南とで隔つてゐても、もとは關係のあつたもので、確證はないが中央の言語にもあつたものの地方に傳つて地方にのみ残つたものに違ひない。語形が面白いし、日本語からアイヌ語にはひつてアイヌ語でベコと云つてゐるためにアイヌ語であらうと人が考へるまでで、ベコは語源的にいふと牛の啼ごゑから來た語であるやうだ。岩手縣の九戸郡役所から出した「九戸郡誌」に、その地方でとなへる牛の啼ごゑが擧げてあるが、ベーバー、

パーバ、パーパーと書いてある。この啼き名のペーにコがついてベコとなつたもので、もとは擬聲語 (Onomatopoeia) であつたものである。丁度ブランコといふ語が出来たのと同じ手續である。ヒヨコ、カッコ (下駄) の如きものと同じ趣のものと思はれる。

ベコのコは東北地方で多くの語に附ける接辭である。西洋の言語にある指小辭 (Diminutive) に當る。ドイツ語でお父さんを Vaterchen、子供を Kindchen、Kinderchen お嬢さんを Fräulein などいふ場合についてある chen とかlein とか云ふものにほゞ相當して、もとは一種の愛稱であるが、東北地方では極めて頻繁に用ひられて、いろ／＼の名詞につくのみならず、往々形容詞や副詞にもつく。犬コ、猫コ、茶碗コ、お茶コ、お湯コ、皿コ、紙コ、筆コ、本コ、花コ等極めて頻繁に用ひられる。名詞以外でつくものを挙げると、トゼンコ (淋しいこと)、チットコ、ワズカコ、チヨベットコ (以上いづれも僅か少しの意味) のやうな例がある。ところがこれが又必ずしも東北には限らなかつたらしい。現に「出雲方言考」に、出雲地方にもかゝる習慣があるやうに書いてある。名詞構成用接尾語として標出してあつて、東北のやうに多くは使はぬが、小兒語には多く、「田舎ではぎやりこ (蛙)、あちんこ (鰻)、いもんこ (芋) 等、こを用ひることが多い」と見えてゐる。中典でも或時代にはさう云ふことがあつたのでないかと思はれることは、今でもアンコ (笛)、ハンコ (印)、ネツコ (根)、ハシツコ (端)、スミツコ (隅)、ヒトツコ (人と一人通らないの如く)、ハシゴ

(梯)、オデコ(出額)などある。ゲンコ(拳固、固は常字)、メンコ(面子)、ダンコ(團子)などもそれではないかと思はれる。カツコ(下駄)、ヒヨコ(雛)、ブランコ(鞦韆)など擬聲語から來たものは前に舉げた。パチンコなども同じ心理で新しく出來た。シッコ、ウンコなど尾籠なものまで舉げれば尙多い。近松徳三の伊勢音頭戀寝の對話の中に「さや豆コ」「枝豆コ」とある。西鶴の「萬文反古」には「吸物のきすこの細作り」と鱧コといふのがある。これが文獻にあまり残つてゐないのは家庭語として多く用ひられた關係からであるかも知らない。「丹波通辭」には餘り字附字と云ひ、蝶をデフコ、溝をミゾコ、木虱をタニコとあつて、京に近い丹波の江戸時代の習慣をかいてゐる。どうやらこのコを附けることが中央にもあり、或は全國的に擴つたのではないかと思はれるふしがある。

東北方言と出雲方言とは多くの性質に於て通ずる所がある。その中間が遮斷されてゐるのは京阪地方を中心とする言語變化と江戸を中心とする言語變化の及んだ結果であらう。ハ行音が唇の音になることは東北方言の特徴で、「跣足」「晝寢」「下手」が、ファダス、フィンネ、フェタなど云ふが、出雲にもさういふ音がある。セをシェといふのも東北地方の發音であるが、出雲でも同様である。この音は九州では全般的である。シとス、チとツを混同することも東北、出雲兩方言に通ずる性質である。その他キをチと發音すること、キューリ、チューガクなどの拗音の發音ができないこ

となどもよく似てゐる。かう云ふやうな音韻上の現象が大抵はもと中央の言語の性質であつたことは、音韻史の研究で分つてゐることであるから、さきの語彙の東北と他の地方と似てゐるのも、恐らくは中央の言語にあつたものが傳はつたものと想像できる。

古語が田舎に残ると云ふことは西洋の言語學者から聞くまでもなく、夙に日本の學者も注意したことで、宣長は「玉かつま」の卷七に「ゐなかに古の雅言の残れる事」といふ項目を擧げて、「すべてゐなかに、いにしへの言ののこれる事多し。殊にとほき國人のいふ言の中にはおもしろき事ぞまじれる」と説き、徂徠も「南留別志」に「古の詞は多く田舎に残れり」と教へ、學者の中には方言を用ひて語の解釋に成功したのも少なくない。今、東北方言に關係のあるものを述べると、「伊勢物語」の「夜もあけばきつにはめなんくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」のキツは古くは狐と解釋した。キツは東北地方の北部では水溜である。肥料溜や糞溜にもつかはれる。秋田縣では風呂桶をフロノキチといふ所もある。キツを水溜に解したのは平田篤胤で、翁が秋田の人であつたからである。之を篤胤は伴信友に傳へたので、信友は喜んでその隨筆「比古婆衣」の中に記してゐる。因にハメルといふ語は古くからあつて、萬葉十七の「うぐひすの鳴くらたにうちあはめて焼けは死ぬとも君をし待たむ」、土佐日記「ほと／＼うちはめつべし」などある。それ故にかの歌は「夜が明けたら水溜に投げ込んでやるぞ、腐れ鶏め、暗い内から鳴いて愛人を逃がしてしまつた」

といふ意味になる。

この外、東北地方には中央でとくの昔に失つた語をいくつか傳へてゐる。スガルと云ふ語は平安朝に於て口語には無くなり、平安朝の用法には議論があるとしても、鎌倉時代には慈鎮和尚の「奥山にかき籠りなむ後はさはすがるましらや友となるべき」といふ歌で分るやうに、もはや鹿の意味で用ひてゐるが、東北では今なほ廣くスガリと云つて蜂を云つて居たり、又「新撰字鏡」や「和名抄」にはヒヒル(蛾)があるが、ヒルとなつて今も蠶蛾に用ひられてゐるし、蟻螂を東北方言でイボムシと云つて居るのは、「新撰字鏡」にイヒボムシリ、「和名抄」にイボムシリ、「類聚名義抄」にてイヒボムシリ、イボムシリとあるものの残つたものである。かう云ふやうな例はなほ擧げることが出来るが、しかしさう多く古語と稱すべきものはなく、山とか川とか中央と共通して古くから傳はるもの以外では、東北地方に中央と異なる方言と云つても室町時代以後のものが多い。革新が中央で行はれると、その變化は絶えず日本全國に波及してゐるのである。東北特有の方言のやうに思はれて居るものも、中央での比較的新しい語彙が形を變へて現れてゐる場合が多い。津輕地方でイケナイ、駄目ダ、困ルの意味でマイナイと云ふ語が用ひられ、

(1) マイナイヤツダ

(いけない、奴だ)

(2) リモ、トソタドメデ、マエネエ

(俺も、年老つたと見えて、だめだ)

(3) ナドア 六時メイニ オギネバ マネジャ

オメダズア 六時メアニ オギネバ マイセンジャ

(御前たちは六時前に起きなければいけないよ)

などいふのは、興味ある語として他郷の人の耳を打つ。地理的に調査して見ると

マイナイ・マイネー・マネ・マエヘン・マイヘン (津輕全體)

マニアゴヘン (弘前市)

マネア (東津輕・西津輕・中津輕・南津輕・北津輕・弘前)

マネージャ (青森市・西津輕)

マネデア・マネジャ・マヤネ (中津輕)

マイネツチャ (弘前)

マアネエ・マンネア (西津輕)

マニアネア・マイジャ (東津輕)

マニアネ・マヒン・マイヒンジャ (南津輕)

マンネジャ・マヘンジャ (北津輕)

マイジャ (東津輕)

などあつて、語源は「間に合はない」であるから、そんな古い語ではない。

西洋で比較言語學の起つた初ごろの學者であるシュライヘルは方言の分裂について樹系説 (Stammbaumtheorie) を立て、一本の基幹からだん／＼木の枝が分れて小枝が出て來たやうな經過を取つたものと云ふ考へを持つてゐた。地理的に言語が分裂したことが方言分裂の原因と考へた。言語を民族と云ふものに結びつけて、スラブ人、ゲルマン人、ケルト人たちがそれぞれ言語を携へて、あたかも一つの巢から飛び立つて行つた蜜蜂の群のやうなものだと考へた。印歐語は原始印歐祖語から二つの分派が出來、その二つの分派のそれ／＼が又二つづつに分れ、それがいくつかに次第に分れると云ふ風な有様を想像した。ところがそれでは困ることが分つた。シュライヘルの考へでは、印歐祖語を話してゐた民族は中央アジアに住んでゐたことになつてゐるから、そこから西へ進むほど分裂の時期が古くて祖語の俤を最も早く失つてしまつた道理になるのであるが、必ずしもさうではなく、シュライヘルが最も早く分れたと考へたスラブ、ゲルマン群がそれと最も近い關係にあるインド・イラン群と著しい類似があることが分つて來た。シュライヘルの説では、さう云ふ場合があると、それは唯偶然の一致であると説明する外はなかつた。

そこでこの説に對してシュミットの波動説(Vellentheorie)と云ふものが出た。インド・ヨーロッパ語のどの二つを取つて見ても必ず何らかの類似がある。A方言は或性質はBCと同じであり、他の性質はCDと同じである。又B方言はCD方言と或性質は同じであるが、他の性質はAやその他の別の方言と同じであると云ふやうに、一つ／＼の言語事實が皆それ自身の領域を持つてゐる。これはいろ／＼の言語變化がどこかを中心として波のやうに擴つて、その擴る範圍が皆それ／＼違つてゐることを示してゐる。その同じ言語上の事實の擴つてゐる地點をつなぐと一本の線になる。それを言語地理學者は等語線(Isoglosses)と呼ぶ。方言の分布を見ると、あるものはこの等語線が網のやうに交錯してゐるに過ぎないと云ふことになつた。それで西洋の言語學者の間には方言と云ふものはないと説く人もある。一つ一つの言語事實について云へば境界線があるが、方言といふものは境界線がない。フランス語とイタリア語の關係を見ると、どこでイタリア語が終り、どこからフランス語が始まるといふことはなく、イタリア語の領域からだん／＼進むと、いつの間にかフランス語の領域になると云ふのが實際の事實である。

中央に於ける言語改新は波の如く遠く日本國中の周邊に及んでゐる。今日關西方言特有の語と思はれてゐるサカエが東北地方に於て行はれて居るのもその一つである。

二 日本民族の東北進出

東北地方へ日本民族の進出した迹を顧みると、崇神天皇の御代に四道將軍が派遣せられて北陸道に向はれた大彥命は會津まで來て、東海道から進まれた武渟川別命と今の會津で出遇はれたと古事記にある。これは一種の地名傳説かも知れないが、景行天皇の御代には武内宿禰が東方諸國の地形を視察し、又二年の後東夷日高見の民俗を報じて討伐すべき旨を進言してゐる。征夷は日本武尊によつて行はれ、尊は常陸より日高見に行かれた。其の後も蝦夷は叛服常ならず、仁德天皇の御代に上毛野田道が征伐に行つて伊寺水門（今の宮城縣牡鹿郡石巻港であらう）に戦死したと書紀に書いてある。これらの事は紀記編纂當時から千數百年前の事であるから史實は不明であるが、蝦夷地の經營が古くから行はれてゐたことは臆げながら知ることが出来る。

この蝦夷に備へるために白河の關と勿來の關すなはち當時の菊多の關が置かれた。これは承和二年の太政官符に「檢舊記置剋以來于今四百餘歲矣」とあるから、その事がほど允恭天皇の頃であつたことは確實である。白河國造は成務天皇の御代に設置せられ、それよりやゝ降つて菊多の國造が應神天皇の御代に設置された。併せて考へると、成務、應神兩朝頃よりこの地方までは朝廷の威令の行はれたことが分る。

齊明天皇の御代には、阿倍比羅夫が齋田・淳代の蝦夷を降し、淳代・津輕二郡の郡領を定め、遂に津輕の有間濱に渡島の蝦夷を召致した。元明天皇の御代になると、巨勢麻呂・佐伯石湯の征討があつて出羽國が設けられた。聖武天皇の御代には藤原宇合・大野毛人らの討伐によりて、陸奥に多賀城が設けられ、秋田城・雄勝城と相連絡することを得て、奥羽地方の蝦夷に對する經營は着々として進行した。

奥羽の拓殖がどの程度に進んでゐたかは今日考古學が進歩した結果、出土品の研究から明かになつて居るが、仙臺やその南郊にある古墳は前方後圓墳と圓墳で、前者は帝陵や貴族の墓に多い形式であるから身分のある人を葬つたもので、この地方に根強く日本民族の勢力が伸張してゐたことが考へられる。宮城縣名取郡下増田村の經の塚、仙臺市鹿野の二ツ塚、同南小泉の遠見塚の如きは前方後圓墳で、畿内、關東にあるものに劣らぬ莊大なる墳墓である。同じ鹿野の一つ塚は圓墳であるが、その中から出た古鏡・勾玉・小玉・白玉・金環の如き立派な遺物がある。是ら遺物遺跡が奥羽經營の根據地多賀城に關係あることは明かで、古墳の外形に由つてその築造年代を推すと、古墳時代の末期に屬するから、大化の改新よりもまへに廻るべきことは疑はれない。之より北岩手縣に入ると古墳は極めて少く、僅かばかりあるものも規模の小さいものである。秋田縣は出羽柵が早く設けられたところであるから、古墳も相當に在り、前方後圓墳の規模の大きいものもある。青森縣に

は古墳はないが、蝦夷の山城、いはゆるチャシがあつて、こゝに石器時代の貝塚土器に併せて古墳時代の齋瓮土器や土師器が出ることを見ると、蝦夷が日本文化に風靡されて、日本風の器物を使用してゐたことも想像される。

わが勢力圏内にある蝦夷人は日本化して往々日本人と差別の分らないほどになつてゐたらしい。
續紀神護景雲三年十一月の條に

己丑陸奥國牡鹿郡俘囚外少初位上勳七等大伴押人言、傳聞押人等本是紀伊國名草郡片岡里人也。昔先祖大伴部直征夷之時、到小田郡島田村而居焉。其後子孫爲夷被虜、歷代爲俘、幸賴聖朝撫運、神武威遠、拔彼虜庭、久爲化民。望請除俘囚名爲調庸之民、許之。

とあつて押人らはもと日本人だから俘囚の名を除いて調庸の民になりたいと云ひ、許されたのである。それから續々之に倣ふものが出て來て寶龜元年四月の條にも

陸奥國黑川賀美等十一郡俘囚三千九百人言曰、我等父祖本是王民、而爲夷所略、遂成賤隸。今既殺敵、歸降子孫蕃息、伏願除俘囚之名、輸調之庸、眞許之。

と云ふやうなことが見えてゐる。申し立てた素性が眞實か偽か分らぬが、いづれにしても蝦夷と日本人とは生活様式から言語に至るまで、殆ど日本人と違ふ所がなかつたものと見なければならぬ。時代を追つて拓殖の線はすゝみ、蝦夷は次第に日本化して行つた。津輕藩の記録によれば江戸時代の寛文年間になほ外ヶ濱に十六箇村の蝦夷の居つたことが書いてあるから、長く各地に蝦夷の部落はあつたかも知れないが、文化の高い日本民族に接しては、その生活一切を日本人に學び、日本人との間に婚を通ずるものも少くなかつたであらうし、いづれが蝦夷人であるか分らないものになつて行つたものと思はれる。

平安朝に入ると桓武天皇は東海、東山兩道の兵を多賀城に集め、紀古佐美をして衣川に進撃せしめられたが、その後阪上田村麿が遠征して膽澤城に鎮守府を設け、更にその北紫波郡に志波城と徳丹城とを築いた。恐らく今の盛岡市附近まで歸服したものであらう。その後十餘年、嵯峨天皇の弘仁頃文屋綿麻呂の征伐があり、今の二戸郡福岡町附近の爾薩體津母あたりまで威令が及んだ。その結果、和賀・稗貫・紫波の三郡は設けられた。

これら武力の經營による蝦夷地の開發は蝦夷の歸服しないものに對する非常手段であつた。蝦夷を同化することを主とし、或は之を都に召して饗應したり、位階勳等を與へて慰撫し、内地に移住するものには二代の間糧食を給して堵に安んぜしめた。彼らの有力なものにして國司になつた者も

あつた。之と共に内地より多くの住民を移して土地を拓くに力められたことは云ふまでもない。元來蝦夷人は日本書紀に人と爲り勇悍であると云ひ、又「衣毛飲血昆弟相疑、登山如飛禽、行草如走獸、承恩則忘見怨必報」と云つてあるやうに體悍な民族で、後に佐伯部を形作り宮門を守つたこともある通り、戰鬥には長じてゐたであらうが、民族として團結するやうな性格を具へて居らず、書紀にもそのことを「村之無長、邑之勿首、各貪封堺、並相盜略」と云つて居り、續紀天應元年六月小黑麻呂の奏狀にも、「彼夷俘之爲性也、蜂屯蟻聚、首爲亂階、攻則奔逃山藪、放則侵掠城塞」と云つてあつて、無秩序な烏合の衆で、大和民族のやうに組織ある集團生活をなし、一定の土地に固着して山野を開拓し、文化を發達させてゆくといふやうな民族ではなかつた。それ故に日本民族が着々として開拓の歩を進めてゆく場合、各個に擊破され或は同化されて行つたもので、己に危害を加へられることさへなくば、日本人が東北各地に進出する上に進んで鬭争を挑むやうなことはなかつたらしい。

昭和六年に山形縣飽海郡本楯村にある城輪の柵の遺址が發掘された。昔の出羽柵であると云ふ人もある。さうでないとしても其れと關係のあるものであることは疑はれない。昨秋方言調査旅行の途次ここを訪れて、後世の城郭とは大に趣を異にすることを知つた。遙かに烏海山を望む庄内地方北部の平野の眞たゞ中にあつて何ら要害と認むべきものはない。恐らく屯田兵とも云ふべきものの

居たところで、豊饒なこの平野を耕す部落民の保護に任じ、一朝事ある際、之を柵内に收容するつとめを成すのみであつたらう。

日本人に抵抗した記事が歴史上往々見えるのは、何か誤解があつたり、侮辱を加へられるやうな場合に多く起つたことで、例へば征夷將軍紀古佐美が大敗して容易ならぬ事態を惹起した戦争の如きは今の栗原郡地方にあつた上治郡の大領に任ぜられてゐた伊治公誓磨といふものが早くから日本民族の仲間入をしてゐた牡鹿郡の大領道島大柵から蝦夷抜ひをうけたのに憤慨したことに端を發してゐる。かういふやうに折々の叛亂はあつて戦争も何回か起つたが、蝦夷は次第に同化されて日本民族の中に吸収され、中央の文化は奥羽の地に澆潤して行つた。前九年の役のところには、この地に住するものの文化が侮りがたいものであつたことは、阿部貞任が義家の矢面に立つて「年を経し糸の亂れのくるしさに」と即吟したといふ話からも想像できる。宗任が捕へられて京に引かれた時、大宮人は宗任が梅を知るまいと思つてその一枝を示したところ、「わが國の梅の花には見つれども大宮人は何といふらん」と宗任に詠まれて、その返歌に困つたといふ話がある。これは單なる傳説であるとしても、かゝる話が生れたことは、彼らがそれほど進んでゐたと信ぜられて居たからに違ひない。

阿倍頼時は自ら衣川館に住し、貞任は厨川に居て岩手郡一帯の地を領し、宗任は今の水澤附近の

鳥海に居て志波郡を治め、一族岩手郡以南北上川流域の沃野に勢威を張つた。

清原氏は出羽の押領使から出て、前九年の役に頼義を助けて阿倍氏を亡した功により鎮守府將軍となり、阿倍氏の故領陸奥六郡を領したが、後三年の役に亡びてその領土は擧げて藤原清衡の收める所となつた。清衡が中尊寺に獻つた供養願文に「生逢聖代之無征戰、長屬明時之多仁恩」と見えるやうに、陸奥の地は當時戰亂の巷であつた京都に比べて豊かな平和の天地であり、平泉の文化はこれまでのやうな受身的の攝取ではなかつた。中尊寺が寺塔四十餘、坊舎三百餘、毛越寺が寺塔四十餘、坊舎五百餘と傳へられ、美術史家の云ふ所によれば一字金輪大日如來の玉篋や金色堂の幕股がわが國の藝術として他に之に比べるものもない逸品であることなど思へば、奥羽の地はもはや昔の夷狄の地ではなく、文化は中央を凌ぐものがあり、従つて京都との交通も頻繁であつて、人の往來するものも多かつたに違ひない。

鎌倉に武家政治が創り、平泉の勢力が戡定されるに及んで、中央と奥羽との障壁は殆ど全く撤去され、中央の文化はあまねく奥羽の邊境まで及ぶやうになつた。守護地頭の制度が布かれ、伊澤景が陸奥國留守職となり、關東の豪族工藤曾我の諸氏、野州の宇都宮藤原氏、甲斐源氏等が多くこの地方に封ぜられた。津輕平賀藩が鎌倉時代の始ころから曾我五郎次郎の父小五郎の所領であつたことも古文書の證明する所である。鎌倉幕府の政令は津輕の果まで行はれてゐたのである。

日本海方面に於ける日本民族の進出が早く、文化は遠く津輕までも及んでゐたのに反し、太平洋岸は長く日本人の發展を拒まれてゐたが、かくして武家時代に入りて、急に幕府の威令が行はれるやうになると、中央の文化がむしろこの方面から浸潤することの多かつたらしいことは、鎌倉時代に起つた新しい宗派の僧侶の布教がこの方面に著しかつたことに因つて想像できる。原勝郎氏の「日本史上の奥州」(「日本中世史の研究」)によつてこれを述べると、淨土宗に於ては法然上人の高弟證空が白河の關を越え、隆寛は奥州に配流になつたことがあり、その弟子實成房がこの地の教化に従事した。これも法然門下の石垣の金光坊は一生を奥州の布教に捧げて津輕で死んだ。眞宗に於ては如信上人が岩代東山に住み、是信房は更に遠く紫波郡に行つた。本願寺第三世の覺如宗昭も東山に巡錫してゐる。禪宗に於ては榮西の弟子記外禪師、聖一國師の弟子無關禪師をはじめ佛源・空性・佛智らの高僧が布教に来てゐる。日蓮宗に於ては日辨・日目・日興等の巡錫があり、殊に日興は陸中まで進んだ。時宗に於ては開祖一遍上人がみづから奥州に布教してゐる。

三 蝦夷 基層

昔の蝦夷の地と思はれてゐた東北地方もいつか内地とかはらぬ日本民族の版圖となつた。日本民族の進出と共に東北地方は日本語の領域となつたと思はれるのであるが、それでも元來多くの蝦夷

人の居た地であればアイヌ語の影響がありはしないかと人が疑ふのも無理もないことである。然しこれを言語混和の意味に解するならば誤である。蝦夷人は日本人の中に混融して行つたけれども、蝦夷語が日本語の中にはひつたことは少い筈である。統治者が已より文化の劣る民族の語を借用するものではない。パチエラーの如きは多くの語をアイヌ語を以て解釋して居り、日本語の「さる」(猿)はアイヌ語の *Sar-o* で、アイヌ語に *Sara* は尾であり、*o* は「持つ」と云ふことから、*Saro* は即ち「尾がある」と云ふ意味であると云ふやうな説明をしてゐるが、蝦夷人が猿を知つたことは新しいことで、日本語から取込んだものに過ぎない。日本語の中にあるアイヌ語といへば地名とか東北特有の動植物名とか云ふ位のもので、エミシとかエゾとか云ふ語がアイヌ語であることは勿論であるが、その餘は貝の名のホッキ、動物のラッコ、木の名のトチ(櫟)とか、その外數へても案外寥々たるものである。

蝦夷人の日本語に於ける影響といふことはかゝる借用語の問題ではなくて、むしろ蝦夷人の人種的影響といふ意味を以て考へなければならぬ。人種的影響といふことは嘗てはあまり誇大に考へられたことがあり、又その反動としてその存在を否定するといふやうな傾もあつたが、此がそれほど大きいものでないとしても、何らか國語の發達の上に東北地方では蝦夷の影響がありはしなかつたかと考へて見る必要はないではない。

人種的影響と云つても、之を人類學的の意味に考へてはいけない。ラテン語がゴール地方からイベリヤ半島にひろまつた時に、イベリヤ・ロマン語は他のロマン語に見られない一個の特徴を呈した。それは齒唇音が兩唇音（すなはち例へばvがbに變るやうに）にかはつたことであるが、その原因はイベリヤ人種が特に突類であつたと云ふことであつた。この事はイベリヤ人よりもつと突類であるアメリカ黒人が英語を話す時に同じ變化を生じてゐることにより實證されるが、かゝる解剖學的特徴が發音に變化を生ずることもないではないが、それはむしろ例外とされてゐる。人種的影響と稱するものはこの種の先天的の解剖學的特徴を云ふのではない。或民族が新しい言語を學ぶとしても、前から持つてゐた言語習慣を失ふ筈はない。このまへから持つてゐた言語習慣の遺傳性をメイエは基層 (Substrat) と呼んだ。

ラテン語が今のロマン語に發達した迹を見ると、基層の同じである所では同一でなくても類似した性質を持つて發達した。嘗てケルト人がゐてゴール語を話してゐた北イタリア地方のロマン語はガロ・ロマン語と澤山の共通な性質を持つてゐる。例へばラテン語の昔の長いu (フランス語のouの發音) はフランス語に於けると同様にイタリア北部ではü (フランス語のu) に轉じた。ラテン語の crūdum はイタリアの中部では crudo と云ふ形を保つてゐるが (それはuがcuと發音される) 北イタリアではフランス語と同様に cru (フランス語のu) と發音される。これは全くケルト基層

の影響によるものと信ぜられてゐる。

ドラビダ語は今日印度の半島の東南部にのみ行はれてゐる言語であるが、昔は印度に廣く行はれてゐて、今日の印度歐羅巴語は之を驅逐して印度に侵入したものである。インドのアリアン語やその隣のアフガンのイラン語にドラビダ語共通の齒音があり、ペルシア語にもなく、その他大部分の印歐語にもないものであることは、印歐語が印度にはひつて來て土着の人間により話されるやうになつた結果、さう云ふ新しい性質を生じたものであると信ぜられてゐる。今日印歐語がひろく各地に擴つていろ／＼の語族として分かれてゐるが、それは單に地域的に分かれた爲に自然に變化したものと云ふだけでなく、各地に於て前にちがつた言語を話してゐたものの基層から來てゐるところが多いものと推察される。

言語の發達を考へる上には、上述の如き基層を考慮に入れるべきであり、東北方言の發達を研究するにもアイヌ基層を考へるべきであるけれども、基層といふことは極めて複雑なもので、慎重な研究法を用ひないと誤られる虞がある。フランスの南部にある *bain* (角) といふ語はケルト語根であるが、フランスの北部はケルト人がもつとも多く住んでゐたにも拘らずこの語がない。これは外の事情 (同音牽引といはれる現象) が特にその地方では働いて、ラテン語の *cornu* (角) が勝を占めたからであると分かつた。

東北方言に於て語頭以外のカ行音タ行音が濁音になると云ふ性質を持つてゐるのは、一寸考へるとアイヌの基層から來てゐるのではないかと考へられさうである。アイヌ語では清濁は音韻論的差別ではない。bo は「沼」であるが do と發音しても同じである。「川」も pet と云はうが bet と云はうがどちらでも良い。それ故にアイヌ人が日本人についてキンとギン、ハタとハダの區別を學ぶには骨が折れる。アイヌが學校教育を受ける場合、どういふ時は濁點を打つか、どういふ場合に打たないか分らないで、打つべき場合に打たなかつたり、打たない所に打つたりする誤をしてゐる。これは今日の東北地方の兒童の誤と同じあり、方言の報告をする人が濁つて書いてゐないでも自分の發音では濁つてゐる場合のあるのと似てゐて、兩者清濁に無關心であることは同じである。之を考へると、東北方言の濁音化はアイヌ基層から來てゐると考へられさうであるが、必ずしもさうとも斷定し兼ねる。それと云ふのは、語頭以外のものを皆濁音化してしまふのが東北方言の特徴であつて、秋田縣の社會教育主事伊藤孝一氏は長く東京に學んで流暢に標準語を話す人であるが、その人が東京にゐた頃うつかり取外すのはこの郷土訛の濁音で、それを口にしてから、また方言をしやべつたと氣が附くことがあつたと云つて居られた。之に反してアイヌ人は濁音を發音することはあるが、濁音に云はない方が多う。サマースの集めたアイヌ語には B nake(ナ)・ Benake(ナ)・ Baro(ロ)・ Gu(ロ)・ Gucha(小屋) とあるのに、ベチホラーの辭書には Penake, Panake, Paro,

Ku, Kucha とあるやうに清濁兩様にあらはれるけれども、むしろ濁音を清音にしてしまふことが多い。純粹のアイヌ人ほど清音を用ひることが多いのだから、東北人とは正に反對で、東北人の濁音化がアイヌ基層から來てゐるとも遽かに斷定できない事情にある。この問題は將來の研究に俟つべきものである。

四 關東方言の成長

日本民族の進出が日本海方面に於て古くから進んで居り、鎌倉時代に於てこの方面の布教僧の入り込んだものは越後方面よりしたことを考へると、京都からの文化が直接にこの地方に傳り、關西方言の放射も相當に勢力があつたことが想像できるし、又實際方言上にもこの事實を反映してゐるのであるが、東北全體を通觀すると、この地方に進出した日本語は關東方面より來たものが大勢を支配し、時代を追うての改新も同じ性質のものであつたと云ひ得るやうである。

奈良朝時代の東國方言はわづかなから萬葉集の東歌や防人歌で窺ふことができるが、その一つの特徴は

あが手とつけろ。これのはるもし
あどせろ。とかもあやにかなしき

の如き「ろ」と云ふ命令形であつた。然るに今日の東北方言の分布を見ると、これが山形縣の莊内地方を除く東北方言一般の性質を成してゐる。

今一つの特徴は

會津嶺の國をさ遠み逢はなはば

往にし宵よりせろに逢はなふよ

眞小鷹のふのま近くて逢はなへば

書解けば解けなへ紐の

の如き否定の云ひ方で、これが今日の關東方言の否定のナイと關係があることは多くの學者の認めてゐることであるが、東北方言は例外なくこの形を用ひる。

その後、京畿地方の言語が東國に於て發達し、東北地方に流れた迹が著しく、ロドリゲスの日本語典にある方言の記載は室町時代の終の方言について多少教へる所があるが、それに關東の特徴の一として

直接法の未來形には多く助詞ベイを用ひる。たとへば參リマオースベイ、上ゲベイ、讀ムベイ、習オーベイなど

とある。「平安朝や室町時代に中央で用ひられた「べい」は

ナカスヘイ處テ、ナカセ、ワラハスヘイ處テ、ワラワスルヤウニ機ニ應シテスルソ（桃源抄一）

理ノアルベイ様ニ行ホドニ（史記抄）

など連體形に用ひられたもので「べき」の音便であるが、それが關東方言に特有の未來推量の助動詞として發達し、いはゆる「關東べい」といふ名も生じたものだが、是が今日は東北方言の特徴となつてゐる。

もう一つロドリゲスの擧げてゐる關東方言の特徴に

移動をあらはすエ（方向を示す「へ」）のかはりにサを用ひる。都サ上ルのやうに。

といふのがある。これがまた今日の東北方言の特徴となつて居る。

關東方言は民族がこの地方に拓殖した結果擴つた日本語であるから、その持つてゐる性質は何らかの形で中央の言語を繼承するものであるが、奈良朝の昔に於て中央の言語とちがふ特質を發達させて居り、その後も引つゞき特異の形態を作り出したことは以上述べる少しばかりの記述によつても想像できる。東北方言はまたこの關東方言の延長であるが、この點に於ては東北方言の關東方言に對する關係は、關東方言の京畿方言に對する關係と同一であつたと思はなければならない。

中央に出來た語はたえず或は廣く或は狭くその周邊に傳播するものであるが、各地各地方に種々なる程度の差を以て方言が他と孤立することも避けられない。言語の歴史上働く勢力に二つある。

言語が他に傳り全國的に平均するやうになるのは、言語本來の機能に由るもので、言語は社會の成員が他を了解する目的の下に作り出した記號の體系であるからである。しかし社會はその下位の小社會を作らないで擴めることはできない。大きな社會の中に又小なる社會ができる。社會を結ぶ紐帶が地理的政治的或はその他の事情のために緩かになるに比例し、社會の部分相互の間に漸進的な或は急激な障壁のできるに應じて、社會の一部が他の部の人の理解を求める要求を少くすることがある。この時に言語の上に働くものは習慣を郷土に孤立せしめむとする孤立主義、ソツシュールのいはゆるエスプリ、ヅ、クロッシェ（小林英夫氏の譯語を借りると郷土根性）であつて、廣く理解を他に求めようとする相互交通力、すなはちインターコースに對立する作用である。人は生れて口をきくやうになると共に、その周囲の言語を學び、自分の屬する社會の傳統に忠實に従はうとする。従つて他から侵入する改新はいつか抑殺して互に他と孤立するやうになる。言語の習慣はたえず改新して止まない。たえず文化の中心から語は放射して、各地方の集團は之を受入れて他と通ずるやうになるが、又一方にはこの孤立主義のために各地方の集團はおのづから特殊の様相を呈して他と孤立することを免れない。相互交通力の作用はたえず各地の方言に他郷の言語を受入れしめる結果となるのが當然であるが、いつかその社會の傳統がこの改新を抑殺することになる。

關四方言に特異の語であるとおもはれてゐる「さかい」が東北方言に於て話されてゐることを前

に述べたが、かゝる傳播は相互交通力の結果である。何でも中央で生じた言語變化は波のやうに擴つてどこまでも旅行して行くことを示す。日本において言語の傳播する經路はまだ少しも分つてゐないが、佛國の如き言語地理學の研究のよく行はれてゐる處ではそれがよく分つてゐる。語の旅行は人口の移動、民族の侵入又は商業上の交通の行はれた地理的大交通路によつてゐる。フランスの大動脈はソーヌ川及びローヌ河の廣い沿岸で、此の道は何時の時代でもつとも榮えた大交易路であつた。二千年來南部フランスから北部フランスへ旅行して行つた澤山の言葉は皆この道を通つて北へ行つた。ジリエロンに従へば一たびこの大道に入つた語は必ずその端まで行くもので、道の出口近くを探して見ると、必ず發見できると思つて間ちがひないさうである。

京畿方言で東北に傳つてゐるものは恐らく關東方言が受入れてそれが第二次の中心地となつて東北地方に傳へたものであらう。たゞ江戸時代の中期以後、江戸が政治文化の中心となり、江戸語の勢力が確立して關東方言を感化した爲に、嘗て關西方言で江戸に傳つたものも亡びたものが多かつた。「さかい」は江戸に傳つてもあまり廣く用ひられたものでなく、長く維持されたものでないに違ひないが、江戸の咄本、たとへば「鹿の卷筆」「正直咄大鑑」「枝珊瑚珠」「新話笑眉」など澤山の笑話にも残つてゐるし、高崎城主松平信興の作と傳へられる「雜兵物語」は關東方言でかいてあるが、その中に

數語はおのかまゝに槍をふりくり廻すさかいで、歷々のお傳家と替ることはないもんだ。

など出てくる。今日の方言にも是の崩れた形は關東方言にもあるやうである（『國語と國文學』第十九卷九號拙稿「語源學と方言語彙學」參照）。

今日サカイは關西方言にばかりあるものと思はれてゐる。殊に大阪言葉のもつとも特色のあるものと思はれてゐる。江戸時代に於てすでに江戸の「から」と上方の「さかい」と相對するものと思はれてゐた。三馬の「浮世風呂」に東西方言の優劣争の出てくるのは有名なことで、江戸の女が「江戸子はへげたれじやと云ふはいな」と云はれたことから喧嘩がはじまり、お互に方言を笑ひ合ふ。上方女は

さうだから、かうだからと、あのまアからとはなんじやエ

と江戸の「から」の惡口を云ひ、江戸の女は

からだからサ故といふことよ、そしてまた上方のさかいとはなんだへ

とやり返してゐる。それからいよく言ひ募つて、

からといふ詞のわけさ、能おきよよ、百人一首の歌に文屋の康秀の吹からに秋の草木のしほるればとあるよ、ソレ吹からにネ、よしかへ、吹ゆゑにいふことを吹からにさ、なんば上方でさかいくと云つても吹さかい秋の草木のしほるればと詠みはいたしません

と云つてゐる。そのやうにもう江戸でサカイなどいふ語は親しみのない語であつた。越谷吾山の「物類稱呼」にも

。畿内近國の助語に。さかひと云詞有。關東にて。からといふ詞にあたる也
「浪花聞書」にも

。さかひ 夫じやさかひ或はいふたさかい杯といふ。江戸で間まといふに同じ

と云つて、特に畿内近國の方言の特徴としてゐる。それが嘗て江戸にもあつたのである。又さきに引いた江戸女の言葉の中にナンボといふ語がある。これなども今日關西方言でいふが、又東北方言にも一般に用ひられる。然しかういふ文獻を見なければ、我々はそれが明治初年からわづか六十年前の文化頃（浮世風呂の刊行は文化五年）に江戸に一般に云つてゐたと思ふ人はあるまい。

このやうに嘗て京阪から傳つたものでも、その中間の關東で全く失はれて、後世は關西と東北とで共通してゐるのはどう云ふわけであるかと云ふに、これもシュミットは彼の波動説で説明してゐる。それはA B C D E F G H I J K等といふ方言がある場合に於て、初はこれらの方言は順々に少しづゝの違ひで續いてゐたものであるが、或中心たとへばFが政治上文化上或は經濟上とかいろいろの點で優越してゐる場合、Fからたえず或變化が波動して順次にE D Cと感化する。その結果Cまでは濃厚にF方言化してC D Eの特色は全く無くなつてしまふ。印歐語に於てイタリア語からフ

ランス語に移る場合、ドイツ語からオランダ語に移るやうな場合、漸進的の移り行きがあるばかりで境界線はないが、ゲルマン語とスラブ語との境には截然として言語が中斷される境界線がある。

それはもとA B …… G H といふやうな漸進的な推移をする方言があつたが、互の中心から言語の變化の放射の結果、今までCとDとの關係であつたものが、CとEとの關係となり、全く違ふものになつたのだと説明してゐる。わが方言は同じ日本國家内のもので、相互交通力の作用の結果、このやうな言語の中斷はないが、關東方言と東北方言、關東方言と關西方言との間に相當の聞きのあるのは、江戸若しくは東京を中心とした改新の波が擴り、又他方に於ては京阪を中心とした改新の波が擴つた結果である。サカイやナンボが京阪にあり東北にあり、その中間で亡びてゐるのはさう云ふ關係からである。

五 東北方言と關東方言

江戸時代に出た東北の方言集に左の如きものがある。

仙 臺

仙臺言葉以呂波寄（菊花堂）

享保五年

仙 臺 方 言 編者及び年代不明

方言達用抄(贅庵)

文政十年

濱 荻(匡子)

年代不明

仙臺方言(大里源右衛門)

年代不明

盛岡

御國通辭(服部武喬)

寛政二年六月

山形縣

濱 荻(堀季雄)

明和四年

莊内方晉攷(氏家剛太夫)

天保年中か

今仙臺の「濱荻」を主として江戸時代に於ける東北方言の成長を關東方言との關係に於て考へて見たい。「濱荻」の著者匡子は伊達家の侍女で、江戸藩邸につとめたものであるが、江戸と國許とを往復してその兩者の言葉つかひのあまりに差違のあるのに驚き、仙臺言葉と江戸言葉を對照してこの書を作つた。

濱荻は何時できたものか時代が不明なのが言語資料としてやゝ不利益であるが、それと今日の東京語とを比較して見ると、當時の江戸語で今日の東京語と通するもののあるのは當然であるが、當時仙臺で行はれてゐた語が今日東京に於ける普通語であり、當時江戸で行はれてゐた語としてそれ

に對照してある語が今日は全く東京で行はれなかつたり、又は行はれないではないが、普通の語ではないと云ふ場合が相當に多數に上つてゐるのを發見すると少し異様に感ぜられる。

今「濱荻」の中からさう云ふ語彙を拾つて見ると(括弧の中が江戸語)

いしころ(——)

いがむ(うなる)

ろくでない(——)

はたけ(はた)

はりつけ(はつつけ)

はがゆくてならぬ(かいぐし)

ほてる(おぬる)

ほんとう(ほんま)

ほんのくほ(ほんのくと)

へそくりがね(——)

へびいちご(くさいいちご)

とはうもない(らちもない)

ちらばら(ちらくら)

ちどこまる(まるまつちくなる)

かめのこ(かめ)

かぶとむし(さいかちむし)

からかみ(ふすま)

かまぼこ(こまどうらん)

だしにつかふ(おさきにつかふ)

ためいきをつく(といきをつく)

れんげさう(げんげ)

つまる所(とゞの所)

つけたりをしていふ(尾にををつけていふ)

つるす(つる)

つるしがき(つりがき)

ねむたい(ねむい)

ねそこなつた(ねそびれた)

なきしやくり(すゝりなき)

おだてる(そやしたてる)

おぶさる(おんぶ)

やどかりがに(がうな)

どぶろく(にごりぎけ)

つるむ(——)

まげ(わけ)

こざら(てしほ)

こけ(うるこ)

こしまき(ゆまき)

えんがは(おちえん)

てぐすねひく(はなのあぶらを引)

ねほりはほりきく(ねどひ)

ねちける(わやく)

ねつこ(かぶ)

むつとして(つんとして)

おつかない(こはい)

おこげ(ゆのこ)

やつと(やうく)

なみく〜とついだ(こぼれるほどついだ)

やつぱし(やつべし)

こむらがへり(すちがつまる)

こまづかひ(いたのま)

こしやくをいふ(さしでる)

えんりよ(さしひかへ)

てうずばち(てうずだらひ)

てまいがつて(えてかつて)

てきびしく(てづをく)

あつちこつち(あちらこちら)

あらひざらひ(あるとあるもの)

あんもち(うつらやき)

あてがちがつた(——)

ざる(ひく)

ざうきん(たふ)

きのねつこ(きの根)

ゆつたりとして(たつぷりとして)

ゆすぐ(すいぐ)

しよつばひ(しほがからひ)

しんみりく(しんねりく)

ひとちどみ(ひとすくみ)

もつと(もそつと)

すてばち(むてつばち)

あたま(つむり)

あつけなひ(のこりおしい)

あんぼんたん(興二郎べい)

あけばなし(あとしらす)

あくどひ(ねつひ)

さとつてゐる(けとつてゐる)

さきばしり(いきすぎ)

ゆどうふ(はちはいどうふ)

ゆうくれろ(さゆをくんな)

しちめんだうな(こめんだうな)

しみたれ(しびたれ)

ひまがなひ(日あへがなひ)

ひまをやる(いとまをやる)

するこけた(すべりおちた)

すゝはらひ(すゝとり)

この對照してある語彙を見ると、江戸語が關西方言と共通してゐるものがある。例へば「ゆすぐ」と「すゝぐ」。安原貞室の「片言」には

物の不淨なるを洗ひきよむるをゆすぐといふは如何、すゝぐといふべしとあつて、京都では「すすぐ」である。

三馬の「浮世風呂」に上方者の言葉としては

ヤそりや大變ぢや(略) お前ソリヤ 何さんすのぢやい、早うおこして 其體雪がんせ、勿體ないと云つてゐるが、「東海道中膝栗毛」に蒲原の宿で彌次喜多が泊つた宿屋の老爺の言葉に
上らつしやりませ、ソレそこに水がある。足をゆすぎなさろ

とあるのは、關東方言を示すものであらう。

「呉れろ」と「呉んな」が對照してあるが、「呉れろ」は關東方言の形であり、「くんな」は「呉れな」の音便形であるから、關西方言から來てゐるに違ひない。

又仙臺の「からかみ」に對して江戸語としては「ふすま」を擧げてゐるが、「ふすま」も關西方言である。「浪花聞書」に

ふすま からかみと云
つては不通

と書いてある。

「れんげさう」に「げんげ」が對照してあるが、「げんげ」も同様に關西方言で、「物類稱呼」にげんげ 畿内にてげんげばなと云、江戸にてれんげばなと云ふとある。

東北方言の方が江戸語よりも今日の東京語に近い場合があるが、庄内方言を集めた堀季雄の「濱荻」とか、盛岡方言を集めた「御國通辭」に於ても同様である。

かうして見ると、今日東京語の要素を成すものが寧ろ早く東北地方に發生してゐて、それが後に放射されて東京に入つたと云ふ疑を生ずるかも知れないが、さう云ふことは言語發達の原則として、有り得べからざること、地方特有の事物がその名と共に東京に傳つたやうな場合は格別として、一般に語彙語形は政治文化の中心から外側へ放射するのが通則であるからである。

江戸が武藏野の一角に出來て、各地から集つて來る人々を受入れて大都市として成長して行つた際にあたりては、言語は京阪語その他雑多な要素を集めて、關東一帯に行はれてゐた土語の中に一種特異な方言となり、江戸は關東地方の眞中に在つて一個の特殊方言地域になつたに違ひない。上方の西鶴は「永代藏」の中に、「江戸はわきて人の心ふてきなる所、後目の分別せぬぞかし」と云つて江戸に住む人々が江戸兒氣性になつたやうに云つてゐるが、反對に江戸の太宰春臺は「獨語」の中に、「百年このかたの風俗を思ひくらぶるに、江戸の人の風俗こそ昔に變りたれ、すべて男女の

風俗詞づかひ物の名まで近き比は京に似たり」と云つてゐる。考へ様によつて、これはいづれも事實と云はなければならぬ。各地の人が集つても、江戸の人に感化されて、關東人らしい氣風になり、言語も關東方言に近づいた點もあらうが、又それと共に關西方言の要素を加へたことも多々あつたであらう。まして山の手方面は武家屋敷が並んでゐて下町一般の士民の言語とは趣が違ふところがあつた。江戸は日本全國一般の城下町と少し違つてゐて、武家屋敷が山の手にだけ固つてゐたのでなくて、下町の間に方々に散在して居り、武家言葉が下町言葉に影響したことがよほど深いものがあつたらしい。そのやうな譯で、江戸語は關東方言を土臺としてゐても、自ら江戸周圍の土語とはよほど趣を異にする所が多く、言語學上のいはゆる言語島(Sprachinsel)を成してゐた。この事實は江戸の初期は勿論として遂に下つて文化文政頃にも見られたやうで、三馬の「狂言田舎操」の上巻に、「江戸は繁花の地で諸國の人の會する所だから國々の言が皆開馴て通じるに順つて、諸國の言が江戸者に移らうちやあるめへか。そこでソレ正眞の江戸言は孰が夫だやら混雜に爲たと云ふ者サ」と云ひ、それに次いで

一里も隔つとよつほど異があるテ、江戸から五里十里隔た人が上方に登つて見た。己等江戸ッ子だアなどやらかして江戸者の風をしたがる人もあるし、上方では關東者さへ見れば江戸衆だの、江戸兵エだのと、一同に覺えて取扱ふから、爰で埒はねへ

と云つてゐる。

このやうに江戸周辺の言語は江戸語と違つてゐたが、この江戸周辺の言語は廣く關東一帯の言語と特徴を同じくしてをり、この關東方言が遠く東北地方に續いてゐて、その結果當時の江戸近在の言語の性質は東北地方にも通ずる者があつたと想像される。今日こそ東京の言語が關東方言を感化することが多くて、東北方言でさへもつとも南の福島縣の方言などは東京語の影響を受けて居ると甚だ大なるものがあるが、江戸時代には江戸語と關東方言との關係より關東方言と東北方言との關係が密接であつた。今日の東北方言の特徴として東京語の連濁とちがつて語の第二音節以下のカ行音タ行音を濁音にする事實がある。月がツギとなり、的がマドとなるやうな例であるが、この事實がやはり江戸時代には江戸近在の方言に存してゐた。この事を三馬は「潮來婦誌」後篇卷の上の凡例に

五音の調子によりて濁音（はなごゑ）を濁音（はなごゑ）にいふもの間多し

と特に斷つてゐて、文の中の濁音には特にいふ濁點を附けて書き分けてゐる。

今から旦那様（だんなさま）かたどいたこの稻荷（いなづま）さまサ参り（まゐ）いきます

これは東北方言同様の濁音ばかりでないかも知れない。今日千葉・埼玉・群馬から新潟（佐渡も）にかけてカ行濁音を鼻音でない濁音に云ふから、當時もかゝる濁音が潮來にはあつたと考へられ

る。いづれも皆江戸語と違ふから三馬の耳には異様に響いたのであらう。

「濱荻」は初に云つたやうに、いつ出来たか分らないが、江戸の早い時期に出たものとすれば他の方言特に京阪の語彙を含んでゐるのは當然であるし、比較的新しい時期に出来たとすれば著者の屬した社會層を考へて見る必要がある。著者匡子は伊達侯の江戸藩邸の奥に仕へた女性で、その言語が江戸の一般庶民の言語と同じである筈がない。今日の東京にある語彙で仙臺と同じで、「濱荻」では江戸語と認めなかつたものでも、庶民の階級には比較的廣くあつたもので、江戸の雜然たる各階級に話された言語が融け合つて關東土語を土臺として比較的統一された言語となるに従つて、次第に浮び上つて、今日の東京語となつて居るものであらうと思はれる。

前に擧げた表中の仙臺方言とした幾つかの語は現に「物類稱呼」を見ると、江戸語若しくは江戸近在の語と書いてある。兜虫は「江戸にてカブトムシと云」とある。「濱荻」には江戸語はサイカチムシとあるが、それも並んで行はれてゐたと思はれることは、同じ「物類稱呼」に「此虫は皂夾サイカチの樹に住むし也、但「さいかし」は關東にてサイカチといふ樹也」とあるからである。

オツカナイも江戸近在で行はれてゐると書いてある。「おそろし」の下に駿河より武藏近國にてオツカナイと云ふ云々とある。

「濱荻」にはワゲを江戸語として居り、マゲを仙臺方言としてゐるが、「物類稱呼」ではワゲは

京都語でマゲが江戸語としてある。

髪かみの結びめを京にてわけといふ。江戸にてまげといふ云々と見える。

かう云ふやうに「濱狄」に於ける江戸語と今日の東京語を比較すると、初は江戸には各地特に關西方言の要素が多かつたのが成長して今日の東京語になるまでには、いつか地元の言語である關東土語の潜勢力が伸びて來て土語の要素が成長を遂げたことが分るし、同時に東北地方は關東地方の接壤地帯として、日本語が關東から次第に東北に伸びて行つた關係上、東北方言が關東方言と通ずる性質が多かつたことが分る。「濱狄」に仙臺方言としてゐる者が今日の東京語であると云ふのはつまり其の時代には同時にそれが關東土語であつたもので、東京語が形を成して行く上に關東土語が喰ひ込んで行つた結果、今日の東京語として現れてゐるのだと思ふ。

今日に於ては東京語が全國の標準語となつて、全國の方言を感化することが多く、東北方言がまたその勢力の下にあることは云ふまでもなく、江戸時代に於ても江戸が政治の中心となり、江戸語が形を成したあとは、東北方言が江戸語の要素を取り入れたことも少くはなかつたであらう。

武家時代以前に於ける關東方言はもとより人の齒する所とならなかつた。

拾遺集の物名の部に細蝶こてつをよみ込んで

あづまにて養はれたる人の子は舌だみてこそ物は云ひけれ

と云つて、關東人は言葉が訛つてゐると云はれ、「源氏物語」に東國に長くゐた常陸守は

若うよりさる東の方なる遙なる世界に埋もれて年経ければにや、醇などほと／＼うぢやがみぬべく、ものうぢいふ少しだみたるやうにて（東屋）

と云つて、輕侮されてゐる。

それが武家が起つてからは位地が向上した。日蓮の弟子、日蓮が京都に住んで京都化したとき、「定てことばつき音なんども京訛になつたるらん」と云つて

言をば但いなかことばにてあるべし、なか／＼あしきやうなり（文永六年、法門可被申様之事）

と日蓮が戒めて居る如きは、關東人の自信を物語つてゐる言葉であらう。

江戸時代になつて江戸語の地位の向上と共に全國的に統制力を持つやうになり、上方言葉に對してさへ影響を及したやうだ。三馬の「狂言田舎操」を見ると、上方者の淨瑠璃かたりのはたご大夫が江戸生れのでく藏に對して

ぢやがな、上方も當時は御當地の詞づかひが、えらく流行る、皆お江戸をまねるのぢや

と云つてゐる。「浮世風呂」に江戸女が上方の女に「へげたれじやといふはいな」と云はれて

へげたれでも能のさ、江戸ツ子のありがたさには、生れ落から死ぬまで、生れた土地を一寸も離れねへよ

アイ。おめへがたのやうに京に生れて大阪に住つたり、さまざまにまごつき廻つても、あげくのはてはありがたいお江戸だから、けふまで暮してゐるじやアねへかな

と云つてゐるのは、江戸人のすべてが持つてゐた心持であつたらう。江戸時代の東北方言集が匡子や堀季雄の「濱荻」でも「御國通辭」でも、いづれも皆その土地の方言を江戸語と對照してゐるのは、或點までは江戸語を標準としてゐると思つて差支ない。

六 東北方言と關西方言

江戸語の勢力が確立する以前に於て、言語は江戸を経過して東北に傳つた。江戸語の感化力ができてからも關西方言が江戸に傳り、東北に傳つたことは少くなかつたやうだ。江戸語が上方言葉と相對立するやうになつても、上方言葉の威力は侮るべからざるものがあり、全國に影響してゐた。

江戸語が確立したのは一般に寶曆前後と考へられてゐるが、これは吉宗將軍の享保頃から文化の中心が江戸に移り、狂歌・川柳・黄表紙・洒落本など江戸獨特の文學が盛に出たためであるが、京阪は昔ての文化の情勢を持つてゐてその以後でも上方言葉が全國に影響してゐた。仙臺の「濱荻」には仙臺のコシマキと江戸のユマキとが對照されてゐるが、盛岡の「御國通辭」には盛岡のユマキに對して江戸のユモジが對照されてゐる。ユマキが今の腰卷の意味になつたのは後のことであらう

が、その語は「紫式部日記」などにも見えて平安朝以來の語であり、これを湯具とも云つてその女房詞がユモシであるから、京都が本場であることは云ふまでもない。「物類稱呼」を見ると、京都ではキヤフと云ふ新語が出来てユグは畿内・美濃・近江などの語であり、江戸がユモシとなつて居る。語が中心からだん／＼遠くへ放射される有様が窺ふことが出来る。

今日返事の詞は全國一般にハイであるが、それがもと關西方言で、さう長くない期間に全國を風靡したものであることは、あまり人の氣の附いてゐないことであらう。文政年間に出来た仙臺の

「方言達用抄」に

はい答聲 諸國かはりあり

五畿内にてははい、關東にてあい、陸奥にてない

とあり、「物類稱呼」にも

。他の呼に答ふる語關東にて。あいと云、畿内にて。はいと云、近江にてねいと云（中略）陸奥にてないと云とある。ハアといふのも關西方言であらう。三馬の「狂言田舎操」に上方者の淨瑠璃かたりはたこ大夫の詞に

ハア これ返詞也

とある。特に作者が「これ返詞也」とことわつてゐるのだから、江戸ではハアとは云はなかつたに

違ひない。かう云ふやうに關西方言の勢力は後になつても強かつた。

形容詞の副詞形は關西方言では音便形を用ひて「はやう」「よろしう」「あつたかう」など云ふが、關東方言では音便形を用ひない。然るに「ございます」につゞく場合にだけは、東京でも「オハヤウゴザイマス」「ヨロシウゴザイマス」など云ふ。かう云ふ形が關西方言の影響であることは云ふまでもなからう。返辭のハイとかゴザイマスにつく形容詞の音便形のやうに、とかく丁寧な言葉、上品な言葉と云ふやうな種類のものは京阪の言葉が關東方言に影響したところ特に多かつたであらう。

京阪地方から出たものでも、その後京阪地方に於て跡を留めなくなつた爲に、關東地方から東北地方にかけてのみ行はれてゐるものもある。前にオツカナイは「物類稱呼」に江戸近在や東北地方の方言であると書いてあると云つたが、元をたゞして見れば京阪地方にあつたものである。「好色二代男」五に

我おつかなく思召さずば逢うて給はれと

近松の「用明天皇職人鑑」四に

女御にあけい后に立てよなど申しておやおつかない偽り

など、京阪の作品に見えてゐる。

又「濱荻」に仙臺のタマゲルに江戸のキモヲツブス、仙臺のウツタマゲタに江戸のビツクリシタを對照してあるが、これも「平家物語」に

堀河院御在位の御時、主上しかの如くおびえたまきらせ給ひけり

と云ふやうにタマゲルとあつたのが元で、江戸時代でも元祿文學の上には

先お献立を一見と長々と書きつけたる、半ば讀みさし大きにたまげ、こりやなんぢや（心中宵庚申）のやうに、タマゲルとなつて京阪語にあつた。それが「物類稱呼」には

物に驚くことを東國にてたまげると云

と云つて、もう東國語と稱して京阪語とは認めてゐない。このタマゲルが「濱荻」では仙臺方言として現れてゐる。これもやはり江戸近在には通じてゐたらう。

「濱荻」でもその他の方言集を見ても、東北方言の方が關西方言と共通し、それと對照されゐる。江戸語が關西方言と無關係の場合も少くない。是は今日の東北方言と東京語との比較の上にも見られることがある。臺所の流しは「濱荻」でも「御國通辭」でも江戸でナガシと云ひ、仙臺や盛岡でハシリとある。江戸時代に江戸でナガシ、上方でハシリと云つたことは、「浪花聞書」に

はしりもと 江戸にて云なかしと云
流しと云をはしりと云

とあり「浪華雜誌街能噂」卷二にも

江戸でいふ臺所の流しのことを大阪で走はしりといひ云々

又「濱荻」に恥ぢることを仙臺でワニルと云ひ、それに當る江戸語はハニカムとある。「物類稱呼」を見ると

△しくむと云ふ事を江戸にてハニカムと云、又ビビルとも云（略）關西にてワニルといふ

とあるから、ワニルは關西方言であつたのである。今日ハシリは京阪語であるが、ワニルは關西でどこに在るか知らない。

このハシリやワニルは江戸に在つたかどうか分らないが、さきのサカイの如く江戸人が全く忘れたものが嘗ては江戸にあつたことから考へると、これも江戸に來て東北が傳へたものでないとは云はれない。江戸語が成長した結果京阪語の傳つたものも孤立主義が働いて抑殺しまつたものは多かつたと思はなければならない。

「街能尊」に江戸語のねぎに對して、大阪ではネブカと云ふとあるが、「物類稱呼」にも

多葱 ねぎ。關西にて。ねぶかと云（中略）關東にてねぎといふ。ねぶかは根ぶかく土に入こゝろ胡葱は淺

き葱の意、根深に對したる名なるべし

と云つてゐるが、根深の語源から考へても、この方が根葱に比べて新しいものであらう。ネギは根葱で、「和名抄」に葱、紀とあるし、その熟語の分葱、淺葱、開葱柱（和名抄に葱臺比良岐波之

良、橋兩端所堅之柱、其頭以葱花故云とある）など合せて考へて見ても、根葱が古い語で、これが關東で作られた新語であるとは考へられない。それゆゑに古くは關東關西相通じてゐて、後にネブカができてネギが關東方言のやうになつたものと思ふが、古くからあつたネギの勢力が強くて、ネブカは傳つても間もなく姿を消したとも考へられる。それは東北方言に於けるこの語の分布を見ると甚だひろいものがあり、關東方言に於て相當に勢力を得てから傳つたものと考へられるからである。

東北方言に於けるこの語の分布を示すと

宮城縣福島縣殆ど全部、山形縣置賜地方、岩手縣舊伊達領全部及び和賀・稗貫・紫波・下閉伊諸郡、秋田縣秋田市・仙北・河邊・南秋田・山本諸郡

の如きものがある。江戸時代にこれが盛岡で行はれてゐたことは「御國通辭」に見えてゐて江戸はネギとしてある。今日の分布より江戸時代に於ける分布は廣かつたのである。仙臺の「濱萩」には擧げてゐない。仙臺語と江戸語とを比較した方言集であるから兩者同じ場合は擧げない筈である。仙臺も江戸も共にネギと云つたとも考へられるし、共にネブカと云つてゐたとも考へられる。然し「膝栗毛」には靜岡縣の岡部から少し離れた白子の町の茶屋で彌次郎が「さうさ時に肴は何がありやす」と云ふと、茶屋の亭主が

アイねぶかと鮭の煮たのぼつかし

と云ふ。北八が

イヤねぎまのふろふきそれよからう

と洒落れてゐるのを見ると、江戸はネギで、岡部藤枝近くではネブカと云つてゐたことになる。

遠い昔は勿論その後も、更に又江戸が政治の中心となつた以後も、多くの言語改新の波は京阪から江戸に及んでゐた。奈良朝の昔に於てすでに早く關東方言が或程度まで關西方言とちがつた性質を作り出してゐたらしいことは、萬葉集に於ける東歌の用語の上にも見られることをさきに述べたが、江戸語が獨自の發達を遂げるには關西方言の威力があまりに大きかつた。文運が東漸して江戸語の位地が確立した以後は、關東方言は關西方言に對立する勢を示しては來たが、その後の發展は日がまだ浅い。否定の助動詞が關西方言の「ぬ」に對して關東方言の「ない」であるのと並んで、その過去形は西の「なんだ」に對して東は「なかつた」である。この「なかつた」がまた同時に今日廣く東北方言の形である。然るにこの「なかつた」の江戸に於ける發生は意外にも極めて新しい時代に屬する。

明治の初年から三十七年前天保二年刊行の人情本「假名文章娘節用」(曲山人)を見ると、まだおれはさつぱり知らなんだ(後篇上卷)

さうサ全體あがりなさらんんだが、近頃はよく上るよ（同）

よむ身にならうとは氣がつかなんだ（三篇中巻）

など、三例みなナンダである。ナカツタのあらはれたのはその以後であるらしく、爲永春水の人情

本にはこの語が見えはじめて、同じ年號の天保十年の「辰巳講談梅之春」にはナンダが

オヤ／＼左様かえ些とも知らなんだヨ（巻三）

昨夜も今朝も氣が付きましなんだわ（同）

アノウ私は其の時聴かなんだがネ（巻七）

の三例あるが、同時にナカツタが

私も久しく實家に居なかつたものだから（巻四）

ア、私も最初に聞いた節は、なか／＼おぼえられさうもなかつたが（巻六）

の二例を數へるに至つた。

東京語が全國方言に君臨するやうになり、従つて東北方言がもつばら之を源として發達するやうになつたのは東京が帝都となつてからであつた。

第二章 東北方言の區劃

わが本州方言を東部方言と西部方言とに二大別すると、東北方言は東部方言の一分派となるが、東部方言の他の一半たる關東方言に比較して著しい特徴のあることは人のよく知る所である。

この東北方言は他の方言に比べると、共通の特徴を持つてゐるが、何せよ南北百三十餘里に亙る頗る廣汎な地域に行はれてゐる言語であるだけに、最北の青森縣と最南の福島縣とを比較すれば著しい相違が認められるし、同じ岩手縣でも北半と南半との間には相當の大きい差異が感ぜられる。それ故にこの東北方言は之を全般に亙つてどういふ風な特徴を以て分布してゐるか觀察する必要がある。

余は東北方言に特徴のある語彙や語形をえらみ、五六年まへから三回に亙つて調査票を配布することにより取調べた結果は次の通りである。第一回は東北六縣全市町村數一四四二中、回答を得た市町村數一〇八九で、約七割六分、回答通數二四四五、第二回は回答市町村數一二〇二、約八割五分、回答通數二五四五、第三回は回答市町村數一一四八、約八割、回答通數二八九六である。本書の記述に用ひた材料は多くはこの調査から出てゐる。

東條操氏は東北方言の區分を論ずる際、これを北奥方言と南奥方言とし、北奥方言とは青森・秋田・岩手の三縣、南奥とは宮城・山形・福島之三縣であると云はれた（『方言と方言學』）。金田一京助氏もこれと同じ考へを述べて居られる（『解釋と鑑賞』特輯「日本語の歴史と諸相」）。

東條氏は又別の處では「現在の資料だけで區劃を設定するならば、大體次の三區とならうかと思ふ」と云つて

三陸方言

東北方言 兩羽方言

岩磐方言（福島方言）

とし、附言して「この中でなほ定め兼ねるのは青森の方言である。是は獨立して一區をなすべきものか、或は寧ろ兩羽方言と合して一區を成すべきものか、研究を要するものである。此の點を決定せぬ中は本區劃論は未定とする外はない」と云つて居られる（『國語研究』第二卷第四號）。

方言の分れるのは地理的關係によることもあるが、それよりもはるかに大なる要因となるものは社會的關係である。この意味に於て封建時代に長い間諸侯が割據した歴史的事情が方言の區劃の上に顯著に反映を示してゐることに十分注意しなければならない。

青森縣に於て東西方言を異にするのは、南部藩と津輕藩とが封を異にすること久しかつた爲であ

らうし、同じ岩手縣では氣仙・江刺・膽澤三郡の北境にその以北の諸郡と隔絶した地理的境界のあるのでないのに方言の違つてゐるのは、南部領と仙臺領とがこの線で分れてゐた爲である。

ベハーゲルが高部ドイツ語と低部ドイツ語との分れる等語線の一つ一つが皆昔の政治區劃を反映してゐると述べてゐることは、この問題を論ずる自分にとつて極めて興味あるものである。原始ゲルマン語の無聲破裂音が低部ドイツ語に於て保存され、高部ドイツ語で摩擦音又は破裂音になつてゐることが、兩者を分つ標準になつて居るが、それが個々の場合に現れる等語線は大きい東になつて、或場合は一致し、或場合は分れ、時に互に切斷することもある。ライン川の東方約四十キロの地點においてこの大東の等語線が分れ、北西と南西とに向つて開けていはゆる「ラインの扇」と稱せられる形狀を呈してゐる。方言區劃の一標準として *maken* と *machen* (共に「作る」といふ動詞)をとれば北方形の [k] と南方形の [x] を分つ等語線はベンラート市の正北でライン川を横切り、いはゆるベンラート線を成す。この線がラインの東にあつたベルグ公國とラインの西にあつたユーリッヒ公國との領土の昔の北境にほぼ一致してゐる。「私」といふ意味の代名詞 *ich* と *ich* に現れる [k] と [x] との等語線は、少し北西に偏つてウエルディンゲン村の北でライン川を横切り、ウエルディンゲン線と云はれるものを成してゐる。これが又ナポレオンに由つて廢されたユーリッヒ公國とベルグ公國並にその間に挟まれてゐるケルン選帝侯の北境と一致して居る。尙西南に分岐して居る二

本の等語線があつて、その一つは「村」といふ意味の名詞 *dorp* と *dorf* といふ語にあらはれる北方形 [p] と南方形 [f] との境界線で、それがユーリッヒ公國、ケルン大僧正領並にベルグ公國のトリエル選帝侯に對する一七八九年代の南方境界線とほぼ一致して居る。今一つの等語線はそれより南を走つてゐて、「それ」といふ代名詞 *dat* と *daz* とにあらはれる北方形 [t] と南方形 [s] とを分ち、この線がまた選帝侯トリエル大僧正領の昔の南方境界線とほぼ一致して居る。新しい政治的疆域の出来る場合、五十年以内に或言語變化を生じ、久しく存した政治的區劃に沿ふ等語線は多少の動搖を以て約二百年の間残ると信ぜられてゐる。現に自分は東北方言を調査するに方つて、明かにこの種の要因が方言區劃の上に働いてゐることを知ることができた。

今東北地方に於ける大名所領の主なるものを擧げてその沿革を畧敘すれば

弘前藩——天正年間津輕爲信この地を平定し豊臣氏に款を通じて所領を安堵せらる。慶長中徳川氏に服し子孫世襲、文化年間十萬石餘となる（黒石藩——津輕氏支封）。

盛岡藩——南部三郎光行頼朝の奥州征伐に従つて功あり、襍部五郡に封ぜられ代々三戸城に鎮す。寛永年間盛岡に移り子孫世襲、文化五年二十萬石となる（七戸藩、八戸藩、共に南部氏支封）。

秋田藩——津輕の安東氏の族こゝに居住、秋田城介實季に及んで慶長中常陸安戸に移され、佐竹義宣水戸より移り二十萬五千八百餘を領し子孫世襲。

龜田藩—初め最上氏所領、元和九年岩城氏信濃より移つて二萬石。

本莊藩—初め最上氏所領、元和九年六郷氏常陸より移りて二萬石餘。

矢島藩—生駒氏八千石。

仙臺藩—初め國分氏居住、慶長五年伊達政宗築城して子孫世襲、六十二萬石餘（一ノ關藩田村氏—伊達氏支封）

新庄藩—初め最上氏所領、元和八年以後戸澤氏の治下となる。六萬八千石。

山形藩—延文元年足利兼頼こゝに居り最上氏と稱し子孫繼承。元和八年所領を沒收され、鳥居氏の治下となる。以後保科氏結城氏奥平氏堀田氏大給氏秋元氏等幾たびか領主をかへ、弘化二年水野氏遠江より轉封五萬石。

庄内藩—武藤氏累代居住、天正中最上氏の治下となる。元和八年酒井氏信濃より移り世襲、十七萬石。

上山藩—初め足利滿兼居住、天正慶長の交最上氏の治下となる。元和 年能見氏の所領となり、寛永三年蒲生氏新治。その後土岐氏金森氏を経て元祿十年藤井氏備中より轉封、三萬石。

米澤藩—天文以後伊達氏住居、天正年間會津領となり、慶長以後上杉氏の治下となる。十八萬七千石餘。

會津藩—蘆名氏累代居住、天文年中米澤の伊達政宗之を奪ふ。天正年間蒲生氏伊勢より移り、慶長三年以後上杉氏所領。同年蒲生氏宇津宮より來り、寛永四年加藤氏伊豫より移りて二代、寛永二十年保科氏山形より轉封、世襲、二十八萬石。

福島藩—應永中伊達氏ここに居る。天正年間會津領となり、後幕府直轄、延寶七年より天保二年まで本多氏。貞享三年より元祿十三年まで堀田氏所領。以後板倉氏世襲二萬石。

中村藩—相馬氏累代居住、六萬石。

二本松藩—陸奥探題畠山氏累代居住、天正年間伊達氏領となり、後會津領となる。寛永四年松平氏下野より轉封、同五年加藤氏、春より轉封。同二十年丹羽氏白川より來り世襲十萬石餘。

三春藩—田村氏累代居住、天正年間會津領となる。後寛永四年加藤氏、同五年二本松より松平氏、正保元年秋田氏常陸より轉封五萬石。

平藩—岩城氏累代居住、慶長七年島居氏の治下となり十二萬石。元和八年内藤氏上總より轉封七萬石。延享四年井上氏常陸より移つて六萬石。寶曆六年安藤氏美濃より轉封世襲五萬石。

棚倉藩—初め立花氏所領、元和八年丹羽氏常陸より來り五萬石、寛永以後内藤氏太田氏越智氏等領主となり、慶應二年阿部氏白川より移つて十萬石。

白川藩—結城氏累代居住、慶長三年以後會津領、寛永四年丹羽氏、同十二年榑原氏の所領となり、慶安二年本多氏越後より來りて十二萬石、天和元年奥平氏下野より、元祿五年結城氏山形より轉封、寛保元年以後久松氏の所領となり、文政六年阿部氏武藏より轉封して十萬石を領す。

以上諸大名の領地は別圖の如きものである。

余の調査の結果によると、大體に於て北奥方言と南奥方言とに分ける説は正鵠を得てゐるが、諸

氏が方言區劃を縣知によつて設定されたことには大なる不滿を感じてゐる。すなはち東條・金田一兩氏共に岩手全縣の方言を北奥方言に入れ、宮城縣以南の南奥方言と對せしめてゐるが、岩手縣の北半と南半との差は、岩手縣と宮城縣との差よりもはるかに大きく、岩手縣の南半は之と同縣の北半と分つて宮城縣と一括しなければならぬ。岩手縣の膽澤・江刺・西磐井・東磐井・氣仙の五郡は實に伊達領であつて、その北部上閉伊・下閉伊・和賀・稗貫・紫波・岩手・二戸・九戸の八郡は南部領である。これが同じ岩手縣の中で前者の方言と後者の方言とが甚だしく違ひ、前者が同じ伊達領の宮城方言と似てゐること甚だ大なる所以である。

仙臺稅務監督局編「東北方言集」に説く岩手縣の方言區劃も同様の誤をしてゐる。すなはち同書には岩手縣を縦斷線を以て東西に分け、中通地方、東磐井・西磐井・膽澤・江刺・和賀・稗貫・岩手・紫波・二戸諸郡及び盛岡市と、海岸地方・九戸・下閉伊・上閉伊・氣仙の諸郡とに二分してゐる。氣仙郡はもと伊達領に屬してゐた。この爲にこの郡の方言は北の上閉伊・下閉伊に似てゐると云ふよりも、はるかに中通地方伊達領であつた諸郡に近く、それよりも宮城方言に通ずる所が大きい。

以上の理由から余は東北方言を北奥方言と南奥方言とに分つに方りては、その境界を岩手縣と宮城縣との縣界を以てする事を不當として、之を岩手縣の南部領と伊達領との境界線に置くべきもの

と主張したい。この事は本書を通讀する讀者が隨所に於て發見せられることであると思ふ。

同じ意味に於ける相違は青森縣に於ても認められ、同じ青森方言と云つても東半と西半との間には相當に大きな差異がある。東西兩半の方言の特徴にして兩者に通ずるものもあるけれど、かゝる性質のものは大抵北奥方言全體に通ずるもの、若しくは山形縣の庄内地方及び秋田縣全體に通ずるものが多い。

山形縣方言も諸氏が漫然として南奥方言に屬せしめてゐたことは、事實の調査が不十分であつた爲である。庄内地方すなはち東田川・西田川・飽海の三郡はその縣下諸郡と格段なる相違を持つて居り、この地方のみは全く南奥方言と切離して北奥方言に屬せしむべきものである。前記稅務監督局編「東北方言集」に山形縣を村山地方、置賜地方、庄内地方に三分したのは大體當つてゐるが、三者鼎立するものでなく、前二者は多くの點に於いて相通するものであり、第三のものと對立してゐる。最上郡は山形縣師範學校編「山形縣方言集」に一方言區域としてある。これは一理あることで、こゝが元和以來長く新庄藩の蟠居したところであることと最上川の水運によつて庄内方言の影響を受けることの大きかつた爲一方言區劃を成してゐることは疑はれないが、本來の系統上村山方言と關係が深く、従つてその主な特徴から云へば村山置賜方言と一括されて庄内方言に對峙することになる。以上のことを考へて日本海方面に於ける北奥南奥の境界は庄内地方とその他の郡との間

に設定すべきものとする。

進んで下位の方言區劃を論ずることは研究の日の浅い自分の如きものの能くする所ではない。これにも諸藩の政治區劃の關係することの大きいことは疑はれない所で、會津藩と會津藩領幕府領とを併せて會津地方（若松市・北會津郡・南會津郡・大沼郡・河沼郡・耶麻郡）が一方區劃を成す如き、相馬領に屬した相馬郡と雙葉郡の一部がまた一區劃を成す如き、福島縣の中通地帯が小藩・幕府領・社寺領等の犬牙錯綜してゐた爲小方言に分裂してゐる如き、その他この種の事實は方々に觀取できることである。山形市の香澄町の一郭が山形市の一型アクセントの中に在つて言語島を成すのも轉封の結果であることなどを述べれば限りがない。

交通の關係も考へなければならぬ。庄内方言が東北方言の中に在つて著しい特徴を持つてゐる一つの原因は、酒田港が交通の要衝で上方筋との間に密接な關係を持つてゐた爲と考へられるし、青森縣の下北半島が同じ南部領でも上北郡・三戸郡と異なる方言の多いことや、八戸市の方言が周圍の方言の中に著しく違つた性質を持つてゐる如き、これらは全く海路からする交通の關係に由るものであらう。

第三章 東北方言の音韻

一 母 音

アイウエオの五母音のうち、アとオとはアが調音位地の浅いこととか、オが唇のまるめの少いこととか云ふことの外、取立てて云ふべきことはない。

イはそれが單獨に現れる場合には、南奥方言ではすべてエとなり、

イ(目)	e	イロ(色)	ero	イト(糸)	edo	イス(椅子)	esui
------	---	-------	-----	-------	-----	--------	------

ロイ(鯉)	koe	クイ(杓)	kūie	イソグ(急ぐ)	esogiu
-------	-----	-------	------	---------	--------

などeと云ふ。このエは標準語のエと違ひ、イとエとの中間音である。但し漢語の場合には多くはこの訛が起らない。

イが他の母音と融合して音節を形作る場合はいはゆる中古母音、すなはちiとuとの中間で發せられる一種の混合母音である。これを音聲記號のīを以てあらはす。この音は東北方言の著しい特徴として人の注意を惹くもので、同じ音が越後にもあり、京阪方言の影響で途中を遮斷されて又出

雲にあらはれるのみならず、南の沖繩方言にも存するから、遠い太古の日本語にもあつたらしく、嘗ては祖語に *i* と *i* との二種があり、中央に於ては *i* に統一されたが、東北地方その他で *i* に統一され、南島に於ては今なほ二種を存してゐるものと考へることも出来さうである。

この *i* がキシチニヒミリの中にあらはれる爲に東北人の發音は特異の變を持つのであつて、之を以て東北方言の發音の最大の特徴であると云つて不當ではあるまい。

この *i* が東北方言でシ、チにあらはれる場合を人はもつとも注意するが、キヤリにあらはれる場合一種特別な變を生ぜしめる。秋田の郷土研究家奈良環之助氏の談に、東北方言の特徴としてシ、チツの混淆を云爲し、シヤチの發音をむづかしいやうに云ふのは誤で、秋田人にはシヤチなど發音するのはさうむづかしいものではなく、キヤリを發音するのがもつとも困難である。東北辯を利用するにはこの音を捉へるのがもつとも良い。吉川綠波がよく東北人の口眞似をするときこの音を利用するが、あれがもつとも東北辯の特徴を捉へたものだと思ひ居ると話してくれた。キの子音は破裂音であつて後舌が軟口蓋に密着してそれを押開かなければならず、リの音は一種の流音であるが *d* の破裂音とほゞ似た場所に一旦舌端がついてやがてそれを離さなければならぬのだから、口の開きの狭くて前舌が少しばかり上り氣味であるだけの *i* を以てしては、到底東京人のやうな齒切れのよいキヤリを發音できる筈はない。同氏が云ふにはキは自分がケといふ心持で發音するとき

標準語のキに近くなり、リはレといふつもりで發音すれば、標準語のリのやうな音になる。自分が若いとき、東京に遊學してゐたころ、學校で組長をしてゐて禮の號令をかけると、或意地の悪い生徒がゐてどうしても命を奉じてくれない。詰るとそれはレイと聞えないからだ（つまりリーとか聞えない）と抗辯したといふ話をしてくれた。

青森や秋田の人にキ、リなどの場合どう標準語と違ふと思ふかと尋ねると、しば／＼上下の齒を噛みしめるやうに發音するといふ答を得た。イの場合も同じだと云ふ。それはつまり口の開き方が足らず舌の上り方も不十分で、舌尖は却つて齒莖に近くなる發音であるからである。それでは標準語のやうなキやリの音は出ない。ケやレと發音すればやゝ標準語のキやリの音に近くなると云ふのは、eの母音をつけて發音すれば舌と口蓋の距離がいくらか開いてkやrの子音を響かせるに樂になるからであらう。

主觀的の觀察を補ふものは實驗音響學的の觀察であるが、小幡重一氏の音響スペクトルによるフォルマントの分析の結果を引用すると、小幡氏は北山長雄氏（青森高等女學校教諭）の發音についてiに二種類あることを述べて（音聲の研究第六輯「東北方言の物理音聲學的研究」）

- (a) *sai*（煤）、*siragi*（白へ）、*siue*（漣）、*tsidzi*（土）、*tsindzi*（地圖）の如くs或はtsのiは基音が著しく現れる。

(b) その他の場合、例へば *Fuion* (一人)、*kuŋu* (蕭々)、*dʒonko* (草履) 等に於ける *i* は第二倍音が著しい。これが寧ろ純粹の形であらう。

と云つて居られる。さきに奈良氏の談を掲げたが、東北方言に於ける *kyari* の音が一種特徴のある響を持つてゐることは、この實驗的研究の示すところとも一致してゐる。

單獨の *i* は南奥方言に於ては *u* に轉すると云つたが、北奥方言に於ては同様の現象もないではないが、主に *ŋi* チリ等子音と複合する場合と同じ *i* が現れる。

單獨の *i* に中古母音のあることが北奥方言の一つの特徴であるやうに思ふ。金田一京助氏の「北奥方言の發音とそのアクセント」(『音聲の研究』第五輯)によると、岩手縣にはこの音はないやうであるが、氏が「*i* は東北にはない中略」、但し盛岡近郷の農家の發音には *i* を [iɯ] に近く發音するのがあるが、吾々は小供の時にそれを *yu* と口眞似して笑つたものであるが、今もさういふ發音が存在するかどうか詳にしない」と云つて居られる。その發音の實際はよく分らないけれども、秋田・青森等に普通にある *i* のことを指すのではないかと思ふ。然らば秋田・青森のみならず岩手縣北部にもあつたもので、北奥方言一般の特徴であつたものではないかと考へる。

北奥方言では *u* が *i* に近く發音される。南奥方言とは反對である。秋田・青森の人について聞いた主觀的觀察はさうであるが、小幡氏の實驗的觀察も同様であるらしく、北山氏の發音について

eはさきに挙げた子音につくiの第二類(キ、リの場合)と區別し難しと云はれる。

單獨のiについては *idagui*(痛く)のiは第一類に屬し、*idoko*(糸)のiは第二類に屬すと云はれる。

國語のウはヨーロッパ諸國語のuと違つて唇のまるめがない爲に、音聲記號で[u]を以て記されるが、この[u]がまた東北方言では中舌母音としてあらはれ、イとウとの中間で發音される。之を[u]であらはす。口の開き方が狭くなると共に後舌に寄つた處が少し上るだけで、その上り方が極めて鈍い。イと違ふ所に舌の上るのがiの場合はやゝ前の方であり、ウの場合はそれに比べて少し後であると云へるまでである。東北方言でシとス、チとツとが混同すると云ふのは、この性質に原因してゐる。

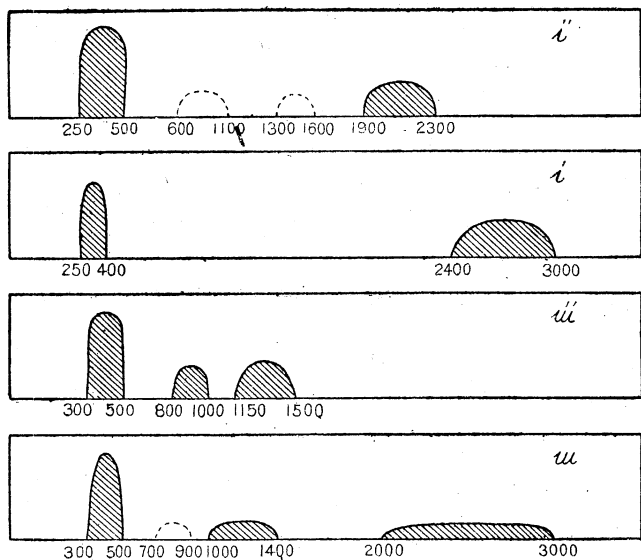
このシス、チツ、ジズの混同の上にはあらはれる傾向は、北奥方言と南奥方言とで明かに區別があり、北奥方言はイ列音にかへ、炭はシミ(*simi*)、鮎はシシ(*sisi*)、すず(徳利)はシジ(*siji*)のやうに發音する。勿論標準語のシの假字の示すやうな響でなく、スイといふやうな音で「數學」と云ふのがスイガクのやうにきこえる。南奥方言では反對にシチジをスツズと云ふやうな發音にしてチ(乳)をツツ(*tsutsu*)、スシ(鮎)もシシ(獅子)もスス(*ssu*)のやうに響かせる。山形縣方言は北奥方言に近く、前者の發音であると云ふ説もあるが、仙臺・福島と共通な性質を持つて居るやう

で、自分は長井町の人が祭の獅子舞の獅子をオスシサマと云つて何を意味するか分らなかつたことを記憶する。すなはちイ列をウ列化する傾向があるのである。二にもこの傾向があつて、「今日は」をコンヌツワと云ふやうに發音する。

東京語のスズヤツにあらはれる[w]は中古母音で、東北方言の[i]と全く同じ音でないとしても極めて似た音である。それはs・z或はtsの爲に自然舌が前の方に寄ることにより變容するもので、東北方言のウ列音は大體そのやうなものと思へば、この方言の發音の性質もほぼ推察し得るであらう。

シスチツの發音が某氏の云ふ如くキヤリの發音に比べて東北人にさう困難でないとしても、教育の普及する以前に於ては發音し分けられなかつたことが實際の事實であつて、今も知識の程度の低い人はよく混同する。或中年の人が子供の時代に之を區別するために文字の上で「長いシ、結んだス」と云はれたと云ひ（青森縣）、或人は「長いシ、短いス」と教へられた（秋田縣）と云ふ話をしてくれたやうに、兩者はいつも混同してはつきりした發音の意識を持つてなかつたから、文字の上だけでおぼえたのである。

小幡氏はi・iiのフォルマントをかくげ、之を標準語のi及びuに比較して、フォルマント圖を以て次ページの如く示し、東北方言のi・iiは振動數二千乃至三千の高いフォルマントを缺いてゐると述べて居られる。このことは東北方言のその他の母音にも通ずる一般的性質で、小幡氏は



東北音は一般に音色の鋭さが缺けて居ると云ふが、一種暗い感じを與へると云はれる事の原因の、つは恐らく此の性質に依るものであつて、發音機構の一般の特色に基くものであらう。

と云はれる〔音聲の研究〕第六輯「東北方言の物理音聲學的研究」。

この中舌母音は今日の東北方言の一個の特徴であるが、これが出雲地方にもあり、又伊波普猷氏によれば沖繩の先島方言にも存すると云ふことである。さうするとこれも太古に於ては國語に廣く存在したもので、今日極北と極南の周邊にのみ残つたと考へるべきものであるかも知れない。

東北方言に於てはエがヤ行のエ即ち[je]といふ發音として現れることがある。それが南奥方言に於て往々摩擦音の響を伴つて、枝がゼダ、蝦がゼビのやうなることはこの爲である。金田一氏も

エは[e]でよいと思ふが、吾々の一時代前の父や伯父や國の老先生や、その他の發音によくye即ち[je]であつた。エゾをイエゾ、エー(良い)をイエーなどいふのを、私達兒供はよく口眞似して笑つて叱られた。今でも近郷の人及び青森縣・秋田縣の友人に聞くことがあるから、東北方言の中の一つの特徴と見ることが出来る。チャールス・ダラスが米澤方言に就て中央のiが悉くeになつてゐ、中央のeが悉くyeだと觀察したことを想ひ出す。のみならず山形縣では外に、西村山郡西根村の友人二人に、又福島縣では二本松の友人二人と女中一人にこの音を聞いてゐる。

と記して居られる(「音聲の研究」第五輯)。

母音が二つ並ぶ場合は、東北方言では融合して長母音となり、更に短音化することが多い。

かゝる場合に生じたエは[e]である。[e]は[e]に比べると、開口の度の大きいエで、ai ae等の連結が融合した場合に現れる。ie ei 或は oe oi ue 等が融合して出る場合は閉音のeである。

[e]を宮城縣の方言の例にとると

センダイ (仙臺) jendai > jende:

ゼンマイ (薇) gemmai > gemme:

モツタイナイ(勿體ない) mottainai > motta ne:

カイナイ(弱い) kainai > ke:ne

マイリス(参ります) maisiisu > merisiisu

ハイル(入る) hairu > heru

タイガイ(大概) taigai > te:re:

マイユチ(毎日) mainidzui > me:niidzui

マエカケ(前掛) maekake > ne:gage

カエル(歸る) kaeru > keru

以上は ai 若しくは ae の融合の結果あらはれるもので、いづれも [e] であるが、次の如き場合は同じエであるが [e] である。

ie > e:

メール(見える) mieru > me:ru

ケール(消える) kieru > ke:ru

オッシェル(教へる) ojeru > offeru > offeru

ai > e:

ケート (毛糸) keito > ke:do

テーシユ (亭主) te:ʃiu > te:ʃiu

ヘータイ (兵隊) heitai > he:te:

シエセギ (成績) ʃe:ʃe:gi > ʃe:ʃe:gi > ʃe:ʃe:gi

oe > e:

オベデル (おぼえてゐる) oboederiu > obe:deriu > obederiu

キコエスガ (聞えますか) kikoestika > kike:sutika > kikesutika

oi > e:

オモッシェー (面白ス) omoffoi > omoffe:

オモイ (重ス) onoi > one:

ue > e:

ケー (食) kite > ke:

ウエキ (植木) itegi > we:gi

同一語中にこの二種のエがあらはれる場合にもその區別がある。

デーヘーラク (太平樂) taiheiraku > te:heragu

セーレー (祭禮) sairei > sere

このやうに國語化した語にはこの長母音化したものがあるが、漢語と意識されるものには殆どあはれない。それでも或地方の村長が最敬禮を *segerete* など云ふのを聞いたことがある。

同じ理由で語幹にア列音のある形容詞は語尾がみな *ei* の長音になり、北奥方言では皆短音となる。

タケー (タゲ) (高) tagai > tage: > tage

ウルセー (ウルセ) (うるさ) ürüsai > ürüse: > ürüse

うまい (うまさ) ümai > üme: > üme

きたない (きたな) kitanai > kitane > kitane

クセー (ノセ) (くさ) küsai > күse > күse

以上に限らず、すべて母音の連結は融合する傾があり、

アサド (足跡) asado > asado

トラゲババ (産婆) toragebaba > toragebaba (秋田方面)

の如く *ia* が *a* となることがあり

コノゲ (眉) kaonoge > konoge

の如く *ao* が *o* となることがある。

母音の連結から長母音を生じ、やがて短音化するのみならず、東北方言では本来の長母音を短音化する傾向が甚だ強い。

サド (砂糖) sado

ホイジヨ (庖丁) hoedzo

エシヨ (衣裳) elo

オシヨスエ (お笑止) ofosite

これは仙臺方言から挙げたものだが、北奥方言には一層この傾向が強く、秋田縣には

今日 キヨ

大事 オゴト

雑煮 ゾニ

中氣 チュギ

風鈴 フリン

その他「秋田方言」にはア行二例、カ行十例、サ行二十八例、タ行三十三例、ナ行一例、ハ行二十五例、マ行二例、ヤ行四例、ラ行一例、合計百六例を挙げてゐる。

以上述べた母音連結の融合、長母音の短音化などの傾向は古代國語の習慣がなほ残つて居るのではないかを思はしめるもので、奈良朝の國語を見ると

あらいそ (荒磯)

ありそ

このうれ (木末)

こぬれ

くれのあゐ(吳藍)

くれなゐ

ながおし(長押)

なげし

さゞれいし(細石)

さゞれし

あまおり(天降)

あもり

わがいは(わが家)

わぎへ

ゆくといふ(行くと云ふ)

ゆくとふ

と云ふやうに母音の連結を避けるが、これらも二つの母音が融合する時、一たびは長母音が生じたものであらう。

國語に長母音を生じたのは漢語の渡來以後のこと、はじめは母音の融合から一時生じてもやがて短音化したに相違なく、チェンバレンも *Essay in aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language* (Transaction of the Asiatic Society of Japan. Vol. XXIII Supplement. 1895 P. 13) に

近代の日本語には a e i o u の五つの短母音と o u の長母音がある (a e i は唯時にあらはれるだけ)。然しこの長母音が固有語に現れる時はすべて母音融合の結果に歸せらるべきもので、例へば *kojo* (頭) が *ka-nde Oosaka* (大阪) が *Oosaka Sa* (吸ふ) が *Sufu* 等であるやうなものである。日本語の長母音は漢語起源の語に於て生じたもので、従つて外來のものとして除外すべきものである。

と云つてゐる。

鼻母音も東北方言の特徴の一である。東北人の發音が鼻にかゝると云はれるのは、この鼻音が多

くの發音の間にあらはれるからであらう。これはカ行サ行ダ行バ行すべて濁音の前にあらはれる。

鍵 *kūgi* 禿 *hūge* 釘 *kūji*

以上カ行(*g*)のまへ

水 *mīdzū* 風 *kādze* 膝 *hīdza*

以上サ行(*dzg*)のまへ

角 *kādo* 二度 *nīdo* 腕 *ūde*

以上ダ行(*d*)のまへ

蛇 *ābiu* 蝦 *ēbi* 疣 *ēbo*

以上バ行(*b*)のまへ

但しこれは標準語に於て同様濁音である語の場合であつて、標準語に於てカ行タ行の清音である

語が東北方言で濁音になる語の場合は、そのまへの母音は鼻音化しない。従つて

月 *tsūgi* 襪布 *tsūji*

鷹 *taga* 簞 *tāga*

莖 *kūgi* 釘 *kūji*

刷毛 *hage* 禿 *hūge*

柿 *kaʃi*

鍵 *kāʃi*

掛ける *kageriŋ*

蔭ける *kāgeriŋ*

明ける *ageriŋ*

上げる *āgeriŋ*

以上各行のさく

旗 *hada*

肌 *hāda*

的 *mado*

窓 *mādo*

又 *mada*

未だ *māda*

鉢 *hadzi*

恥 *hādzi*

松 *madziŋ*

先づ *nādziŋ*

と云ふやうな區別を生じ、鼻母音が意味の區別に役立つものであり、東京語に於いて「あなた」が *āta* 「してやがる」が *ʃieāru* となるやうな鼻母音が音聲として現れるのと違つて、正に音韻として差別を持つてゐることは、他地方の人の氣の附かないことであらう。

サ行音はカ行音タ行音の如く方言的に濁音になることはないから、方言的濁音と本來の濁音とがその前の鼻母音の有無に由つて區別されること、カ行タ行の場合の如き事情は起らないが、ただ東北方言ではサ行の子音が *dz* であるためにこの行のイ列ウ列が *dziŋ dziŋ* となつて、タ行の方言的濁音チヅ

との間に同音語を生ずる場合には、同じく鼻音の有る無しによつてその意味が區別される事情のあることは、次の如き例の示す通である。

口 *kiidzi*籤 *kūdzi*勝 *kaczi*火事 *kadzī*靴 *kiudzū*葛 *kūdzū*持つ *modzū*百舌 *mōzū*

鼻母音があるとその次の濁音が往々にして無聲化し、その上にその次の母音まで無聲化させるところがある。

ミツパ (三葉)

mitsūpa

マツパ (松葉)

matsūpa

マツ (先)

mātsū

クビタ (頸)

kūpita

テブソク (手不足)

tēpūsoku

カチカ (河鹿)

*kāčika*ムツケル (むすかる
すねる)*mūtsūkerū*

この無聲化はなほそのあとの音節にまで及ぶこともある。

アンチコト (案じ事) *atjikoto*

ミツパナ (水漬) *mitsupana*

鼻母音が次の音節を無聲化する場合には、往々一個獨立の鼻音を發達させることがあり、延いてはその前の音節そのものが鼻音となることがある。例へば

マンクソ (馬糞) *man'kuso*

エンチコ (嬰兒籠) *ensi'ko*

の如きは鼻音が一音節を成してゐる。

「かはゆい」ことを東北地方でひろくメンコイ、メンケといふのもこの例である。

メンケ *menke*

メンコイ *menkoi*

これは古い時代の「めぐし」から來たものである。

仙臺では「火事だ」と云ふことをカンタと云ひ、「火事でないか」と云ふことをカンテネーカと云ふ。「上手だ」はジョンタ、「上手でいらつしやいますね」はジョンテアラサスベーと云ふ。掛金(錠)がカンカネ、これらみなその前の音節の鼻音化した例である。

「さうだけれども」が南奥方言で

ソーダゲントモ ソーダゲンツオモ

等となり、「さうだから」が北奥方言でソダハデと云ひ、それが

ソダハンデ

となる如きも、この音韻法則で説明できる。

仙臺の或商店に清治と云ふ小店員があつたが、セイジドンとも呼ばれ又略してセントンとも呼ばれた。これはセイドンと呼ばれてイが鼻母音となりdが無聲化し、やがて鼻母音が鼻音を發達させてまへの音節を同化した結果であらう。

同じ仙臺に藤崎と云ふデパートがある。その前身の藤崎商店のころは土地の人がその名をフンツァキと呼んでゐたさうである。これも亦同じ法則に従ふもので、ヂのまへに鼻母音があり、そのためにチが無聲化した結果かゝる變化が生じたものに違ひない。

ガ行タ行バ行音のまへに鼻母音のあらはれることは今日は東北方言特有の習慣であるが、濁音のまへに鼻母音のあることは嘗ては中央の言語の習慣であつた時代がある。室町時代に渡來したヨーロッパ人が當時の京都語を記したものに鼻音化の記號を附して居り、吉利支丹ロドリゲスは

D Dz Gの前のあらゆる母音は常に半分の ㄷ (ポルトガル語に於ける鼻音化の記號) あるもの又は ㄷ に

幾分近い鼻の中で作らるる sonsonant (アイロニーをあらはす演説上の調子) の如く發音する。例 mada (未だ) mido (御堂) madoi (惑ひ) nadeite (撫じつ) madau (先づ) aginai (味の) aguru (上ぐる) aguru (足掻く) caga (加賀) fanafada (甚だ) faguma (刃鎧) 等

と云つてゐる。ただbのまへには今の東北方言の如く規則的には現れなかつたものらしく

この同じ規則は主としてFが重つてBに變じた場合に於て、Bの前の母音Aにも時にあてはまる。しかしこれは一般的ではない。例 maini sorofaba と云つてゐる。

東北方言以外で濁音のまへに鼻母音のあらはれるのは高知方言である。こゝではガ行ダ行の前にのみ鼻音がある。

室町時代の京都語と比べると、高知方言はもつとも新しい状態を示し、東北方言はもつとも古い状態をとめて居るものと云へる。

この鼻母音と考へられてゐるものの性質ははつきりしたものでなく、小倉進平氏金田一京助氏は鼻母音と考へられるのであるが、實は鼻音の挿入されるのであると云ふ説もあり、宮良當壯氏は二分の一音節の撥音(一に半長撥音)と云ひ、それについて

今日までの私の経験では鼻的母音と東北方言に於けるこの音とは非常なる差があり、現在のところ、之を

母音の鼻音化現象と考へることは出来ない。鼻的母音は八重山の竹富島の方言には無數に現れて來るもので、これに就ては實驗的に疑ひの餘地がない。尚小濱島の方言には、東北方言と同じ場合に全長撥音（半長撥音に對して云ふ）を用ゐることが殆ど規則的になつてゐる

と云はれる（『民族學研究』第一卷第一號「東北方言概相」）。又山形縣の置賜地方出身の横山辰次氏は又別の觀察をなして

私はその母音が鼻母音となると共に子音も亦鼻子音となるもので、*り*が*り*に對するものであると同じやうにその鼻濁音は夫々普通 *d b* の濁音に對するもので *d b* とは別に *ā b* とでも表記したらよいではないかと思ふ

と云つて居られる（音聲學協會報第四十號「置賜方言音韻の二三の特徴」）。

これは地方的差異かとも考へられる。土佐方言にもそのやうなことがあるらしく、土居重俊氏は「土佐方言の一考察」（音聲學協會報第四十六號）に

土佐ではダ行ガ行に先行する母音が規則的に鼻音化する事は事實であるが、東北方言などと比べると、鼻音が著しく後方に滑るやうである。鼻母音と共に鼻子音をも形成すると云つていいと思ふ。*māw*（水）、*kāi*（鍵）、*dokūsa*（毒蛇）等とある。

地方により、個人により、又語によつて種々の變化があるもので、實際に鼻音が挟まれることもあり全く鼻母音である場合もあるが、音聲の變異はいろ／＼であつても、東北方言の音韻體系の中に位置する音韻としての單位が本來何ものであるかと云ふことは、國語の歴史的研究と相俟つて究明せらるべきものであると思ふ。

小幡重一氏の音響スペクトルによる研究も主觀的觀察と同じものを示してゐる。鼻母音であるものがあり、途中まで鼻母音で終りが純母音になつて居るものもある。又母音の後にn又はmが挿入される場合にはその繼續時間を測定されたのに、通常0.5秒程度であるが時として0.1秒にも達し、母音の繼續時間と大差ないこともあると云はれ、金田一氏の發音に於ける鼻音を測定して0.2乃至0.3秒で丁度普通の場合の半分に該當することを示された（『音聲の研究』第六輯、前記）。

この鼻母音が室町時代にあつたことを述べたが、その存在はさらにその以前に遡るべきものなのである。このことは橋本進吉氏も「方言」二卷一號の「國語に於ける鼻母音」に於て述べて居られるが、余は平安朝の音便にあらはれる事實をこの事から説明したいと考へてゐる。

「カ行四段動詞のイ音便は「書きて」が「かいて」となると共に、濁音の方は「研ぎて」が「研いで」、「漕ぎて」が「こいで」となるやうな變化を生ぜしめた。前者に於て子音kの脱落であるのと並んで、後者はgの脱落である。それだけではその後に来る「て」が前者に於て清音のまゝであ

り、後者に於て濁音になると云ふ理由は説明できない。これは「研ぎて」「漕ぎて」等がガ行四段の方はgのまへに鼻母音があつた爲に、gの脱落の際、あとの「て」にそれが影響して之を有聲化したものと解釋する外はない。

次に「死にて」「讀みて」が「死んで」「よんで」となるのは母音が落ちてn mが残つて撥音便を生じたものと云へるが、「呼びて」が「よんで」となつたのは之と同じに説明できない。bがmにかはり、母音が落ちたと考へることは説明として迂遠である。これも「び」のまへに鼻音があり、その子音が落ちて、鼻母音が影響して下の「て」が濁音化したと考へる方が自然である。

二子 音

(一) カ行音・ガ行音

語類にはガニ(蟹)、ガサ(容積)、ガメル(盗む)、ガガ(母)と云ふやうに稀に濁る場合のある外、一般にカキクケコと清音に發音されるけれども、第二音節以下にある場合は後に述べる例の外、一般に濁音になる通有性がある。

ハガ(墓) haga

カギ(柿、垣) kagi

クギ (葦)

kiigi

ツギ (月)

tsuigi

タゴ (蛸)

tago

ハゴ (箱)

hago

之に例外があるが、それは一定の音の連結上の理由若しくはその他の事情があるからである。

(イ) 促音の次にある場合には濁らない。

カツケ (脚氣)

マツクラ (眞暗)

ミツカ (三日)

コツケイ (滑稽)

(ロ) 鼻音の次にある場合には濁らない。

ナンクセ (難癖)

キンカ (學者)

モンク (文句)

ゲンカン (玄關)

(ハ) 長母音の次にある場合は濁らない。

ローカ (廊下)

キューカ (休暇)

ジョーキポンブ (蒸氣唧筒)

この種のもは殆ど漢語外來語で國語化してゐない爲に濁らないのかも知れない。固有語の「はうき」(帚)がホーギとなり、漢語でも云ひ慣れた「のうか」(農家)がノীগとなつてゐることか

らも左様に考へられる。「便所」を福島縣會津地方や岩手縣の岩手・紫波・稗貫・和賀・二戸・九戸諸郡では「コーガ」(後架)と云ふのも同じ理由によるものであらう。

(二) i 母等無聲母音の次にある場合は濁ない。

キケン (危険) kiken

タスケル (助け) tasukeru

フケ (頭垢) fuke

(ホ) 指小辭コは濁らない。これは心理的の理由によるものであらう。本來愛稱から來たものだからである。

イスコ (犬)

トリコ (鳥)

コモリコ (子守)

(へ) 擬聲語が音聲表徴を伴ふ爲に濁らないことがある。ポカリ、ポカ／＼、パカ／＼の如し。

上述のやうに他の方言でカ行清音であるものの濁る場合は一般に[g]になるのであるが、他の方言と同じく語頭以外にあるガ行音子音は東北方言でもみな[g]である。

日本全國について語頭以外のガ行音を見ると、[g]に發音する地方と[k]に發音する地方と二様ある。東京でも京都・大阪でも[k]であり、東北地方一帯に同じであるが、[g]音を用ふる地方も意外に廣い。九州の殆ど全部、中國は兵庫縣を除いた全部、四國は徳島縣を除いた全部が皆[g]であり、愛知縣・岐阜縣・滋賀縣の或部分にもあり、關東方言に於ても千葉縣・東京府の周邊・埼玉縣・群馬縣・新潟縣の西半から佐渡へかけて帶狀に連るかなりの廣い[g]音の地帯がある。之を室町時代の言

語に照して見ると、その頃渡來した歐人はガ行をすべて [g] であらはしてゐるから中央に於ても [g] であつた筈である。因に天主教の學林で出版した「平家物語」や「伊曾保物語」その他の讀物は皆宣教師に對する日本語教科書であつたもので、當時の標準語の姿を示してゐるものである。

語頭のガ行音が [g] であることが今日の京都語と違ふのみならず、そのまへの母音が鼻音化することとも今日の京都語と違ふ。

これを今日の方言の上に見ると、高知の方言はこの状態に在る。之から考へると、今日の京都語はガ行のまへの鼻音の爲に鼻濁音の [ŋ] となり、その前の鼻音が消えたもので、東北方言はガ行が鼻音化してゐるまへの鼻母音が保存されてゐるからその中間に在ると云へる。

今日語頭でなくてもガ行が [g] である地方は [g] のまへの鼻音がなかつたと思はれるかも知れないが、それはさうではなくて、鼻母音が [g] に影響する前に母音の鼻音化の性質が或時代に失はれたものと考へるのが正しいやうである。その事はロドリゲスの文典に見える當時の方言の記述によつても想像される。ロドリゲスの備前の方言の條に

g の前の母音は半ば鼻音化して發音するのであるが、備前のものは、この母音を發する時、鼻音化を捨ててぎこちなく發音する。例へば Toga (トガ) のかはりに toga, soragaxi などいふ。さうしてこの發音をするので備前のものは名高い。

と記してゐる。ロドリゲスは各地の方言を記し、特に九州地方についての如きは最も詳しく述べてゐるに係らず、備前についてののみかゝることを注意してゐるのは全國方言中珍しい異例と考へたと見ざるを得ない。今日 g 音を持つ地方は備前に於けるやうな變化を経て一般にすべて鼻母音を失つてしまつたのであらう。

カ行音について東北方言の著しい特徴とされることは、キが口蓋化してチのやうな發音となることである。キが國語に於て i の影響でカ・クその他と比べて著しく口蓋化することは全般的であるが、東北方言に於ける中舌母音は當然一層高度の口蓋化を生ぜしめて、キのやうな音となり、殆ど チ と違はないものにしてしまふ。明治時代に宮城縣選出の工藤行幹といふ代議士があり、緊急勸議をチンキュー・ドーギ（恐らくキューも口蓋化してチュウであつたらう）と云つたことから、珍急博士と諱名されたことは有名な話であつた。この口蓋化は拗音の場合にも同様にあらはれて、キヤがチャ、キヨがチヨとなる。

脚絆 チヤハン

教授會 チョージュカイ

京都 チョート

キユと云ふ拗音は發音できないから、キューはチーとなる。庄内では母音が變つてチョー。

灸 チョー

ギューはギーと云ふ。

牛乳 *gju:nju: > gju:n:*

クワ、グワの拗音は秋田縣及び青森縣では保存されてゐる。自分は山形縣の庄内地方と岩手縣の南部領とは北奥方言に入れるのであるが、こゝに述べる事實は北奥方言全般に通じてゐると云はれず、クワ、グワの音は庄内地方になく（國語調査會の「音韻調査報告書」には東田川・西田川兩郡では、カ、クワ、ガ、グワの區別があり、飽海郡のみは「教育アルモノ外亂レタリ」とある。明治時代にはクワ、グワの音を保存してゐたのだらう）、岩手縣南部領にも多くはない。唯氣仙郡からの回答によると、十一町村の多數がこの音を持つてゐると報告してゐる。

(二) サ行音・サ行音

サ行のシとスとは東北方言に於ては混同され、南奥方言に於ては殆ど *siu* になり、北奥方言では *si* になることは前に述べた。

ザ行の子音が東北方言では *z* や *ɜ* として現れず *dz* であることは殆ど定説になつてゐる。小倉進平氏も仙臺方言につきて、金田一京助氏も盛岡方言についていづれもすべて *dz* であると云つて居られるが、横山辰次氏は山形縣置賜地方の發音についてジの子音は *dz* であることを述べて居られる（國語研究」第二卷十號「山形縣置賜方言の音韻」(三)）。

昔ダ行のヂツとザ行のジズとは音韻として區別され、今日も高知方言や宮崎方言に於て残つて居

るが、江戸時代に一般にその區別がなくなつた。その結果今日では全國一般にジズが發音されてゐるやうに思はれてゐるが、少くとも東北地方に於てはジズではなくてヂヅが發音されてゐる。

ロドリゲスがその文典に方言を説いてゐる所に「都」の部に「都の言語は最もよろしく、言葉に於ても發音に於ても學ぶべきであるけれども、都の人々には、或音節の發音に二三の缺點ある事を免れない」と云ひ

一、Gi(ヂ)のかはりにIi(ジ)と發音し、又反對にGi(Iiの誤だらう)といふべき所をIi(Giの誤だらう)と云ふのが普通である。例へばホンジ(本寺)をホンヂ、ジネンをヂネン、ヂバン(地盤)をジバン、ヂキニ(直に)をジキニといふ。又Ii(ジニ)のかはりにGi(ヂニ)といふ。例へばコノヂニのかはりにコノジニと云ふ(これは説明と例が顛倒してゐる)。

二、又Ii(ズ)のところにI₁zu(ヅ)と發音し、又反對にDzuのところにz₁といふ。ミツ(水)をミズ、參ラズをマ
イラツのやうに。これは一般にさうである。尤も正しく發音する人もいくらあらうが。

と云つてゐるやうに、室町時代にすでに京都で早く混亂を生じてゐるが、地方によつてジズとなつた所があり、ヂヅとなつた所があつたのであらう。契沖は「ち」「し」「つ」「ず」の假名遣の條に右ちよりこなたの四もじ、都方の人の常にいふは、ちの濁りはじとなり、つはずとなる。田舎の人のいふは、じはちとなり、ずはづとなる。ちとづとはあたりて鼻に入るやうにいはずればかなはず。都方の人は

心を着つれば、いづれもわけてよくいはる。田舎の人は知てもおほく改むる事あたはず。但しちとつとの濁り、よくかなへむとすればなだらかならでわろく聞ゆるなり。心得べし

と云つて、京都はジズとなつたやうであるが、地方によつて同じくない。國語調査會の音韻調査報告書に今日の方言の分布を述べて、ジヂの區別（ズズの區別も）の消滅した結果、左の三種の場合を生じたとなし、

第一、「ジ」又ハ「ヂ」ノ一音ニ歸ス

第二、「ジ」「ヂ」ヲ混用シテ而モ其ノ二音タルヲ辨ゼズ

第三、「ジ」「ヂ」孰レニモアラザル特別ノ發音ヲナス

と云つてゐるが、東北方言ではヂヅである。この方言に於て濁音が清音に變する場合を見ると、本來ヂヅであつたものが、清音になつた場合は勿論のこと、ジズであつたものが清音になつた場合にも、チ若しくはツとしてあらはれてゐる。今秋田縣學務課編纂の「秋田方言」から例をとると

マヅ……………マンヅ（湯澤町） マンチ（山本郡）

ワヅカ……………ワンヅカ（平鹿郡） ワンチカ（湯澤町）

ミヅカラ……………ミンヅカラ（雄勝郡西成瀬村）

ムヅケル……………ムンヅケル（仙北郡大曲町）

ジからチツになつたものは

アンジコト(案じ事)……………アンチコト(仙北郡)

かじか(河鹿)……………カンチカ(南秋田郡)

なまじか(癒)……………ナマンチカ(仙北郡)

いちじかん(一時間)……………エチチカン(由利郡・山本郡・鹿角郡花輪町)

さんじかん(三時間)……………サンチカン(南秋田郡五城目町)

こじける(イヂケルコト)……………コンツケル(由利郡)

あんず(杏子)……………アンツコ(平鹿郡横手町)

きかず(腕白)……………キガンツコ(由利郡)

であり、小倉氏の著書には

何時頃 nanji-koro > nantsi-koro

短じ mijikai > mitsike

十字架 su:zika > dzɪ tsika

弾ける hajikeru > hātsi-xeru

以上ジのチとなる例

鈴子

suzuko > sūtsyūko

疵子(小疵)

kizuko > kʲitsyūko

お葛かけ(館かけ)

o-kuzu-kake > o-gūtsyū-kage

和ちゃん(人名)

kazu-tjan > kʲatsyū-tjan

以上ズのツとなる例

横山氏の「山形縣置賜方言の音韻」にも同様なことが見えてゐる。

セは[se]であり、ゼは[dʒe]_[dʒe]である。例へば

アセ

aʃe

ミセ

miʃe

セリ(芹)

ʃeri

セガレ(俵)

ʃeɟare

ゼニ(錢)

dʒeni

ゼヒ(是非)

dʒehi

カゼ(風)

kʲadʒe

の如く云ふ。

但し *ai ae* から轉じた *e* をあとに持つ場合には *s dz* になる。

クセー (臭) *kuse:*

セー (助詞「さへ」) *se:*

それ故次の如き區別がある。

ジエーキン (税金) *dze:kin*

ゼーサン (財産) *dze san*

ロドリゲスの文法にサ行は *sa xi su xe so* とあり、天草本「伊曾保物語」にも獅子は *xi:ki*、蟬は *xeni* とあるやうに、室町時代にはセは中央でも今のシと同じ子音を以て *[se]* と云つたのだから、東北方言のセは寧ろ國語の古音を傳へるものと云はなければならない。今日だん／＼東北地方でも *[se]* に變りつゝあるが、當時に於ては寧ろセを訛と考へてゐたことは、ロドリゲスが方言を記してゐる所に

一、*xe* の音節を *se* 即ち *ce* (共に今のセの音) と、さうやくやうに發音する。例へばシエカイ (世界) をセカイと云ひ、サシエラル、をサセラル、といふ。さうしてこの發音によつて關東のものはよく知られてゐる (「關東又は阪東」の部)。

と云つて居るので知られる。つまり關東地方に一種の音韻變化が生じ、それがやがて全國を風靡して、今は九州と共に東北地方にかはらない發音を残して居るものと云へる。

[fe] の音は新しく用ひられるやうになつた出征 (Tōsō) の如きもの以外には、福島縣以外の東北地方全部に亘つてこの音を持つて居る語に通則的に用ひられる。

福島縣は關東方言の影響でこの音を失つて居り、「先生」「錢」「蟬」「背中」「風」「膳」の六語につき調査した結果は、このすべてに [ʃ] [ʒ] を發音するところは會津地方五郡及び信夫・伊達・安積の三郡であつた。耶麻郡からはすべての語にこの音を發すると回答したもの二村、東白川・西白河二郡からの回答には、この音全然無しと云つてある村が各二村づつあつた。會津地方は語彙の上に見らるゝ所と同じく、古い言語を保存してゐる地方と思はれる。

秋田縣と青森縣では「錢」「風」の如きはジェニ、カジェと云ふが、セはシェと云ふと共にへと發音することが多い。秋田縣では上三郡 (仙北・平鹿・雄勝) には稀で、それより北部が主であると思はれてゐるが、余の調査に由れば必ずしもさうではない。語により地方によりて違ふ。青森縣に最も優勢な發音で、[he] の口蓋化したものであり、[çə] で記したらよいと思ふ。

津輕方言で例示すると、

ヘンヘー (先生) çēhe:

ヘナガ (背中) çēnaga

ヘミ (蟬) çēmī

ギ (堰)

gēgi

ンベ (煎餅)

gēnbe

秋田縣の分布を「先生」「背中」の二語について示せば

中 背					生 先					
シ	ヒ	ヒ	ヘ	シ	ヒ	ヒ	ヒ	ヘ	シ	シ
ナ	エ	ナ	ナ	エ	ン	ン	ン	ン	エ	シ
ユ	ナ	ナ	ナ	ナ	シ	ヒ	ヒ	ヘ	ン	シ
ガ	ガ	ガ	ガ	ガ	エ	エ	エ	セ	エ	エ
				8					1	1
				6				1		7
	2	5		8		2	5	1	1	12
		1					1			
			2	1		1		2		
1		2		14			3			16
1				8			1			10
		3		17	1		1			19
2		2								2
		5		3		1	4	4		9

雄勝

平鹿

仙北

由利

河邊

南秋田

山本

北秋田

鹿角

秋田市

岩手縣はこの發音が極めて稀で、北部の岩手郡・二戸郡・九戸郡に多少あると云ふだけである。
この發音をなすと云ふ回答をした町村數は左の通である。

	岩手	九戸	二戸
先生	ヘンヘ		
蟬	ヘミ		
煎餅	ヘンペー	1	1
背中	ヘナガ	3	2

サ行の拗音も東北人の困難とする發音で之を直音化する傾があり、シュは[sɨ]若しくは[su]と云ひ、北奥方言ではイ列に近くし南奥方言ではウ列に近くする。

主人 シュジン sɨʒin suɖʒin
準備 ジェンビ dʒinbi dʒumbi

シヨも亦soといふ音にすることが南奥方言にあり、醬油をソーユ、書物をソモツなど云ふ。但し秋田縣にもこの發音があると見えて、「秋田方言」に左の如く擧げてゐる。

しよて（初手） ソデ（北秋田郡） せうべん（小便） ソベン（北秋田郡・鹿角郡）
しよもつ（書物） ソモツ（山本郡） しやうゆ（醬油） ソユ（鹿角郡・花輪町・北秋田郡）

ソーユ（鹿角郡）

一般に北奥方言は拗音に富み、直音であるべきものを拗音にする習慣がある。余の調査の結果を表に示せば

(一) 岩手縣を北上して青森縣に入る。(○……云ふ、×……云はない、○……多少云ふ)

	氣仙郡 越喜來村	小友村	東磐井郡 小梨村	折壁村	西磐井郡 一關町	平泉村	膽澤郡 金ヶ崎町	永岡村
小皿	×	×	×	×	×	×	×	×
悲	×	×	×	×	×	×	×	×
膝	×	○	○	×	○	○	○	○
塵	×	○	×	×	×	×	×	×
箆	×	○	×	×	×	×	×	×
簪	×	×	×	×	×	×	×	×
マジナル	×	○	○	×	○	○	○	×
カジョエル	×	×	×	×	×	×	×	×

上 七 北 戸 郡 町	青 森 縣 三 戸 郡 町	盛 岡 市	九 大 戸 目 郡 村	二 戸 郡 町	御 明 神 村	岩 手 掘 郡 村	下 宮 閉 伊 郡 町	上 栗 閉 伊 郡 村	八 幡 村	稗 花 貫 卷 郡 町	和 賀 二 鎚 郡 村	江 藤 刺 里 郡 村
----------------------------	---------------------------------	-------------	----------------------------	------------------	------------------	-----------------------	----------------------------	----------------------------	-------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------

第三章 東北方言の音韻

○	○	×	○	。	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	×	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○
○	○	×	○	。	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	×	○	。	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	×	○	○	×	×	×	×	○	○	○	×
○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

(二) 山形縣より北上して青森縣に入る

飽海郡	南平田村	大和村	遊佐村	酒田市	西田川郡	大山町	鼠ヶ関村	最上郡	小國村	西置賜郡	雄勝郡	新成村	由利郡	平鹿郡
○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×
×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○
○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○
○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○

小皿

痣

膝

莖

箆

簪

マジナル

カジヨエル

弘前市	藤代村	大浦村 中津輕郡	畑岡村	大鰯町	石川町 青森縣南津輕郡	鹿角輪町	山能代港	北秋田郡 綴子村	秋田郡 五城目町	南秋田郡 四ツ小屋村	河邊郡	仙北郡 長信田町
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(三) タ行音・ダ行音

チとツ、ヂとヅとが東北方言に於ては混同され、北奥方言に於てはッはチ、ヅはヂになり、南奥方言に於ては反對にチがッ、ヂがヅとなることは母音の條に述べた。

タ行音が語頭以外に於ては東北方言に於て一般に濁音に轉すること、カ行の場合と同じである。

ハダ(旗) hada カダ(肩) kada

ハヂ(蜂) hadziu モヂ(餅) modziu

マヅ(松) madziu オド(音) odo

マド(的) mado

これの例外となるものもカ行の場合と同じである。

(イ) 促音の次にある場合は濁らない。

イッテ・イッタ(行つて・行つた) itte, itta

アサッテ(明後日) assatte キッテ(切手) kiyite

ナット(納豆) natto ヤント(辛うじ) jatto

チット(少し) tsütto

(ロ) 撥音の下は濁らない。

ウンツキ (澤山)

umtsukki

タンツパ (痰唾)

tantsûpa

(ハ) 長音の下は濁らな_ス。

コーツ (交通)

kotsû:

オート (櫻桃)

ôto:

これもカ行の場合に云つたやうに漢語で俗語化してゐない爲かも分らない。ソート (相當) の如きものは [so do] となる。

(ニ) i 中無聲母音の次にある場合は濁らない。

シタ (下)

ſita

ヒヒテ (終日)

hihite

キタネ (汚な_ス)

kitane:

アスタ (明日)

asûta

フタンデ (二人_ヲ)

fûtande

(ホ) 擬聲語が音聲象徴を伴ふ爲濁らないこともある。

ボタ〜

パタパタ

このタ行音の方言的濁音化の爲に、糸はイドとなり、的はマドとなるから、井戸や窓と意味の混同を生ずるやうであるが、この地方の人が二つの意味をはつきり區別してゐることは、その前の母音が鼻母音であるか否かに由ることは母音の條に述べた。すなはち次の通りである。

マド(窓) mado マド(的) mado

イド(井戸) Ido イド(糸) ido

チャも第二音節以下では濁音になる。

オヂャ(御茶) odja

その例外は

(イ) 促音の次に於て濁らなす。

コッチャ(此方へ) kotja

ソーデアンメッチャ(やうであるさ)

ソーダエッチャ (やうですな)

(ロ) 撥音の下は濁らなす。

パンチャ(番茶) banja

(ハ) 一重等無聲母音の次では濁らなす。

エンピチャ(葡萄茶) epitja

(ニ) 擬聲語が音聲象徴のために濁音化しないことがある。

チャーチャ

ソッチャ(其方へ) sotja

so:deameitja

so:daetja

シンチャ(新茶) sintja

ハブチャ(はぶ茶) haputja

ヤチャクチャ (とりとめもなく忙しい)

チュ、ヂュは直音化して tsi dzi 若しくは tsiu dziu に轉ずる。

中學校

tsi'jakko:

tsiu'jakko:

重箱

dzi:bago

dziu:bago

仙臺以南では重箱はむしろズーバゴと云つて i は u にちかい。

(四) ナ行音

ナ行の拗音ニユも直音化するが、これはどこでもイ列音になる。

ギーニー (牛乳)

gi'ni:

ニーガグ (入學)

ni'gagu

ニユース

ni'siu

直音化は南奥方言で特に注意されてゐるものであるが、嘗ては東北地方に於て全般的であつたものと思ふ。津輕地方の多くの人に之を語ると否定する人が多かつたが、自分が弘前女學校 (私立) の小使の老婆につき檢したところ

中學校

tsi'jakko

重箱

dzi'bago

饅頭

mandzi:

急須

kisi

など發音してくれた。

これがまた出雲地方に通ずる發音である。出雲方言については、加藤義成氏の「中央出雲の子音」(音聲學協會報四二號)に

ki:küttsi (鶏屈)	tsiki: (地球)	gi:ni:ü (牛肉)
sizin (主人)	si:ha (宗派)	zintjo: (壽命)
sizi: (始終)	tsi:gi (忠義)	küsi: (忌中)
gi:ni: (牛乳)	ni:do: (入道)	

(五) ハ行音

東北方言に於ては[F]である。出雲方言に此の音があり、沖繩方言に於て[F]又は[D]であるのは有名なことである。京都に於ても「後奈良院御會」(群書類從卷五〇四雜部)に「母には二度あひたれど父には一度もあはず」(唇)とある。室町時代にはこの音であり、ヨヤドの「日本文典」に

字母fは日本の或州ではラテン語に於けるやうに發音されるが、他の州ではhのやうに發音される。然しながら經驗に依つて容易に知られるであらうが、或ものはfとhとの中間の音であつて齒と唇とは完全ではないが重ね合せて閉ぢられる。例へば fho

とあつて、すでに或地方ではhにかはりかけてゐたことが知られる。

氏家剛太夫天爵は天保四年に死んだ人だから、その著した「莊内方言攷」は今から百年内外の言

語に關するものであるが、それに

方言のハは合音のみにして開音に呼ぶ事甚だ少し。母をハハ合と言ひ母の假名ハハなれ共、聲に呼ぶ時はハ開ワと言ふべし。江戸の人はハハと二字共に開音に呼ぶ。是も訛なれ共、正音のハワ、田舎の人の口にはあまりに耳立つやうなれば、兒孫等にはハハと江戸音に言はしむるなり。され共諺にてもうたふ時は必ずハワと唱ふべしと教ふることなり

と云つて庄内方言の[Fa]に對して江戸では[ha]を對照してあるが、その頃江戸は[F]でも江戸にさう遠くない武州熊谷在でこの音があつたことは、三馬の「大千世界樂屋探」に熊谷直實に方言をつかはせて、平家を「ふへえけ」、旗頭を「ふはたがしら」と云はせてゐるので分る。同じ人の「浮世風呂」に、座頭のかたる御國淨瑠璃を寫し

さる症ふをどに爰に又九郎判ふわう官義經どのが……さてふは早はや御大將も

などと云ひ、田舎出の下男の詞として半分をフアンブン、蛤をフハマグリと云ふやうに、この發音を滑稽の材料に使つてゐるのは、江戸の言葉にはもうその音が無くなつてゐたものであらう。この音の變化は江戸を中心とするもののやうで、ホフマンの「日本文典」は明治元年に出たものだが、その中に

帝國の舊都ミヤコ及びそれを繞る諸州の方言ではfが保存されて居り、われ／＼の知る限りでは證岐及び

仙臺でも同様で、これらの土地では *fana*, *fūto*, *fūru*, *fēn*, *tōka* と發音する。之に反して江戸の方言では *f* は全く驅逐されて、そこでは *hana*, *hūto*, *fūru* (*fu* は *fu* のまゝ) *hēn*, *hōka* と云はれる。

と云つて、國語の最も純粹な發音であるミヤコの言語や讃岐の方言に於ては *f* で *h* がないことは江戸生れの人で、讃岐に數年を過した人（脚註に一八六三年以來オランダ在住の機械師オホガハ、キタロウと云ふ人とある）に聞いたものであり、又もう一人江戸生れの人（脚註に海軍の軍人で一八六三年以來和蘭に住んだ人で榎本釜次郎とある、即ち子爵榎本武揚である）は仙臺及び東北地方では *h* がなくて *f* ばかりを一般に用ひてゐることを話してくれたと書いてある。これが事實とすれば、京都では [f] 音を失つたことが極めて新しいことになる。

江戸ではその變化が早くから起つてゐたやうで、すでにリチャード・コックスの「日本紀行」（元利元年から八年まで）の中に

濱松 *Famma mattes*, Hamemach

箱根 *Facony*, Haconey

と云ふ二様の記し方をしてゐる。ホフマンが之を説明して、ポルトガルの宣教師及びその同時代の人 Fr. Cron (一六三九) やそれをやゝ下る E. Kaempfer (一六九一) P. Thunberg (一七五五) J. Titsingh (一七八〇) は皆 *f* を書いて *h* を書かなう。Farima, Fana, Firando, Forti, と書

兵隊	蛇	鎗	ひる	屁	火	禿	墓	葉	
1	1	2				1	2	2	臺仙
2	2	1	2	2	1		1	3	卷石
1					1				田刈
			1	1			3		田柴
3			1	1	2				具伊
1	1					1	1	1	理互
			1	1	1	1	2		取名
2	1	1			3		3		城宮
		1			1		1	1	川黒
1	2	1	2	2	1	1	4	1	美加
2	3	1		1	2	2	1		田志
1			2	3	1	2	2	2	造玉
3	4	2		1	1	1	3	1	田遠
3	3	1		1	2	1	1	1	原栗
1		1	1	2	1	2	1		米登
1	2	1		1	2	1	1	1	生桃
3	2	1	1	2			2	2	鹿牡
	3	1		1			2	1	吉本

二、宮城縣

位牌	兵隊	蛇	鎗	ひる	屁	火	
1							
1	1		1				
4							
6	3			1	1		
6	1	1	1		1	1	
3	2		1	1	1	1	
3							
1							
1	1		1				
3	2		1		1	2	
1	1	1	1				
2			1				
1							
3							
3	1		1				
7	2						
2	2		1				
3	2	1	1	1		1	
4		1	2	1	1		

東北の方言

葉	四、岩手縣	位牌	兵隊	蛇	鏡	ひる	屁	火	禿	墓	葉	三、山形縣	位牌
3 澤 膽			1	1			1			1	形 山	形	3
4 刺 江		1			1					1	1 澤 米	米	3
2 井磐西											山村南		2
2 井磐東											山村東		3
仙 氣		1	1							1	山村西		5
1 賀 和		2	1	2	3		1		2	3	2 山村北		3
1 貫 稗		1				1	1	2		1	1 賜置南		7
3 波 紫		4	4	1	2		1	2	1	3	2 賜置東		2
1 伊閉上		2	4	2	2		3	3		1	2 賜置西		4
1 石 釜		6	3	2	2	2	2	3	2	3	2 上 最		2
伊閉下		15	13	6	11	8	11	10	1	1	15 川田東		6
5 手 岩		5	3	3	3	4	4	3	2	2	3 川田西		8
3 岡 盛		12	13	7	11	3	10	13	1	1	13 海 鮎		4
2 戸 二		2	4	1	2	2	4	2			1 岡 鶴		4
2 戸 九		3	3	2	3	2	4	2		2	2 田 酒		5

第三章
東北方言の音韻

一〇七

ひる 尻 火 禿 墓 葉

五、秋

位 兵 蛇 籠 ひる 尻 火 禿 墓

2 7 11 7 6 10 勝 雄

田 縣

2 1 1 2 2 1

東北の方言

2 7 9 4 5 3 鹿 平

7 4 1 4 1 2 1 2 3

1 7 7 5 4 7 北 仙

7 3 2 1 2 2 5 2 2

* 6 10 11 2 1 15 利 由

8 1 1 1 2 1 1 1

* 1 2 2 1 6 邊 河

4 1 1 1 2

* 7 10 2 1 1 田 秋

7 6 5 5 2 2 2 1 1

* 7 16 4 3 17 田秋南

3 3 2 2 1 2 2 1

* 4 8 5 2 12 本 山

4 1 1 3 1 1 1 1 1

* 8 9 5 1 8 田秋北

4 2 2 2 1 2 1 1

1 2 1 1 角 鹿

1 1

5 2 1 2 1 1 2

7 1 2 3 2 2 2 1 2

7 1 3 2 1 1 1 1 4

3 1 1 3 2 1 2

1 1 1

第三章 東北方言の音韻

位牌	兵隊	蛇	筧	ひる	屁	火	禿	墓	葉	七、青	位牌	兵隊	蛇	筧
	12	4	9	15*	18	1		1	4	森 青	森 縣	11	7	5 8
	2	3	4	1	6*	6	2	2	1	2	前 弘		9	7 5 7
	3	12	6	6	7*	12	4	1	2	13	輕津東		18	10 10 8
	12	10	8	11	9*	13		1	13	輕津西		14	11	14 11
	6	8	2	5	2	7	1		7	輕津中		3	2	5 3
	10	15	9	18	10*	16	1	1	17	輕津南		5	7	4 8
	8	12	7	11	7*	13	3	1	1	19	輕津北		14	15 14 11
	2	1		1	1	1		2		戸 三		7	6	10 8
										戸 八		11	10	11 9
	1	3	3	1	4*	5	2		2	北 上		4	1	2 3
	5	5	1	3	4*	5	1		3	北 下				

*ヒルをフルと云ふのを加へる。

* ヒルをフルと云ふのを加へる。

山形縣の庄内地方では、次の如き語に[F]音があらはれる。

Fa 齒 ^フ刃 花 ^フ鼻 箸 春 ^フ母 箱 灰 鉢 卷 お鉢 蜂 端 葉書 梯 桑 鋏 鋏 腐敗

走る はねる 二把 ^フ入る

Fi 火 日 お日様 肘 人 一つ 羊 晝 東 暇 緋鯉 火箸 最良 開く 放る

Fe 部屋 臍 堀 鬚 返事 便所 ^フ女兒 饒舌 ^フ増る

Fo 乞食 螢 筆 穂 外 保險 庖丁

Fe 位牌 灰

秋田縣にあるものを舉げると、

Fa 花 橋 箸 帚 鳩 柱 判 鉢 鉢 卷 師範 袴

Fi 火 火のし 目 東 左 飛行機

Fe 商品 ^フ盆 縁 ^フ竈 笛 ^フ開ぐ 臍 徴兵

Fo 螢 酸漿 ^フノエ

Fe 入 ^フれ 蠅 ^フノエ

青森縣・岩手縣にあるものも大抵以上のものと通ずるものばかりである。

よくこの音を保存する地方でも地域によつて種々の程度がある。最上郡の金山・及位・眞室川・

安樂城・鮭川・戸澤の六ヶ村いはゆる川通り衆（鮭川筋の人）は、殆どすべての語のハイフヘホを
[Fa] [Fi] [Fü] [Fe] [Fo] と發音して「一番から十八番まで走幅飛始め」と云ふのを

イチバンガラ、ファチバンマデ、ファシリファバトビファジメ

と云ひ、この地方を更に北に遇つて雄勝郡に入つても中通地方は一帯にこの傾向が強く、湯澤町・
山田村等までもすべて [Fa] [Fi] [Fü] [Fe] [Fo] を用ふると云ふ報告を得て居る。

山形縣飽海郡の南遊佐村・松嶺村や秋田縣平鹿郡沼館村等ではヒは皆 [Fi] であると云ひ、南秋田郡
船越町や寺内村ではへはみな [Fe] であると報ぜられた。

(六) ヤ行音

東京語その他多くの方言にあるヤ行音は、ヤユヨの三で漸強重母音である。東北方言にあるもの
も一般的に云へば、それと同じであると云つてよろしい。すなはちヤ行音は音聲記號で [j] を以てあ
らはし、ドイツ語フランス語などにあるものと全く同一の記し方をしてゐるが、例へばドイツ語の
[Japan] などの [j] が硬口蓋の摩擦音で、前舌が高まつて硬口蓋との間に狭い隙間を作り、その間か
ら聲を摩擦させて出すものであるのと違ひ、舌の位置や音の作り方は母音の [i] と少しも違はない。
つまりヤは [i] と [a] とをつゞけて云ふのであるが、たゞイとアを二つ同等の價值で云ふのではなく、[i]
が極めて短くてすぐ [a] に移り、それで一音節を形作ることがカやサと全く同じく、ヤの [i] はカやサ

の[k]や[s]の子音と同じ價值しか持たない。その意味で半母音と云ふ。すなはちヤは[ia]のやうに[a]が主音であり、[i]が副音で漸強重母音である。

東北方言に於ても普通にはこの漸強重母音を用ひるが、福島縣の北部、宮城縣の南部に於て往々摩擦音の性質を持つ[j]が發音されることがある。仙臺方言について小倉氏の擧げて居られるものを引用すると、

山	jama	言はれた	jareda	夜	joru
	の如きものである。				

他の方言に於てはヤ行のエ列は母音のエと全く同じになつて居るが、これも宮城縣その他に於ては同じく摩擦音があらはれることがある。母音であるものの變つたものもあつて、歴史的に見て必ずしも本來のヤ行音と云ふのではなく。

小倉氏の擧げて居られるものに

江戸繪	jédoe	餌	je	襟	jei
家	je:	良	je:		

その他ものがある。

このエがゼのやうな發音になるのも、[j]が摩擦音の性質を持つて居るからである。ゼではないが

この子音はㄷに近いもので、ㄷとㄷ'との中間音である。之をㄷ'であらはす。

柄

ze

枝

zēta

蝦

zēdi

繪師

zegaci

襟卷

zēimagi

の如き類である。

ユにもこの音がある。

雪

zūgi

鰯

zūwasiu

の類である。

この現象の見られるのは自分の調査に由ると、宮城縣の南部宮城・柴田・名取・伊具・互理の諸郡であり、福島縣に於ては伊達・信夫の二郡に著しく、相馬郡が之に次ぎ、會津地方の中、大沼・河沼・耶麻・南會津等の諸郡にも見られる。山形縣の西置賜郡、岩手縣の氣仙郡にも多少ある。

福島縣の回答にある語彙を挙げると、

枝

ゼダ

指

ズビ

湯

ズ

昨夜

ブンベ

蝦

ゼビ

お粥

オカズ

夢

ズメ

家

ゼー

襟卷

ゼリマギ

繪師

ゼガギ

驛長

ゼキチヨ

柄

ゼ

雪

ズギ

縁側 ゼンガワ

良い

ゼー

ゆつくり ブックリ

云ふ ブー

云つた

ブツタ

伊達郡・信夫郡からの回答には「老人が云ふ」とあつた。

福島縣の會津地方ではヤ行音がラ行音にかはることがある。

昨夜 リンベ

湯 リ

浴衣 リガダ

夕顔 リューガオ

「位牌」の發音を尋ねたのに對する回答に、リフェーと云つた町村が青森縣の津輕地方に左の如きものがあつた。

(東津輕郡) 奥内村、今別村、大野村 (西津輕郡) 柴田村、柏村、水元村 (中津輕郡) 新和村
(南津輕郡) 黒石町、女鹿澤村 (北津輕郡) 六郷村

イがりとなるものに「青森縣方言集」(東奥日報社編)に胃をリとあり、又「野邊地方言集」にも「位牌」をリへとあるのを見ると、この現象のあるのは津輕地方より廣いかも知れない。因にこのリと變つたイは必ず^リであつたに違ひない。

これらを單なる語の旅行と云へないとすれば、ヤ行の摩擦音の存在やラ行音との轉換が、東北地方で福島縣に限らず、もつと廣い範圍に亘つてゐたことがあると云はなければならぬかも知らない。

し。

(七) ラ行音

國語のラ行音は英語の r のやうな摩擦音や、ドイツ語・フランス語の r のやうな顫動音とも違ひ。1 の性質を多分に持つてゐることは周知の事實であるが、この事實が國語の語の形態上ラ行音とヤ行音との交渉を生ぜしめた所以であるらしく、古語に於ても「偲ぼゆ」「寝らゆ」のやうなヤ行下二段に活く助動詞が「偲ぼる」「寝らる」の如きラ行下二段に變つて居り、この形が「いはゆる」「あらゆる」の如きものに迹を留めて居る。古今集や伊勢集にある「手もたゆく」、小町集にある「足たゆく」は「たゆたふ」「ゆたのたゆた」と語根を等しくして居るが、後に「たるく」となつて居り、「あるく」は「しづむしづく」「のぞむのぞく」と云ふ各對の動詞の分化から見ても「あゆく」即ち「足行く」から變つて來たものでないかと思はれる。

フランス語に於ては *file* (娘)、*melleur* (より良い) 等の *i* が口蓋化して口蓋的の流音 [ɲ] になつた時代があり、南フランスに於てはこの音を留めて居るが、それが全く流音の性質を失つて [j] となり、*file*, *melleur* は *フィーユ* [fi:j] *メーヤール* [me:jɔ̃] となつてゐる。山形縣に於て中央語のラ行音をヤ行音に變へてゐるのは、之と同じ性質の變化にちがひない。自分がはじめて米澤の地を踏んで雪橇に乗つたとき、それを押す老翁に「何と云ふか」と尋ねると、ユキゾーイと云つて雪箱

舟と書くと教へられた。あとでそれが「雪ぞり」の方音であると知つた。この外のこの地で聞いたものにインゴ（林檎）、ハイ（針）、ゴイン（五厘）、イチヨー（一兩）、ヨーイ（料理）などがある。

置賜地方で「叱らえる」「走らえる」「居らえる」「起きらえる」「來らえる」など、受身・可能に云ふのは、「れる」「られる」がヤ行になつて居ることを示す。

「呉れる」がケル、「連れて行く」がツエデク、「忘れる」がワセルなど變るのも「れ」が[je]であつたのが原因であらう。又庄内地方で「馴れる」「溺れる」をナエル、オボエルと云ふ。

置賜地方では「だめだ」「いけない」と云ふことをヤジャガネーと云ふ。庄内地方ではヤジャゴバヤと云ふ。それ／＼「埒があかない」「埒があかうばや」から出て居り、ラ行音のヤ行音になつて居るものである。

この現象は秋田縣まで通ずるものらしく、「秋田方言」に

やんねん（南秋田郡）やねん（山本郡）……來年

ゆすぎ（雄鹿郡）ゆす（仙北郡角館町）……留守居

ゆんばん（平鹿郡）……留守番

よぐだごど（南秋田郡五城目町）……ろくなこと

ゆぐでなし（鹿角郡花輪町）……………ろくでなし

その他が擧げてある。明治時代の畫伯寺崎廣業氏は鹿角郡の出身で、話は秋田辯丸出しであつたらしく、余の若い頃の友人がよく畫伯の口眞似をして人を笑はせたが、西洋料理をヘーヨーヨーイと云つたことを記憶してゐる。

ワ行音のヤ行音であつたことは、過去に於ては東北地方でもつと廣い地域に亘つたものかと思はれることは、仙臺で「下さい」と云ふことは今一般にケサイと云つてゐること（「呉レサイ」の約つたもの）、知らないをシャナイと云つてゐることなどから考へられる。

（八）ワ行音

ワ行音は東京語ではワ [wa] だけであるが、東北方言では音節の融合又は「わたり」に由て [we] や [wo] を生ずることがある。

アウエ（あはひ） awei:

アウエーニ（あはひに＝時折） awe:ni

ウウエギ（植木） iūwégi

スウオ（鹽） sūwo

これは仙臺方言の語彙で、[wo] はこの外に氣が附かないが、山形縣の方言については、横山氏の「山

形縣置賜方言の音韻(ㄷ)に

青い アオイ — アヲエ

顔 カオ — カヲ、カオ

棹 サオ — サヲ、サオ

倒れる タオレル — タヲレル、タオレル

香 ニオイ — ニヲエ

その他が擧げてある。

三 アクセント

甲、東北アクセント

このアクセントの行はれてゐる範圍は青森・秋田・岩手三縣の大部分と山形縣の庄内地方と西置賜郡の新潟縣寄り(小國木村を中心とする)及び最上郡の一部(新庄町・及位村等を中心とする)等である。

もとより右諸地方の範圍でも多少の型所屬を異にする語例乃至微妙な型の相の差は認められるのであつて、こゝに概括した東北アクセントの範圍が完全に一致してゐるのではない。例へば岩手縣

盛岡市乃至久慈町等のアクセントは名詞でもその型所屬に於てさへ他の一般地方と相當の出入を示し、又鼠ヶ關（山形縣）でも相當の隔がある。

今この東北アクセントの代表として青森市を採り、他の地方と比較して見よう。

(一) 一音節名詞

二種の型が認められる。例へば助詞「も」が附くと、

(1) ハモカレダ (木も枯れたし) 葉も枯れた

(2) ハモエデ (日も痛いし) 齒も痛い

のやうにモが略々平かに續くものと、モよりも高く發音されるものとある（右側の線は高音を示す）。

(1)の類を「平板型」、(2)の類を「頭高型」と呼ぶ。その一般的語例を示すと、

(1) 「平板型」 胃、柄、蚊、氣、毛、子、血、茶、戸、名、値、葉、日、帆、實、矢

(2) 「頭高型」 繪、木、粉、字、巢、酢、田、手、菜、根、野、齒、刃、火、目、芽、湯、

夜、輪

(1)の類は東京の下型と、(2)の類は東京の上型と對應して例外は少い。助詞の附く時の型の相も東京と近似してゐるが、特に注意すべきものがあるから左に述べる。

一、「が」

(1) ハカレダ (葉) 東) ハガ (枯れた)

(2) ハエデジャ (齒) 京) ハガ (痛い)

右のやうに當地では自然の對話に於て助詞「が」は殆ど現れない。

二、「を」

(1) ハサノヘル (葉) 東) ハニ (載せる)

(2) ハサツケルベス (齒) 京) ハニ (附けよう)

(1)の平板型の類は型に變化を起さないが、(2)の頭高型の語は反對に低く發音されてサが卓立することは注意すべきことである。

三、「を」

(1) ハハゲ (葉) 東) ハオ (掃け)

(2) ハミガケ (齒) 京) ハオ (磨け)

一般に「を」は附けない。やゝ強調の意味を伴つてバが用ひられる事はある。その時注目すべきことは(1)の類はそのまゝ變化しないが、(2)の頭高型の類は反對に低く發音され、バが卓立することである。これはサの場合と全く同じ趣である。

四、「まで」

(1) ハマンデカレダ (葉) 東) ハマデ (枯れた)

(2) ハマンデエデ (齒) (京) ハマデ (痛い)

この場合(1)の平板型の語は變りないが(2)の頭高の語は反對に低くなつてマンデのマが卓立する。五、「の」「も」等は東京と同様に自然の談話にも現れ、サ、バ、マンデ等のやうな特別な變化を起さない。

以上主な助詞の接續を述べたが、これらは二音節及びそれ以上の語に於ても夫々相通ふ特徴を現す。

尙東北方言では指小辭コが頻用されるが、その場合には平板型の語はそのまゝ平板型に、頭高型の語は反對に尾高型になつてコが卓立する。すなはち

(齒) ハモ — ハツコ — ハツコモ

(手) テモ — テツコ — テツコモ

(木) キモ — キツコ — キツコモ

但しサ、バ等が附くとハツコサ、テツコサ、キツコサのやうに助詞に山が來ることは前記の場合と同じである。

この一音節名詞の型所屬は東北アクセントの範圍數十個所の調査地で殆ど同様である。

(二) 二音節名詞

平板、尾高、頭高の三種の型がある。

(1) 〔平板型〕 アメ(飴) カギ(柿) カンゼ(風) ニワ(庭) ハゴ(箱) ハナ(鼻)

等のやうにほぼ平かに發音されて、助詞が附いて例へば アメノ、アメサ、アメバ、アメモ、アメマンデのやうにほぼ平に続く。指小辭コが附いても平板型アクセントは變化しない。

(2) 〔尾高型〕 アメ(雨) エド(絲) カガ(影) カダ(肩) ハナ(花) フナ(鰯)

等のやうに單獨には第一音節は低く第二音節はグツと高く發音される。此の種のを尾高型と呼ぶ。

これらに助詞が附いても、ノ、モ等であればアメノ、アメモ等のやうに山に變化は起らない(東京では尾高型にノが附くと平板化するのが普通)が、サ、バ、マンデ等であればアメサ、アメバ、アメマンデのやうにサ、バ、マに山は移動する。

これらに指小辭コが附くと、三音節乃至四音節語の尾高型のやうな相を示すのが普通である。例へばアメッコ、エドッコ、カゲッコ(但し中にはハナ、ハナッコのやうに山の移動しないものもある)。助詞が附くと アメッコノ、アメッコモ、アメッコサ、アメッコバ、アメッコマンデのやうに指小辭の附かない場合の法則と同じである。

(3) 〔頭高型〕 アギ(秋) オンビ(帶) サル(猿) ハス(箸) マエ(前) ムギ(麥)
 等のやうに單獨には第一音節が高く、助詞ノ、モ等が附いてもアギノ、サルモ、マエモとなつて山の位置は變化しないが、サ等が附くとサルサ、マエサのやうに山が助詞に移動することは、一音節頭高型の場合と同じである。指小辭が附くとサルッコのやうにコが卓立して尾高型に指小辭の附いた場合と同じである。之に更にサ、バ等が附くとサルッコサ、サルッコバのやうに山はサ、バに移動する。

以上二音節名詞を概説したが、同じく東北アクセントと概括される地方と比較すると、大體に於て共通する所が多い。

その共通する語例を抄録すると、

(1) 〔平板型〕 飴、蟻、石、牛、梅、岡、顔(但しツラといふ地方多し)、柿、垣、風、蟹、金、紙、壁、殻、川、傷、北、霧、口、國、腰、癩、酒、皿、杉、蟬、袖、鷹、瀧、竹、棚、塵、爪、毒、虎、鳥、梨、夏、西、庭、箱、橋、旗、蜂、鼻、羽、幅、髻、人、暇、紐、笛、蓋、藤、筆、冬、星、水……

(2) 〔尾高型〕 青、赤、朝、足、汗、跡、穴、網、粟、家、池、板、絲、犬、芋、色、腕、馬、膿、襟、鬼、親、鍵、髮、皮、菊、草、櫛、熊、雲、倉、米、坂、鯖、鹽、島、尻、白、

炭、咳、外、蛸、玉、月、土、角、年、泥、生、波、繩、肉、黠、喉、蚤、糊、海苔、墓、恥、花、濱、腹、鮓、舟、骨……

(3) 「頭高型」

秋、兄、息、椅子、臼、海、帶、貝、數、絹、鯉、猿、足袋、粒、鶴、茄子、葱、箸、針、春、富士、前、松、穂、麥、夜……
注意すべきことは平板型の中

石、垣、紙、穀、川、北、瘤、毒、梨、夏、橋、旗、冬……
は皆東京で尾高型になることである。

又尾高型の中

青、赤、朝、汗、跡、粟、板、絲、雲、外、蛸、生、喉、鮓、舟、窓……
等が東京で頭高型となつてゐることも注目すべきことである。

(三) 三音節語

平板、尾高、中高、頭高の四種の型がある。

(1) 「平板型」

カラ^ンダ^{（體）}、サガ^ナ（肴）、サグラ^{（櫻）}

(2) 「尾高型」

アダ^マ（頭）、オド^ゴ（男）、ナミン^ダ（涙）

(3) 「中高型」

エノ^ンズ^{（命）}、タマ^ゴ（卵）、モミ^ズ（紅葉）

(4) 「尾高型」 カンブント(兎)、キユーリ(胡瓜)、スズメ(雀)

型の種類は東京と同じく、平板・中高・頭高の三型も大略東京的であるが、尾高型はやゝ趣を異にして最後の音節を第二音節より卓立させる傾がある(助詞「て」等が附くと一層著しく目立つ)。これは東北アクセントを特色づけるものの一つであつて、四音節語及びそれ以上になつても、起伏式はたゞ一個所だけ一音節を卓立させる癖がある。

東京との對應關係を見るに、當方言の平板型は東京の平板型に、尾高型・中高型・頭高型それぞれ東京語の同じ型と密接な關係を示してゐるが、一方又型所屬を異にする語例も相當に見られる。

就中最も著しいのは當方言の中高型の語の中、東京で頭高型になる例の多いことである。例へば次のやうなものである。

意見、命、親子、烏、菌、家來、主人、書物、世間、狸、手首、荷物、野原、火箸、火鉢、不
斷、螢、蜜柑、紅葉

この三音節語は一二音節語よりも比較的多くの地方差が現はれる。

(四) 二音節動詞

平板、尾高、頭高の三種の型があるが、尾高型は極めて少く、平板型と頭高型とが二音節語の基
本型である。尾高型例へばスグ(好)の如きはその活用形の型を見ると頭高のアウ(逢)、アム(編)

の類と一致する所が多いから、本來は頭高型と密接な關係があつたものであらう。

(1) 「平板型」 行グ、賣ル、置グ、押ス、買ウ、聞グ、汲ム、咲グ、散ル、飛ブ、泣グ、乗ル、振ル、卷グ、呼ブ、割ル、居ル、着ル、爲ル、煮ル……

(2) 「頭高型」 逢ウ、編ム、打ツ、書グ、勝ツ、切ル、漕グ、裂ク、立ツ、研グ、取ル、脱グ、飲ム、降ル、時グ、讀ム、來ル、見ル……

平板型は東京の平板型、頭高型は東京の頭高型とそれ〴〵緊密に對應してゐる。

又活用形の型は平板型に於ては、その型の相の微妙な差は別としてほぼ東京的な法則を具へてゐるが、頭高型に於ては著しく東京と違ふ。これが又東北アクセントの特徴である。一例として助動詞タ(ダ)や助詞テ(デ)の附く連用形の型の相を舉げて見ると

(イ)	
カツ(勝)	…… カツタ、カツテ
タツ(立)	…… タツタ、タツテ
ノム(飲)	…… ノンダ、ノンデ
ヨム(讀)	…… ヨンダ、ヨンデ
ミル(見)	…… ミダ、ミデ

(ロ)	
コグ(漕)	……コエダ、コエデ
マグ(蒔)	……マエダ、マエデ
ホス(乾)	……ホスタ、ホスデ

(ロ)のやうに重母音式に發音されるか、ス、シ等の閉母音が無聲子音の間で無聲化する場合は、東京語のやうにそのまゝ頭高型を保存するが、その他の場合は(イ)の如く全く東京語と趣を異にする。

(五) 三音節動詞

平板・中高・頭高の三種の型があるが(終止形に於て)、頭高型は極めて稀で、平板・中高の二型一がこの動詞の基本型である。

その中頭高型はカエス(返) トールの類で、第二音節が獨立性に乏しく、その活用形の型から推して中高型の一變形と見られる。語例も極めて少い。従つて平板型と中高型とがこの動詞の基本型である。

(1) 「平板型」 遊ブ、當ル、浮カブ、歌ウ、送ル、踊ル、飾ル、變ル、削ル、殺ス、搜ス、沈ム、進ム、坐ル、溜ル、並ブ、登ル、拾ウ、曲ル、磨グ、貰ウ……

(2) 「中高型」

(イ) 煽グ、歩グ、急グ、動グ、起ス、落ス、泳グ、隠ス、騒グ、倒ス、馴ス、殘ス、開グ、

許ス……………

(ロ)

餘ル、祈ル、威バル、選ブ、思ウ、拜ム、曇ル、搾ル、滑ル、作ル、習ウ、挟ム、破ル、綏ム……………

右のやうに(1)(2)はそれ／＼東京の平板型、中高型と緊密に對應してゐる。

平板型の型の相は

(遊)

アスブ、アスンダ、アスンデ

のやうに、「下中中、下中中中」か「下下中、下下下中」のやうに發音されて平板型であるが(左側の線は音節のやゝ低いことを示す)、中高型は

(煽)

アオグ、

(餘)

アマル

のやうに「下上中」と表記し得て、東京のそれと酷似してゐるが、活用形の型は趣を異にするものがあつて、前記(ロ)の類はいづれも尾高型に變化する。

(餘)

アマツタ、アマツテ

(拜)

オガンダ、オガンデ

(挟)

ハサンダ、ハサンデ

之に對してイの類は。

(煽) ア[○]エ[△]ダ、ア[○]エ[△]デ

(起) オ[○]ス[△]タ、オ[○]ゴ[△]ス[△]テ

(隠) カ[○]グ[△]ス[△]タ、カ[○]グ[△]ス[△]テ

のやうに何れも第二音節と卓立させて東京的となるのであつて(イ[○]ロ[○])兩類ともに二音節頭高の二種の活用形の型と同じ法則の下に行はれる。

又頭高型に於ても

(返) カ[○]エ[△]ス[△]タ、カ[○]エ[△]ス[△]テ

(通) ト[○]ー[△]ス[△]タ、ト[○]ー[△]ス[△]テ

のやうにス(又はシ)等の母音が無聲化したものは、そのまゝ頭高型を保存して東京的であるが、一方

(歸) カ[○]エ[△]ツ[△]タ、カ[○]エ[△]ツ[△]テ

(通) ト[○]ー[△]ツ[△]タ、ト[○]ー[△]ツ[△]テ

(參) マ[○]エ[△]ツ[△]タ、マ[○]エ[△]ツ[△]テ

のやうに促音を含むものは尾高型となつて東京語と趣を異にしてゐる(東京語は終止形と同様に頭高型である)。

三音節一段活用の動詞も四段活用と同様に平板・中高・頭高の三種の型がある。

平板型は

足リル、當テル、揚ゲル、明ゲル、荒レル、賣レル、借リル、枯レル、消エル、暮レル、越エル、洒落レル、捨テル、煮エル、載セル、腫レル、曲ゲル、負ゲル、止メル、揺レル、割レル等の類で、型の相は

アテル、アテタ、アテテ、

アレル、アレタ、アレテ

のやうに、下中中（又は下下中）と表記されて、四段活用動詞の平板型と全く同じく、東京語と對應も緊密である。

中高型は

飽ギル、起ギル、落ズル、懲リル、錆ベル、受ゲル、掛ゲル、切レル、締メル、攻メル、立デル、食ベル、溶ゲル、投ゲル、撫ゼル、慣レル、逃ゲル、晴レル、賞メル、見セル、見エル、茹デル、分ケル

の類で、東京の中高型と緊密に對應するが、その活用形例へばタ、テにつゞく連用形の型は次の如く

アギル、アギダ、アギデ
ウゲル、ウゲダ、ウゲテ
となつて下上中で

アキル、アキタ、アキテ[△]
ウケル、ウケタ、ウケテ
東京

と大に異なる。

頭高型は

肥エル、絶エル、生エル、冷エル

の類で、語例は大變少い。

此の型の相は四段活用動詞の頭高型と同じく

コエル・コエタ・コエテ

タエル・タエタ・タエテ

となつて「上中中」と表記される。東京ではこれらの終止形は中高型となつてゐる。

この頭高型の動詞は元來中高型であつたものが、第二音節の獨立性に乏しい事から、山が第一音節に廻つたものと思はれる。従つて一段活用動詞に於ても平板型と中高型とが基本型である。

以上の通り一段活用動詞は上一段も下一段も活用形の型は共通であるが、これは青森のみならず東北アクセントに通ずるもので、南方の盛岡市・一戸町（岩手縣）・鼠ヶ關（山形縣庄内）はもとより、更にその範圍を越えようとする平泉・一關等までもさうである。

但し宮古町・九戸郡長内村等岩手縣の海岸寄りの中、ほど中部以北の地方では次に示す通り全く東京的で、その連用形も一般地方のやうに中高型ではない。

（起） | オギル、オキ[△]タ、オキ[△]テ

（落） | オジル、オジ[△]タ、オジ[△]テ

（逃） | ニゲル、ニゲ[△]ダ、ニゲ[△]デ

（晴） | ハレル、ハレ[△]ダ、ハレ[△]デ

下

上

（六） 四音節動詞

四段活用動詞には原則として、平板的なものと中高的なものとの二種ある。平板型は

扱ウ、疑ウ、重ル、始ル、働グ、擴ル、養ウ……

の類で、型の相はほど下下中のやうに表記され、活用形の型もほど平板を保たうとして東京の平板型と近似した性質がある。もとより東京の平板と緊密に對應してゐる。

之に對して中高型は

集ル、羨ム、傾グ、悲シム、苦シム、從ウ、耕ス、樂シム、……

の類で、その型の相はこの方言の特徴を發揮して、アツマル、ウラヤム、カダムグ、タガヤスとなり、ほゞ「下中上中」と表記でき、原則として第三音節目を一ヶ所だけ卓立させる。タ(ダ)、テ(デ)の續く型が二種に分れることは三音節以下の中高型の場合と同じである。

(イ) アツマツタ、アツマツテ
ウラヤンダ、ウラヤンデ

(ロ) カダムエダ、カダムエデ
タガヤスダ、タガヤステ

これは東京の中高型「下上上中」型に對應する。

四音節一段活用動詞も四段活用動詞と同様、おほまかには平板型と中高型との二種に分れる。

平板型は

呆レル、遅レル、教エル、溺レル、重ネル、聞エル、爛レル、續ゲル、並ベル、始メル、震エ
ル、汚レル、忘レル、……

の類で、四段活用の平板型と同様、ほゞ「下下下中」と表記され、活用形の型も四段活用のそれと

同じである。これは東京でも平板型である。

之に對して中高型は

(イ) 預ゲル、恐レル、隠レル、崩レル、滯レル、調ベル、育テル、助ゲル、倒レル、疲レル、

勤メル、眺メル、流レル、離レル、破レル、別レル、

(ロ) 鍛エル、答エル、揃エル、

の類で、その型の相は

アズゲル、アズゲダ、アズゲデ、……………

コダエル、コダエダ、コダエデ、……………

となり、一般にはぼゞ下中上下と表記され、第三音節を卓立させるが、その第三音節が(ロ)のやうに獨立性に乏しいものは、第二音節に山が來るのが普通である。

この中高型はその相に於て多少地方差を認めるが、東京との型の對應は緊密で、殆ど例外なしに東京の中高型「下上上申」になつてゐる。

(七) 形 容、詞

二音節語は

(良) エー、

(無) ネ！

の如く頭高に發音され、その連用形も エグナル(良くなる) ネグナル(無くなる) のやうに頭高である。

東京語で普通三音節のものは當方言で多く二音節に發音される。

(イ) アゲ(赤)、アセ(淺)、アメ(甘)、アズ(厚)、ウス(薄)、オセ(遅)、カデ(堅)、クレ(暗)、カレ(辛)……………(平板的)

(ロ) アツ(暑、熱)、エレ(偉)、オス(惜)、カエ(痒)、クレ(黒)、セメ(狭)、タゲ(高)、ツケ(近)、ツエ(強)、ナゲ(長)、ニゲ(苦)、ハエ(早)、フケ(深)、ワゲ(若)……………(尾高型)

右の(イ)類は東京の平板型「アカイ」(下中中)に相當するもので、當方言では一見尾高的に發音されるが仔細に觀察すると、やはり下中と表記して平板型とすべきものである。

その連用形や連體形も次の通り平板である。

アガグ(赤)・アゲ
アメグ(甘)・アメ

(ロ)類は東京の中高型「アツイ」(下上中)に相當するもので對應も緊密である。

型の相は「下上」と表記して(イ)類と區別される(粗雑な觀察では(イ)類の型と混同する位である)。その連體形はワゲ(若)のやうに終止形の型と同じであるが、連用形はワガグ(若)のやうに中高型と

なる。

尚(イ)類に入るもので三音節に發音されるもの、例へばカルエ(輕)等は下下中(人によれば下中中、以下同じ)のやうにやはり平板に發音され、その活用形も平板的である。

(ロ)類に入るもので三音節に發音されるもの、例へばスロエ(白)等は下上中の中高型でその連用形も連體形も同じ相である。

スログ(連用)・スロエ(連體)

東京語で四音節形容詞も三音節語の場合に準じて多く三音節に發音され、型は下下中(又は下中中)の平板型と、下下上の尾高型とある。

〔平板型〕 アブネ(危)、アヤス(怪)、カナス(悲)、ソメテ(冷) ……

〔尾高型〕 ウルセ(煩)、ウレシ(嬉)、キタネ(穢)、サンビン(淋) ……

平板型は東京の平板型と、尾高型は東京の下上上中ウルサイの類と夫々よく對應してゐる。

以上名詞・動詞・形容詞を通じて起伏式の型は一音節だけ一個所つつ高める事は興味あることである。

乙、東北特殊アクセント

前節述べたものは多型アクセントの中、最も優勢なものであつたが、之に對して東北アクセント

の變種と見られるものが一部地域に多少づつある。その主なもののみ二三挙げる。

(一) 宮城縣北部地方

石巻市古川町を例にとることにする。

(イ) 二音節名詞の中

飴 蟻 石、牛、梅、岡、顔、柿、垣、風、蟹、鐘、紙、壁、殻、川、傷、北、霧、口、國、
腰、瘤、酒、皿、杉、蟬……

等青森市を始め東北アクセントの多くの地方で下中又は下下の平板であつた語を中下とでも表記すべきやうに

アメ アリ エス ウス

と發音する。發音者が緊張したり感動したりして不意に發音する時はアメ、アリ、エスと聞えて、ちよつと上中の頭高型と誤認することがある。

人に由つては丁寧な發音に於て全平に近くもなるし、又文の中では自然の談話でも殆ど全平に現れるのが普通であつて、盛岡等に觀られる全平の型との連繫を想はせる（盛岡等ではこれらの語群がすべて全平型である）。

(ロ) 東北アクセントの多くの地帯で頭高型の

兄、息、臼、海、帶、數、絹、鯉、猿、足袋、粒、鶴、茄子、葱、箸、針、松、匏、麥等の類が反對に尾高型に發音され、助詞は低く續く。これは松島町登米町氣仙沼町はもとより、岩手縣南部地方（一關を中心とする）及び同縣南部寄りの海岸地方（越喜來村等を中心とする）等に至つて更に徹底してゐる。

(ハ) 行グ、賣ル、追ウ、置グ、押ス、買ウ、貸ス、刈ル、聞グ、汲ム、敷グ、死ヌ、抱グ、散ル……………

等東北アクセントで下中又は尾高氣味の平板型であつたものを、中下のやうに發音する（丁寧な發音では全平に近くも現れる）。この現象は頭高型の

アウ(逢)、アム(編)、アル(有)、ウム(生)、カグ(書)、コグ(漕)、ヌグ(脱)……………

の類と混亂する過程の第一歩である。

(ニ) 東北アクセントの地域の大部分で中高型の三音節一段活用動詞の活用形の型は上二段下一段の區別無しに全く同一であり、例へばタ、テに續く型は何れも中高型に統一されてゐたのに、當地方では兩者を區別して、上一段動詞は平板型になり

(起) オギル…………… オキタ、オキテ

(落) オズル…………… オツタ、オツテ

下二段動詞は次の通り中高型で

(掛) カゲル …… カゲダ、カゲデ

(逃) ニゲル …… ニゲダ、ニゲデ

以上主流アクセントと趣を異にする數點を擧げたが、それらの中には近畿的の句も多少は認められる。然し仔細に觀察すれば東北アクセントの變化過程と考へられる節が多い。

(二) 山形縣北村山郡大石田町地方その他

(イ) 二音節名詞の中、東北アクセントの地域で平板型の

節 蟻、石、牛、梅、岡、顔、柿、垣、風……(前出語例參照)

の類がアメ、アリ、エス、ウス……のやうに略中下の相に發音される。此の點前項宮城縣北部地方の特徴と通ふ(これも丁寧な發音では全平に近い)。

(ロ) 青、赤、朝、足、汗、跡、穴、網、雨、粟、家、池、板、絲、犬、芋、色、腕、魚、馬、
臙、瓜、櫛、鬼、親、鍵、髮、皮、菊、草、櫛、靴、熊、雲、倉、米、坂、鞘、鹽、式、柴、
鳥、尻、白、山、夢、指、……

の類は東北アクセントの地域では、殆ど尾高型となるのであるが、此の地方では總て反對にアオ、アガ、アサ、アスのやうに頭高に發音する。この型は前記イの型と混同して、動もすれば兩者混亂

の兆を醸すもので、曖昧アクセント乃至二型アクセントへの過程を想はせる。

尾花澤町も之と共通する所が多い。

最上郡舟形村は地理的には東北アクセントの新庄町に近く、又此の大石田町にも隣り、アクセントもその中間的影響を受けてゐる。

同郡東小國村向町は大體大石田町式であるが、二音節動詞は次の通り、已に頭高型に一型化してしまひ、三音節動詞も四段活用のもものは原則として中高型の一型である。

エグ、エツタ(行) ウル、ウツタ(賣)
オス、オスタ(押)

一音節名詞等は同郡大字眞柄の部落では既に一型化してゐて

火が・日が、

齒ガ・葉ガ、

菜ガ・名ガ

等をはじめ總ての語に於て區別しない。

(三) 岩手縣南部地方

岩手縣の南部地方、即ち東磐井・西磐井・氣仙の三郡は東北一般及び岩手縣の中部・北部とかなり相違してゐる點が認められる。

その中、最も顯著なる事實は

秋、跡、雨、粟、息、稻、臼、瓜、影、傘、數、肩、絹、錐、猿、空、種、箸、鶴、針、前、

等の語が尾高型に統一されてゐる事である。これ等は東京に於ては殆ど全部が頭高型に發音され、此の地方とは正反對になつてゐる。

岩手縣に於ても、盛岡市をはじめ岩手・九戸・下閉伊の殆ど全部の地方と上閉伊の一部地方とは東京的に頭高的に發音され、南部の三郡とは反對になつてゐるのである。そして兩者のほゞ中間地帯に當る地方、即ち上閉伊の大部分と紫波・稗貫・和賀・江刺・膽澤等の殆ど總ての地方は、頭高の語と尾高の語とが混合してゐる。しかも興味深いことは、その尾高型に發音されてゐる語は廣い母音[a][e][o]が第二音節に含まれて居るものであり、狭い母音[i][u]が第二音節に含まれると、原則として頭高型になつてゐると云ふ事實である。

尙本縣北端の二戸郡の殆ど全部もこの中間地帯と同様の母音の影響を受けてゐる。

概して當地方のアクセントは薄れて、不明になりつゝあるやうである。特に青年以下の者に於て自らのアクセントに自信がないと告白したり、又事實動搖した状態、例へば一語に就いて數種の型に發音する者もかなり認められる。

- (イ)(四) 岩手縣中部北部の海岸地方
東北アクセントでは

青、赤、汗、跡、雨、粟、板、絲、襪、式、柴、白、蕎麥、側、空、種、生、喉、鮎、舟、孫、窓、婿……………

の類は尾高型であるが、宮古市及びその近隣では之と反對に頭高になつてアオ、アカ……と發音される。廣い母音が第二音節に含まれてゐても、エダ（枝）、エド（絲）……のやうに頭高に發音されて母音の廣狹にあまり影響されない。

これに類する地方は主として當縣の海岸地帯である。この頭高の語は東京でも殆どみな頭高である。

(ロ) 東北アクセントでは二音節動詞の頭高型

勝つ、切る、飲む、読む……………

の類が、タ、テ、ダ、デ等に續く促音便形や撥音便形を尾高氣味の平板に發音してゐる事は既に述べた通りであるが、當地方ではそれと趣を異にして

〔カツ〕 カツタ、カツテ（勝）

〔キル〕 キッタ、キツテ（切）

〔ノム〕 ノンダ、ノンデ（飲）

〔ヨム〕 ヨンダ、ヨンデ（讀）

のやうに、何れもその終止形と同じく頭高型に發音してゐる。この點、東京と同じである。

(ハ) 東北アクセントで三音節一段活用動詞の終止形が中高型の

生きる、起きる、落ちる、逃げる、掛ける……

の類をテ(デ)タ(ダ)に續く場合も中高型に發音してゐるが、當地方ではそれ等を、

〔エギル〕 エギダ エギデ (生)

〔オギル〕 オギダ オギデ (起)

〔ニゲル〕 ニゲダ ニゲデ (逃)

〔カゲル〕 カゲダ カゲデ (掛)

のやうに頭高型に發音してゐる。この點も亦東京と同じである。

以上は東北アクセントと異なるところであるが、その特徴は東京的色彩を帯びてゐることである。しかし當地方のアクセント體系全體を大觀すれば、やはり東北アクセントとも密接な關係がある。

すなはち一音節名詞や三音節及びそれ以上の多音節名詞でも、その型の相はほぼ東北アクセントと一致し、又型所屬の語例も殆ど共通である。
又二音節名詞にしても

牛、梅、柿、風、顔、口……（前出）

の類は何れも平板的であり、又

石、音、川、紙、殻、弦、橋、旗……………

の類も亦何れも主流と同様に平板で

エ_グ(池)、エヌ(大)、シマ(馬)、ウデ(腕)、クモ(雲)、サガ(坂)、ナワ(縄)……

の類との區別（かなり古代からの區別）を保つてゐる。

その他形容詞の型の相にしても、全く東北アクセントの型の相と一致する。

岩泉町（下閉伊郡）・種市村（多少例外あり）・宇部村・長内村・山形村（九戸郡）等も亦この宮古市のアクセントと近似するものである。

丙、一型アクセント

南奥の大部分すなはち宮城縣南方、山形縣南半即ち米澤市・山形市を中心とする地方及び福島縣に行はれるアクセントで、栃木・茨城縣、關東北部地方に接續するものである。

今まで述べて來た多型アクセントは「花」と「鼻」、「雨」と「飴」、「着る」と「切る」、「腫れる」と「晴れる」、「厚い」と「暑い」等名詞・動詞・形容詞を通じて同音異義の語を言ひ分けたし、又その他の總ての語にもアクセントの型がきまつてゐた。

然るに茲に述べむとするものはそれ等とは趣を異にし、あらゆる語を通じてアクセントに出る意味の區別がない。さればとてどんな調子に發音しても良いと云ふのでなく、自らそこにはきまりがある。すはち同數の音節から成る語が同じ條件のもとに發音される時は常に同じ型が現れる。

(イ) 一音節語

ツガ(血)、ヒガ(日、火)、キガ(氣、木)、ハガ(葉、齒)……

のやうに、文の中の一部として助詞までを拔出して見ると、ほど「下中」に近い相を示す。即ち文としては「ツガデタ」(血が出た)、「ツガデタ、ツガデタ」等となる。これが最も自然に近い平靜な談話に現れる形である。

(ロ) 二音節語

アメ(飴、雨)、アリ(蟻)、カミ(紙、髮)、カワ(川、皮)、キグ(効く、聞く、菊)、キタ(北、来た)、キリ(錐、霧、桐)、キル(着る、切る)、ハシ(橋、箸、端)、ハナ(鼻、花)、フル(降、振る)、マグ(幕、膜、巻く、蒔く)……

等のやうに、二音節語を單獨に發音する時、最も自然な發音は第二音節語がやや低まるのが普通である。注意すべきことは、東京その他の二型以上を保つ方言の場合のやうに、「上中」又は「上下」と發音するのではなく、「中下」と表記すべきものである。

東京その他で、例へば、頭高の語が文中に在つても、そのアクセントの山は變らないのが普通であり、又山が變化する方言でも必ず起伏式としての法則を保つものが多いが、此の一型アクセントは文の中では「中下」の型を固く保持することなく、多く自然の談話の中では平板的である。助詞までを拔出すと「アメガ」「アメオ」は下中中的であるが、若し「アメガ」と切つて發音させるならば、最も自然に「アメガ」(下中下)に近いものが現れる。此の點、東京等のやうに多型の地方と異なる所である。これも下上中又は下上下等と混同してはならない。此の氣持を表すには第二音節に「脹み」があると云つてよい。

(ハ) 三音節語

アガエ(赤)、アズエ(厚、暑)、アダマ(頭)、アワセ(拾)、ウサギ(兎)、ウチワ(團扇、内輪)、カラス(烏)……………

これらは第二音節に脹みがあるのが普通である。これに一音節の助詞を附けると、

アダマカ アワセオ ウサギモ

のやうに「下中中下」となる。これは四音節語を發音した時と同じであつて、四音節語では

ナギナダ(薙刀)、ヨミガダ(讀方)、コガダナ(小刀)、ハダラダ(働)、ナガレル(流れる)……………

五音節語でもこの原則は認められるし、又五六音節から成る短文でも共にその第二音節以下最後から二番目までの音節に眼みを持たせる傾向はあるが、文の場合は他の相にもなり易い。それは文節毎に一語に對する上述の原則が働く傾向があるからである。

九州南部（鹿兒島縣志布志町・宮崎縣都城市等を中心とする）等に存する一型アクセントは

ハナ（花、鼻）、サクラ（櫻）、ヨンカク（讀方）、ナガレタ（流れた）、イソガシ（忙しい）、

のやうに最後の一個所を卓立させ、助詞が附けばヒガ（火、日）、ハナガ（花、鼻）、サクラガ（櫻）のやうに助詞に由が移轉する。全く文節毎に最後の音節を一個所卓立させるのが法則で、これこそ一型アクセントの典型的なものである。東北地方の一型は全くさう云ふ固定性を失つて平板を基調として、俗に云ふ無アクセントと云ふ名を與へても差支ないやうな状態に陥つてゐる。

尙關東北部を始め北陸地方、九州中部、四國の一部等に存するものほど之と同じで、日本全國の一型アクセントはかゝる状態のものが多い。

丁、曖昧アクセント

一型アクセントと東北アクセント、同特殊兩アクセントとの接衝する地帯に曖昧アクセント地帯がある。曖昧アクセントとは嘗て持つてゐた型を失ひ、一型化せんとして尙且多少型の記憶を存してゐるアクセント状態である。

(一) 宮城縣中部

例一 宮城郡高砂村(仙臺市の約東二里)

粗雑な觀察では一型アクセントと誤つてしまふが、當地方の人にはなほ型の記憶があり、二音節語に

|アメ(雨)、|カワ(皮)、|ハス(箸)、|ハナ(花)

|アメ(飴)、|カワ(川)、|ハス(橋)、|ハナ(鼻)

のやうに若干の語に「下中」と「中下」との區別を持つてゐる。この下中なるものは東京及び東北アクセントの起伏式の型に對應し、中下なるものは平板型に對應して居る。然し文中では

(雨) |アメ……|アメガ(降ル)

(飴) |アメ……|アメガ(食デ)

(花) |ハナ……|ハナ(咲エダ)

(鼻) |ハナ……|ハナ(出ダ)

となつて區別が無くなる。

一音節語・三音節語及びそれ以上は名詞・動詞・形容詞みな一型である。三音節動詞は第二音節を服まず一型で、タ、テの續く連用形も同じ型であるが、上一段活用だけは

オギル(起)、オキク、オキテ

オブル(落)、オツタ、オツテ

のやうに全平に近く發音される。これは過去の相の名残であらう。

例二 宮城郡七北田村(仙臺市の北方十五町)

こゝでも全く高砂村と同様な状態が見られる。

(二) 宮城郡の北部地方はかゝる曖昧アクセントの地帯であるが、海岸地方特に松島灣に臨む方面はかなり型の區別が保存されて居り、松島町等では文の中でも型を保持するものが多く、又動詞も區別されてゐる。黒川村等も大體之に準ずる。野蒜村等では一音節名詞まで區別して居り、石巻市の明瞭なアクセントの地方である。

桃生郡・志田郡以北は多型地方に屬し、既に述べた特殊アクセントの明瞭な型を保持する地方であつて、こゝに述べた宮城縣中部地方の曖昧アクセントは是等が一型と接觸した結果生じた一型化、一歩前の状態であらう。仙臺市の一般市民は一型アクセントであるが、往々にして「雨」と「飴」、「花」と「鼻」、「紙」と「神」の如き極少數の語に於て微妙な型の相違を保存して居るものがある。

これは靜かに内省して纔に蘇る底のもので、曖昧アクセントの最後のものではあらう。

(三) 山形縣西置賜郡豊川村や北村山郡袖崎村の南部地域にも曖昧状態が觀察される。又最上郡古

口村や北村山郡宮澤村等も相當混亂狀態に在つて、曖昧アクセントへの過渡的狀態を示してゐる。

北奥方言は岩手縣の海岸寄りに狭小な地域に互つて特殊アクセントのある外、全部東北アクセントの領域であり、南奥方言は山形縣の最上郡の一部と岩手縣の膽澤郡・江刺郡の東北アクセントを除けば、一型アクセント及び之と東北アクセントの接衝の結果生じた特殊アクセント及び曖昧アクセントの地域である。

仙臺市は一部を曖昧地帯に入れる事も考へ得るが、全體から云へば一型地帯に入れるのが穩である。従つて仙臺灣から仙臺市とその北郊七北田高砂村との中間に引く線に始り、宮城郡廣瀬村の北方を過ぎ宮城郡を横斷して山形縣境に出で、宮城・山形兩縣境を少し北上して、宮城縣加美郡と山形縣と接する邊から山形縣の北村山郡東根町・楯岡町等と袖崎村との中間に向つて引く線は、ほぼ一型地帯を南部に切入れる。この線は北村山郡大高根村と横山村との中間を縫ひ、最上郡境に沿うて南下し、西村山郡の中、東田川郡寄りの地方を兩郡界とほぼ平行に南下して新潟縣境に出る。

この一本の線を境として一型と對立する東北アクセントが、その前衛を甚だしく動搖させられ、一部は極めて曖昧に、一部は特殊のものに變形せられてゐる有様は興味深い。現在の曖昧アクセントの地方が一型の領域となることもさう遠くあるまい。

第四章 東北方言の語法

一 假定條件の云ひ方

文語では假定の云ひ方に、動詞の未然形を用ひて「書かば」と云ふのと已然形を用ひて「書けば」と云ふのと二通あるが、口語では大多數の方言に於て條件を假定するにはすべて已然形のみを用ふるやうになり、今日東京語では未然形の用法は助動詞の「なり」「たり」の助を借りて、「書くならば」「書くなら」書いたらば（「書いたら」）と云ふ形に迹を留めて、書カバと云ふ云ひ方は全く無くなつてゐる。然るに東北地方にはなほ未然形の用法が残つてゐて、もつとも多く之を用ふるのが岩手縣の方言である。南奥方言には已然形を用ふる外、もとの未然形のあらはした意味を云ふためには「ことあらば」から出たゴツクラとかゴツテとか云ふ云ひ方を發達させてゐる。その分布を見ると、仙臺を中心として擴つたものであることが明瞭に分かる。大略その種類を列舉すると、「書かば」の意味は

カクゴツトラバ カクゴツトラ カクゴツテ カクゴツク カクゴツチャラ

青森縣に於ける未然形の用法は左變動詞にのみ多い。その比較は

ス レ バ	森	青	スル ゴツ タ(バ) テ	ス レ バ	セ バ	シ ラ バ	ク ル ゴツ タ(ラ) テ	ク レ バ	ク ラ バ	ウ ケル ゴツ タ ラ	ウ ケル ゴツ テ	ウ ケ レ バ	ウ ケ ラ バ	ウ ケ ラ バ	オ キル ゴツ タ ラ	オ キル ゴツ テ
8	森	青														
4	前	弘		1	6	3		5	7			3	7			
5	輕津東			3	7	4		5	0			5	6			
6	輕津西			7	7	13		6	11			6	14			
2	輕津中			1	2	4		4	5			2	4			
3	輕津南					1		0	1				1			
1	輕津北		2	5	16	3		10	6			12	7			
1	北	上	2	6	3	7	2	10	9			7	8			
2	北	下		3	3	5	1	6	6			6	5			
5	戸	三	1	1		2	1	1	7	1	2	5				
5	戸	八	1	2	3	4	2	2	5	2	3	8	3			
			4		4	3	5	3	1	5	6	4	5			
			2	3		8	2	3	6	3	3	6	3			
			2	3	2	8	2	4	9	4	3	11	3			
			10	7	5	11	10	9	11	10	8	10	10			
			3	3	2	2	1	4	2	8	2	2	2			

セ	19	3	5	6	5	10	9	4	4	8	2
ヘ	10		7	8	6	11	2				1

その他の動詞に於ける未然形の用法は上北・下北・三戸等の南部領に在るもので、四段「習ふ」は

ナララバ ナロラバ ナルラバ

などと云ひ、「来る」は

コラバ コエバ クラバ

など云ふ。上下一段活用動詞に於てオキラバ、ウケラバなどはこの地方で古老の口にのみ上るものである。

青森縣の已然形を用ふる假定條件法ナラエバはナラレバと云ふことが多い。

秋田縣ではカケバ、ナラエバ、オキレバ、ウケレバが普通で、カカバ、ナラワバ、オキラバ、ウケラバも併せて使ふのは南秋田・山本・鹿角・北秋田・平鹿・秋田市等で、こゝにはゴツタバと云ふ南奥系の形も見える。「来る」についてはコエバと云ふ形が全體にもつとも優勢で、またケバとも云ふ。クルゴツタラ（ゴツタバ）は雄勝・平鹿・仙北にある。「爲る」と云ふ動詞ではスレバ、セバ並び行はれるが、セバの方が優勢である。河邊郡ではゴツタラ系を主として用ひ

スルゴツタバ

スルゴツタラ

スゴツタバ

スゴツタラ

など云ふ。

山形縣では未然形を用ふることは廢れて、村山地方で老人が使ふだけである。但し庄内地方では左變と加變とに於ては

コエバ セバ

をもつばら用ひる。

宮城縣ではゴツタラ類を用ひ、その崩れたゴツテが最も普通である。

カクゴツテ

ナラウゴツテ

オキルゴツテ

ウケルゴツテ

クルゴツテ

スルゴツテ

など云ふ。但し玉造・遠田・栗原・桃生・本吉・牡鹿諸郡では未然形がなほ相當に勢力がある。又これらの地方ではゴツタラ類も原形のゴツタラそのものを用ふことが多い。

福島縣ではカケバ、ナラユバ、オキレバ、ウケレバ、クレバ、スレバが普通であるが、左變に於てセバ、シラバの如き未然形は會津地方で用ひられる。ゴツタラ、ゴツテを用ひるのは信夫・伊達

・安達の地方と海岸の相馬・雙葉・石城・田村の地方である。
形容詞の場合にも假定の云ひ方に古代語では未然形を用ふるものと已然形を用ふるものとの二種があり、今日東京語で已然形に混一してゐることは動詞の場合と同一であるが、東北方言でも未然

形を亡つてゐることは動詞の場合と違つて東京の方言と同じである。然しその假定の云ひ方には東
北方言は東北方言としての特徴がある。

南奥方言では動詞の場合のやうにゴツタラを用ひる。例へば

ウスエゴツタラ

ウスエゴンダラ (薄くば)

クルスエゴツタラ

クルスエゴンダラ (苦しくば)

など云ふ。動詞の場合は宮城県ではゴツクラよりもその變化したゴツテを主に使ふと云つたが、形
容詞の場合はその反對でゴツタラを主とし、ゴツテは少い。

北奥方言では

ウスバ

クルシバ

と云ふ。語幹にバをつけたもののやうに見えるが、終止形ウスイ、クルシイにバを附けたものであ
ることは別項形容詞の條に述べる。それ故に岩手縣ではウスエバと云ひ、それが又ウセバとなつて
ゐる。

二 既定條件の云ひ方

古代語に於ては、動詞の已然形にバ、ドモを附けてすでに成立つた條件をあらはし、バは順當の

結果の現れる場合に、ドモは反對の結果の現れる場合に用ひたが、この云ひ方は近代語に入つて廢れ、バを用ふる方は室町時代には助動詞「たり」の伴ふものに附いて「敵ノ曹操ガ兵船ヘ吹附タレバ」「中華若木詩抄」上のやうに用ひたものは多いが、その外は「なれば」「あれば」「ござれば」等を除いては殆ど無くなり、「によつて」「ほどに」などを用ひて現す方が多くなつた。

サアルニヨリテ字法ハ定マラヌツ（「中華若木詩抄」上）

夢ニ化 胡蝶ト云ホトニウタカイモナキコトツ（同下）

その後「さかいに」があらはれ、ついで「から」が現れ、今日東京語などではもつとも普通にこの方法によつてゐる。

今、標準語と同じカラについては述べない。その外に東北方言に用ひられるものに左の三種がある。

(1) ハ デ 系

(2) サ カ エ 系

ハデ系にハデ、ハンテ、ヘデ、エンテなど種々の語がある。ハデからハンテが出てくるわけは音韻の章（七六頁）に述べた。ハデとハンテは秋田縣・青森縣（八戸市を除く）と岩手縣の盛岡市・岩手・紫波・稗貫・和賀・九戸・二戸諸郡を覆うて居り、青森縣の南部領から岩手縣の南部領にかけ

てはハデ、ハンテと並んでヘデがある。

サカイ系はサカイ、サカイニが青森縣の下北・上北・三戸から岩手縣の二戸・九戸・下閉伊にかけて存し、それに左の如き形がある。

サカイ

サカイニ

シケア

シケアニ

スカー

スケー

スケアー

シケ

スケ

之と並んでセーデがあるのは、サカエデの變化に違ひない。

この地域に隣る岩手縣紫波郡等に

ウント、アルダス、ケル（澤山あるからやらう）

の如きスがあるが、やはりサカエの甚しく崩れたもので、スケなどから來てゐるものと思はれる。サカエ、サカエデは山形縣の庄内及び村山地方にあり、最も普通な形はサゲであるが、次のやうな種々なものがある。

サガエ

サカエデ

サゲー

サゲデ

スケ

ゲテ

ゲア

ゲ

この地域と隣る秋田縣の山形郡にはハゲ（ハゲー、ハゲア、ハゲアン、ハンゲアなどとも云ふ）のあるのはサケとハゲとの混淆形と思はれる。仙北・平鹿・雄勝にあるエンテはハンテがヘンテと

なつてその更に變化したものであらう。

サカエ、サカエニは今京阪にあるサカイ、サカイニと同じものであり、サカエデは江戸の文献に見える「さかいで」と相通するものである。ハデは「程に」の崩れたもので、或説のサカイデの變形とは考へられないことは、他に論じたことがある（『方言研究』第四講演論文集「東北方言に於ける關西方言的要素について」）。

反對の結果を伴ふ場合の既定條件を現すには、東京語では直接動詞の已然形を用ひずに書クケレドモ、習ウケレドモなど云ふが、東北方言ではこの形が

(1) カクゲントモ ナラウゲントモ

と云ふ形で用ひられる外

(2) カクドモ ナラウドモ

(3) カクバテ カクタテ ナラウバテ ナラウタテ

と云ひ、(1)は福島縣・宮城縣と庄内地方を除く山形縣全部、岩手縣の伊達領に用ひられるものであり、(2)は山形縣の庄内地方から秋田縣・青森縣・岩手縣の全部に行はれるものである。従つてこの縣の伊達領はこの形とゲントモと云ふ形とを混用する地域である。(3)は青森縣と秋田縣に用ひられる形である。

ゲントモ（音韻の章七六頁参照）は宮城縣では加美・志田・桃生・牡鹿より北ではゲットモとも云ひ、その他にはあまり變つた形がないが、福島縣ではその崩れた形が多く

ゲントモ

ケンドモ

ケンジヨモ

ケンジヨ

ゲンチヨ

ゲンニヨモ

ゲンチヨモ

ゲンチモ

ゲンゼモ

ゲンジエモ

ゲンギヨ

ゲンギモ

ゲンギヨモ

ゲットモ

ギンチヨモ

など用ひられる。

ドモは北奥方言では終止形について

カグドモ

ナラウドモ

オギルドモ

ウゲルドモ

クルドモ

スルドモ

と云ふ。岩手・秋田・青森三縣みな同じであるが、スルドモは青森縣ではスドモとも云ふ。

バテとタテは青森縣の津輕領と南部領とを分つ特徴で、秋田縣の北秋田郡でもバテをつかふ。タテは雄勝・平鹿・仙北・由利諸郡にある。バテはバツテとも云ひ、タテもタツテとも云ふ。津輕ではバタテとも云ふ。左變動詞につゞくときはスバテと云ふ。

形容詞に於ても動詞の場合と同様で、南奥方言ではゲントモを用ひ

ウスエゲントモ（薄いけれども）

クルスエгентモ（苦しいけれども）
など云ふ。

その他多くの變化があることも動詞の場合と同じである。

北奥方言では

ウスドモ （薄いけれども）

クルシドモ （苦しいけれども）

と云ひ、又バテ、タテを用ひて

ウスバテ（―タテ）（薄いけれども）

クルシバテ（―タテ）（苦しいけれども）

と云ふのも動詞の場合と同じ。

分布も大體動詞について述べた所と同じく、ドモは山形縣の庄内地方、秋田・青森・岩手全體に行はれ、バテは青森縣の津輕地方と秋田縣の北秋田郡とに行はれる。タテは青森縣の南部領と秋田縣雄勝・仙北・山形・平鹿等の諸郡に行はれ、バタテと云ふのは津輕地方特に青森市に多く行はれる。ドモを用ふのは老人語であると北津輕郡からの回答には書いてあつた。動詞と少し違ふことはケドモ、ケンドモと云ふ形が津輕地方で相當に多く用ひられることである。動詞の場合にもないで

はないが、形容詞の比ではない。

三 形容詞の語形

形容詞の語幹がア列音であるものは、語尾のイと融合して開音のエ[ɛ]の長音となり、北奥方言では更にそれが短音化する。

タゲ (高ス) tage: > tage

ウルセ (うるちス) ūruse: > ūruse

その影響で連用形も

タゲク (たかく) tagegui

ウルセグ (うるちく) ūrusegui

となる。この場合、津軽方言では更に開いたæがあると北山長雄氏は觀察して居られる。すなはち

タゲアグ (高く) tagægui

ウルセアグ (うるちく) ūruseægui

これは主として村落の男女及び町方の無教養な下層社會の男女の發音であるさうだ(津軽方言音

韻法則「國語研究第二卷四號」)。

語幹がウ列音であるものは北奥方言では[u]となり、「暑」はアジ(アズ) [adzi]、「安」はヤシ(ヤス) [jasi]。「寒」はサビ [sabi] となる。「秋田方言」に

あづ湯だごど (熱い湯であること)

この墨あげあんげあうす (此の墨は非常に薄い)

これあやす筆だ (これは安い筆だ)

の例を擧げて、アヅ、ウス、ヤス等をそれ／＼アツイ、ウスイ、ヤスイのイの省かれたものと見てあるのは當らない。

ちよつと見るとさう見えるし、殊に岩手縣の如きシチジがスツズと發音されるところではその感があるが、寒イがサミ、サブイがサビとなつて居るのと比較すると、これらの形がどう云ふ性質のものであるか容易に判斷できるであらう。

語幹がオ列音である形容詞も語尾イと融合して北奥方言では[i]となる。

オセ (遅ス) ose クレ (黒ス) kure フテ (太ス) fute

南奥方言ではこの融合は起らずに

オソエ (遅ス) osoe クロエ (黒ス) kuroe フトエ (太ス) futoe

など云ふ。

形容詞の語幹がそのまゝ用ひられるやうに見えることは、條件法の場合にも見られる。北奥方言では

ウスバ (ウシバ)

usiba

ウسدモ (ウシモド)

usidomo

クルシバ

kurisiba

クルシドモ

kuritusidomo

と云ふ。ウスイバ、ウスイドモ、クルシイバ、クルシイドモの融合したものである。その他の形容詞では

フテバ (太ければ)

フテドモ

(太いけれども)

ツエバ (強ければ)

ツエドモ

(強いけれども)

クレバ (黒ければ)

クレドモ

(黒いけれども)

アカエバ (赤ければ)

アカエドモ

(赤いけれども)

アサエバ (浅ければ)

アサエドモ

(浅いけれども)

北奥方言の形容詞は形が簡單で、この外にク、シクの語尾があるばかりである。

この語尾に否定の助動詞が附くと、

ウスグナエ (薄くない)

フトグナエ (太くない)

と云ひ、助詞「て」が附くと、

ウスクテ (薄くて)

フトクテ (太くて)

など云ふ。この場合、秋田や青森ではクがフとなつて

フトフテ (太くて)

ツヨフテ (強くて)

など云ふ。

南奥方言ではケレ、シケレの語尾が逆説條件法の場合にデントモとなつて用ひられることは前に述べた。

ナリ活形容動詞は北奥方言では「静かな町」「綺麗な家」が

シズガダマズ (静かな町)

キレダイエ (綺麗な家)

など云はれる。假定の云ひ方でもシズガダバ (静かならば)、キレダバ (綺麗ならば) と云ふ。これは「静かな」「綺麗な」が音韻上變化したものでなく、東京語で終止形として用ひる「だ」と同じものに違ひない。山形縣の庄内地方、秋田縣、青森縣に於ける現象で、岩手縣では岩手・九戸・二

戸郡に見られ、その他には殆ど無い。

四 未来推量形

未来推量形にベイを用ふことは東北方言に通ずるものである。仙臺の「濱狹」に仙臺の「べい」を挙げ、それに江戸の「べ」が対照されて、江戸語の用例を註して、「しやだんべ」、「よかんべい」などいふ」とある。その説明には

可也。べい、さうだんべいと詞のとまりにべいといふ事をつくる也。榮花物語にうへにおはしましてあべい事も源氏花宴にもいとおしうもあるべいなどあり。其外あべい事などいふもの多しとある。中古以来「べき」が音便で「べい」となつたものが、東國語に於て終止形として用ひられるやうになつて發達したものである。

大里の「仙臺方言」には

ベイ、べ、ベイチヤ 他方にてヤウと云所に用ゆ、ネベイ（終ヤウ）ヲキベイ、イクベイ、カヘルベイと云類、或は略してイクベ、カヘルベなど云ことあり。又ベイの下にチャアと云詞をつける。ネベイチヤア、ヲキルベイチヤア、ヨカンベイチヤアと云類なり

室町時代に關東方言の特徴であつたことはロドリゲスの文典の記載で分るが（「東北方言の成立」參

照、當時東北地方がどうであつたか分らない。然し江戸時代の享保には仙臺でもこの云ひ方をしたことは「仙臺方言伊呂波寄」に左の如く擧げてゐることと分る。

いんだいそうだんべい

さうであらうといふ事

すつほいはうろくべい

めいわくしやうといふ事

これが今日東北方言殆ど一般に通ずる云ひ方であるが、多少はこの形の無いところもある。又これが動詞に連る方法やその形が各地方で同じでないから、その分布を述べると、四段活用動詞に於ては、例へば「書かう」「習はう」はカクベ、ナラウベと云ふことが福島・宮城・山形を通じて一般であるが、岩手縣はナラウベと並んでナラウンベと云ひ、青森縣ではカクベア、ナラウベア若しくはカグベシ、ナラウベシと云ふ。山形縣でも庄内地方はベーを用ひずにカゴー、ナラオーと云ひ、この形が秋田に入つてカガー、ナラワーともなる。秋田にもカグベ、カクベシ、ナラウベ、ナラウベシと云ふのを用ふる所があるが、殆ど云ふに足りない。

一段活用ではベを用ひる地方とペを用ひる地方とあつて、福島・宮城はオキツペ、ウゲツペであるが、山形縣ではオギンベ、ウゲンベ、岩手縣はオギベ、オギルベ、オギルンベ、ウゲベ、ウゲルベ、ウゲンベ、青森縣はオギベア、オギベシ(多少はオギルベア、オギルベシ)、ウゲベア、ウゲベシ(これにもウゲルベア、ウゲルベシが多少ある)と云ふ。山形縣の庄内地方は「起きる」の未來

推量形はオギロー、「受ける」の同形は東田川郡・飽海郡でウゲロ、西田川郡ではウゲヨー、ウゲロー、ウゲラ、ウゲラーと云ふ。

加行變格左行變格にもべとべとの二種があり、分布は一段活用の場合とほど一致して居り、福島縣では北會津・耶麻・河沼・大沼・若松市がクンベ、スンベと云ふのを除いて、クツペ、スツペ、宮城縣では左變にはスンベと云ふこともあるが一般にはスツペで、加變はクツペ、その他は山形でクンベ、スンベ、岩手でクベ、クルベ、クンベ、スルベ、スンベ、シベ、シンベ、青森縣ではクルベア、クルベシ、シベア、シベシ、山形縣の庄内地方は四段一段の場合と同じくベイ言葉でなく、コー、ソー、ショーと云ひ、秋田では、クルベ、スルベと並んでクロー、クラー、スロー、シロ、サー、ソー、ショーを用ひる。

國語調査委員會作製の方言分布によると、秋田縣・山形縣庄内地方はよいとして、青森縣を全く書コー、受ケヨーの如き地域としてゐるが、自分の調査によると次の如き結果となつてゐる。

カゲベア	15	市森青
カゲベシ	7	
	3	市前弘
	1	市戸八
	9	輕津東
	6	輕津西
	6	輕津中
	8	輕津南
	14	輕津北
	7	北 上
	4	北 下
	6	戸 三
	2	

五 動詞の命令形

四段活用、例へば「書く」の命令形はすべてカケ、カゲであるが、その他の動詞になると、分布

第四章 東北方言の語法

ウ ゲ ヨ 1	ウ ゲ ル ベ ア	ウ ゲ ル ベ シ	ウ ゲ ベ シ	ウ ゲ ベ ア			カ グ バ 1	カ グ ベ 1	カ グ ベ
3	2	2	5	13	市森青	*	6	1	
1	1	2	1	1	1	市前弘		1	
						*	1	2	
1				1	市戸八				
	1	2		3	8	軽津東	*	3	1
									1 1
	1		2	4	軽津西				
					2	軽津中	*	2	
								2	
2				7	軽津南			3	
2	2	1		6	9	軽津北		3	1
	1				4	北 上			
1				3	2	北 下		2	
							3		4 3
3	1		1	6	戸 三				

がさまざまになつてゐる。

四段活用以外の動詞に「ろ」を附けることは萬葉集の東歌以來東國語の特徴となつてゐるが、文永弘安頃の「塵袋」にも

坂東ノ人ノコトバノスエニロノ字ヲツクルコアリナニセロカセロト云フ

とあつて人の注意する所となつてゐたが、この形が今日はまた東北方言一般の特徴になつてゐる。

この東部方言の特徴に對して西部方言では昔の「よ」の系統に屬する「起きる」「受けろ」などの形を用ふることを特徴とし、東北方言に於ても山形縣庄内地方から秋田縣・青森縣にかけてこの形があるが、次第に「ろ」の系統が勢力を伸張し、最も多く關西方言の形式を残してゐる左變動詞の上にも關東方言形式のシロ(スロ)を用ひるものが多くなり、上一段下一段の「受ける」「起きる」にはオキー、ウケーの如きは全くなく、南奥方言の如きロは用ひないが、オキレ、ウケレの如き形ばかり用ひてゐる。その分布を述べる。

上一段下一段は大體に於てその分布が平行して居り、「起きる」に於てはオキロと云ふのは福島縣・山形縣の庄内を除く全部、宮城・岩手から青森縣の下北・上北・三戸に及び、山形縣の庄内と秋田縣全體はオキレと云ふ。オキロを用ひることがないではないが、庄内のうち西田川・飽海の兩郡、秋田縣では由利・河邊・平鹿ではオキロを用ひると云ふ報告がない。青森縣の津輕地方はオキ

ロ、オキレ兩形の混淆地帯である。下北・上北・三戸諸郡にもオキレの形が多少あるが、主として行はれるものはオキロである。

下一段のウケロは福島縣や庄内地方を除く山形縣・宮城縣・岩手縣から青森縣の南部領に及び、庄内のうち飽海・西田川の二郡は上一段のオキレ同様ウケレを用ひるが、東田川郡及び秋田縣では多くはないがウケロを用ふところがある。青森縣はウケロ、ウケレの混淆地帯で、西津輕・中津輕で兩形が伯仲して用ひられる外、他の郡ではウケロの方が優勢である。

加行變格では福島にはコイもあるが、コが優勢であり、コとも云ふ。宮城ではコ、コーとコイと殆ど勢力に上下がない。山形縣ではコが少くなり、青森縣・秋田縣では極めて稀で一般にコイである。秋田縣ではコイの外にケが並んで用ひられる。

左行變格では福島縣・宮城縣は一般にシロ（スロ）、山形縣でも庄内以外はみなシロ（スロ）である。庄内地方はシロ（スロ）と並んでセ、シェを用ひる。西田川郡は庄内であるがシロ（スロ）を用ひない。岩手縣ではシロ（スロ）と共にセを用ひるが、膽澤・江刺・西磐井・東磐井・氣仙等の伊達領では全くセを用ひない。

青森縣でもシロと共にセを用ひるか、こゝではこのセがへ若しくはヒとなる傾向がある。秋田縣はシロ、セの外にシレと云ふ形を持つてゐることを以て特徴とする。

六 使役の助動詞

四段活用の動詞に使役の助動詞のつく場合は、例へば「咲く」にサガセルと云ひ、たゞセがシエと云はれることのあることと、青森縣・秋田縣及び岩手縣の二戸郡等でセルがヘルと云はれることのある外特異なことはない。由つてその他の活用の動詞につく場合のみを見よう。因にヘルはヒルとも云ひ互に混同する。

上一段「起きる」、下一段「受ける」、加變「くる」、左變「する」につく場合を見ると、「起きる」の場合は六縣すべてオギラセルと云ふ。青森縣ではオギラヘルとも云ふが、主に津輕地方の習慣で南部領には少く、八戸市の如きは全く無い。秋田縣ではヘルと云ふことが微弱で、比較的多く云ふところは南秋田・北秋田・山本・鹿角等北部の諸郡である。

下一段「受ける」の使役の云ひ方はウゲラセル。これも六縣すべてに通ずる。

加變「来る」の場合はコラセル。これも六縣みな同じである。ヘルを用ひてコラヘルと云ふ所はまへの上一段動詞の場合と同様である。コラセルの外にクラセルを併用するところがある。山形縣の村山地方、岩手縣の北部岩手郡・紫波郡・二戸郡・盛岡市等である。コラセルにクラセルを併用するのは宮城縣の玉造・遠田・栗原・登米諸郡及び石巻市と福島縣の石城・雙葉・石川・西白河・

東白川及び會津地方で、會津の内耶麻郡は特に優勢である。

「爲る」の場合は青森縣に於てサセル、サヘル兩様であるが、他の動詞の場合にヘルがセルに比べて優勢でないのと違ひ、この場合にはむしろサヘルと云ふ方がサセルより多い。これには又シラセルがあり、これにもシラヘルがあるが、この場合には多くの他の動詞につく時と一般にシラセルの方が優勢である。シラセルが他の地方から旅行して來たものであることが分かる。秋田縣はサセル、サシエル、サヒルが雄勝・平鹿・南秋田・鹿角以外にあるが、さう多くはない。シラセルも行はれ、山本・北秋田・秋田市等ではむしろサセルよりも有力であり、鹿角郡に於ては殆ど五角の勢になる。

七 助詞の省略

東北方言では助詞を省く方が普通の云ひ方である。省くと云ふのは東京語などに比較して云ふことで、むしろ國語の古い習慣のやうである。「雨が降つてきた」を雨フツテキタ、「本を取つてくれ」を本トツテクレと云ふ。山形縣置賜郡高畠村の佐藤止己氏が同村の普通の會話を書いて送られたものの中に

オラ、ホダゴドスネ（私はそんな事をしない）

コノエダ、オシヨツチエル（この枝は折れてゐる）
 オママ、アガツテオゴヤエ（御飯をおたべ下さい）
 などある。

「仙臺の方言」の著者土井八枝氏の書いて居られるものに、女中に酢を取つてくれと云はれたら鹽を取つて來た。これは單にスとシとを間ちがへたのではなかつた。スとシとの區別を多くの語についてほど聞き分けるやうになつても、この間違ひを繰返すので氣が附いたのは、東北では酢を取つてくれならば「酢とつてくれ」と云ふのが普通であるのを「酢を」と云つたから、それを鹽と思ふのであつたと云ふ話である。

八 感動助詞「なむし」「なもし」

大里の「仙臺方言」には、仙臺方言では一種の感動助詞としてナムシ、ナモシ、ネナイシヤ、ネナイシ、ナアと云ふやうなものを用ひたことが書いてある。今の東京語のデスネにあたるもののやうである。「仙臺方言」にはそれを説明して

他方にてノと云所に用ゆ。人の物語を聞てサテナムシ、サテナモシ、サテナイシヤ、サテナイシ、サテナアと云ふ類、又人に物語するにコフデナムシ、ア、デナモシなど云類なり

と云つてゐる。さうして序文を方言で書いて終をナムシで結び次のなうな註釋を加へてゐる。

シヤカラシヤイドウモナイゴツタカラノゴツタデバサやくにもたないことでナムシさやうであるぞ

「ゆへのことぞ」の意味の言葉にナムシが附いて念を押す意味を知らせる爲に、「さやうであるぞ」と譯してあるのであらう。

ナムシやナモシと云ふやうなことを聞くと、漱石が「坊ちゃん」に書いてゐる松山方言の「なむ

しと菜飯は違ふぞなもし」を思ひ出す。今日はもう仙臺にはない。宮城縣の郡部には

ナムス 栗原郡澤邊村（七十歳以上の人が用ひると回答があつた）

ナミス 同 花山村

ナームス 本吉郡大谷村

など見える。

東京の「さうですね」にあたる方言例を蒐めて見た。
福島縣ではソーダナイ、ソーダナスの二種が主な形である。前者は福島市・郡山市を中心とする
地方にもつとも普通に用ひられるもので、信夫・伊達・安達・安積・田村・岩瀬・石城諸郡、後者
は福島市・信夫郡・伊達郡で前者と五角の勢で用ひられるほか、會津地方五郡に於て普通に用ひら
れるものである。

この外には

一七六

ソーダナ

ソーダネ

ソーダナシ

の如きものがある。

宮城縣ではソーダネ、ソーダネスが普通の形である。交通不便な所ではネスの方が多い。福島縣に多いナイは宮城縣では福島縣に隣接する伊具郡に多く用ひられる。この外には

ソーダナ

ソーダナス

ソーダナツス

ソーダナエン

ソーダナヤ

等がある。

山形縣では山形市及び之を中心とする地方即ち東村山・西村山・南村山郡ではソーダナツス、シダナツス、ンダネ、ホダナを用ひ、山形市の回答者の説明ではンダナツス、ホダナツスは東京語のソーデスネよりも丁寧であるとあつた。置賜地方ではソーダネシ、ホダナツシと云ふ。庄内三郡は以上の如き言葉を使はず

ンダノ

ンダノ一

ホダノ

ソダノ

の如き云ひ方をする。老人の言葉にはソダノシ、ホダノシを用ひると云ふ。岩手縣の伊達領には

ソーダネス

ソーダネアス

を普通とし、ソーダネを併用する。南部領ではソーダナスがもつとも普通に用ひられる云ひ方で、
氣仙郡には

ソーダネンス

ソーダネーンス

ソーダネアンシ

などが多く用ひられる。盛岡市ではソーダナッスと共に多く用ひられものとして

ソーダナハン

ソナダナハン

と云ふ形を多く用ひると報告されてゐる。

ナモシ類は膽澤・江刺・東磐井・西磐井・氣仙・九戸・三戸諸郡に數箇町村づつ行はれてゐる。

その種類としては

ソーダナモシ

ソーダナムシ

ソーダナムス

ソーダナモス

ソーダナミシ

ソーダガナムシ

ソーデスナムス

ソデスモナモシ

ソーダオナムス

などある。

秋田縣では

ンダナ

ンダナー

を一般に用ひるが、山本郡・北秋田郡等北部ではソーダネの方が多い。雄勝・平鹿・仙北等南部の諸郡では之と共に

ンダンス

ンダンシナ

ソーダンシナ

ソーダナンシ

を多く用ひる。ソーダナンシは北秋田郡にも多く用ひてゐる。

秋田市ではンダナについて普通に用ひられるものに

ソーダネス

ソーダネスハ

ソーダネハー

ソーダネサ

ソーダエナ

等がある。

ソーダナモシ

ンナモシ

と云ふやうなものは多少仙北・由利等に見える。

青森縣で最も普通なものは

ソーダネシ

ソーダナス

ソーダネアス

で上北・下北では

ソーダニシ

三戸では

弘前市ではソーダネスの外にソーダネハをよく用ひる。

ナムシ、ナモシのやうな、古いものの残つてゐるものに次の如きものがある。

ソダナシ

ソダナス

ソダナ一シ

ソダナ一ス

ソーダナムシ (三戸)

ソーダナモシ (北津輕)

ソダナモテ (北津輕)

ソダナモヤ (北津輕)

ソダナモ (北津輕)

ソダモナモセ (南津輕)

ソダモナシ (上北・三戸)

ソダモナ (下北・三戸)

ソダモニシ (上北)

ソダモナモ (北津輕)

第五章 東北方言の語彙

東北方言の特徴を成すと思はれる語彙五十を選んで、その分布を調べて見よう。

(一) 母

(1) アバ、アバ、アッパ等アバ系 (2) ジャチャ、ジャッチャ、ジャジャ等ジャチャ系 (3) カガ、ガガ、ガッカ等ガガ系 (4) オガ、オガチャン、オガサン等オガ系の四種に大別できるが、(1)と(2)とは北奥方言にのみ存するものであるが、その他は東北地方に廣く分布するものである。

アバは古語で、日本の南端にも残つて居り、沖縄縣の八重山列島に在ることは東條操氏の「南島方言資料」に見えて居り、之と系統が同じと思はれるアンマ、ンマーの如きものが首里・大島・國頭等に在つて、恐らく奈良朝の文獻に見える阿母志々(アモシシ)(萬葉二〇)のアモや意毛知々(イモチチ)(同)のオモと同じものであらう。

アバ系の行はれるのは山形縣では庄内地方だけであり、それより廣く秋田縣・青森縣にあり、岩手縣では南部領でとゞまる。

ジャチャ系は秋田縣にもつとも多く用ひられ、青森縣では南部領の上北郡と三戸郡、岩手縣では

南部領だけに行はれてゐる。秋田縣のジャチャ系は雄勝・平鹿・仙北三郡では主にジャツチャ、ジャチャといふ形で行はれ、山本・北秋田・鹿角等北部の諸郡ではジャジャといふ形で行はれる。青森縣と岩手縣とでもジャジャといふ。

北奥方言に於けるこれらとオガ系ガガ系を比較すると、大抵の地方に於て階級による用語の差別となつてゐる。例へば青森縣の南部領ではアツパが下流、カガが中流、ジャジャが上流の用語であつたと云ひ(三戸郡斗川村)、ジャジャを用ひない津輕地方ではオガ系ガガ系が中流以上に用ひられ、オガチャ、オガサなども云ひ、アツパ、アバは下流階級に用ひられると云ふ。但しアバが普通であり、アツパは古い語、カチャが上流に用ひられると報告してゐる所もある(東津輕一本木村)。アツパ、カガが下流、アツチャが中流、カツチャは上流といふ報告もある(北津輕郡松島村)。チチ(母)といふ語のある南津輕郡藤崎町では、アツパは下流、チチが中流、オガ、オガサが上流に用ひられると答へてゐる。

階級別用語であることは秋田縣も同じで、平鹿郡ではアバが下流、ジャジャが中流以上と云ひ山形郡ではアバが中・下流、カガが上流、北秋田郡ではアバ、アツパが下流、ジャジャ、カガ、オガが中流、オガサン、オガチャが上流であるといふ報告もあり(下大野村)、アバ、アバ、カガ、オガが下流、カツチャ、オガチャが中流、オガサマ、カアサン、オカーサンのやうなものが上流に用ひ

られると云つてゐる所もある。これに由つて語の新古が分る。語は長く用ひられると敬意が無くなるから、新しい語がその代りに用ひられるやうになり、品位のある階級のはアバ、アッパを捨ててカガやオガやジャチャを用ひ、オガサ、オガサンを用ひるやうになり、繁華な地方ではつひにオカーサンなどの標準語に移つて行くものと思はれる。青森市ではアバが下流、カッチャが中流、カーサンが上流であると云ひ、秋田市ではオガハン、オガサン、オガ、アバは下流用語、オカーサン、カーサン、オカーサマが上流用語であると云ふ。

青森縣の方言は以上の外に津輕地方にチチといふ語を用ひることを特徴とする。この語は秋田縣では鹿角郡にも行はれる。

山形縣はガガ系オガ系を主なるものとし、ガガ系は庄内地方ではガガ、ガガチャ、最上郡ではガガと云ふ形で行はれ、村山地方ではカガ、カガサと云ふ形で行はれる。置賜地方には少い。オガ系は庄内地方にオガチャ、南村山郡にオガ、オガガがあるだけで、その他の村山三郡及び置賜地方でオッカとして廣くあらはれてゐる。この外村山地方の特徴たるものはアッカ、アヤといふ語のさかに用ひられることである。置賜地方では青森で父を意味するダダが母の意味で用ひられることを特徴とする。庄内地方はアバが現れることを特徴としたが、その他に左の如き種々の同意語が複雑に用ひられる。

ンマ

ンネ

ンナ

ナナ

ウマ

岩手縣はアバ系のアツパ、ジャジャ系のジャジャが南部領に廣く用ひられ、オガ系のオガヤオガサンは伊達領に行はれる。

宮城縣に行はれるものはオガ系とガカ系で、前者はオガチャン、オガサンで北部の諸郡ではオガツアンと云ふ。後者はガガ、ガツカが全縣にひろく用ひられる。

福島縣もオガ系とガガ系で、前者は會津地方五郡と双葉・相馬の海岸地方に行はれ、會津地方ではオガ、オガチャ、オガヤと云ひ、海岸地方ではオガガと云ふ。ガガ系は信夫・伊達・安達・安積諸郡ではガツカ、ガガ、ガツカチャン、東白川・西白河・石川・田村・石城の諸郡ではガツカ、双葉・相馬二郡ではガガ、ガツカと云ふ。

(二) 子 供

オボコとワラシ(ワラス)の二語がある。中央にもオボコは古く「十四になるおぼこちやおつしやる」(室町時代小歌集)、「手入らすの川舎生れのおぼこ」(近松五十年忌歌念佛)などあり、東京でも今なほ處女の意味には云ふが、東北地方ではひろく子供の意味に用ひてゐる。ワラシもこの地方特有の方言で、この二語について「物類稱呼」には

奥羽にて。わらしといひ又ぼこといふわらしは童男也(和名)童わらは又僞子わらは(中略)案に奥羽にて。ぼこといふ詞

は古代の遺語なるべし。東武にても。をほこと云。二度をほこと云詞有。是も小兒をほこといふ意也云々
とある。

福島縣ではオボコは伊達・信夫兩郡に相當に用ひられるだけで、一般にはワラシ、ワラシコを用ひる。宮城縣・岩手縣ではオボコとワラシ、ワラシコ（ワラスコ）を並び用ひ、中流家庭ではオボラス）を並んで用ひるが、庄内地方はオボコだけで、この地方にはその外にンバ、コロビク、コノベラ、バッチ、バッチダ、バッコ、バッコダ（主に東田川郡）のやうな特殊の語がある。秋田縣・青森縣ではオボコは嬰兒の意味に用ひて居り、一般にワラシ、ワラシコを用ひる。オバコと云ふのは女兒もしくは若い母の意味に用ひられる。又秋田縣・青森縣にはピツキといふ語がある。青森縣では全體にあるが、秋田縣では南秋田・北秋田・山本・鹿角等北部の諸郡に限られる。青森縣では嬰兒の意味に用ひる。又秋田縣の北部から青森縣・岩手縣の南部領を通じて、ワラシの系統はワラサド　ワラシヤド　ワラハド
等の形でも用ひられる。

(三) 産　婆

テンニヤクババ

テンガクババ

コナサセババ

コナサセガガ

テンニヤクババ、テンガクババは青森縣にのみ行はれ、前者は南部領後者は津輕領に屬するものである。いづれも典藥の漢語から來て居るものであらう。デンガクババはテガクババとも又單にテガクとも云ふ。コナサセババ、コナサセガガは岩手縣・宮城縣・山形縣の庄内地方以外の地方に行はれ、又略してコナサセとも云ふ。

(四) 乞 食

ホイト、ヤツコと云ふ。ホイトは「庭訓往來」に倍堂とあるもの。「松屋筆記」には「ホイトウは陪堂と書く也、禪家僧司の名にて飯米を司る僧を云ふ」とある。正しくは陪堂とかき、その唐音ホイタウから來たものである。乞食僧の意味から單なる乞食のことになつた。室町時代の「日葡辭書」に「ホイタウする」(乞食する)と云ふ動詞が出て居り、古くは京都でも乞食の意味に用ひてゐた。大里の「仙臺方言」には「ホイドウ、非人のこと、京にても用ゆ」と見えてゐる。アイヌ語にも東北方言からはひつた。

宮城縣・福島縣全體に行はれ、ホイドコジキと云ふ語もある。岩手縣にも行はれ、こゝにはシラボエドと云ふ語が下閉伊・下閉伊郡に在る。青森縣でも全體に用ひられるが、ここでは大食強慾客・畜漢の意味にも用ひるところが多い。秋田縣ではヤツコとホイトが並んで行はれ、南部の雄勝郡はホイドが多く、平鹿・仙北は同等、同じ南部でも由利郡はヤツコが主であり、北部の北秋田・南秋

田・秋田市も同様、河邊・山本二郡はヤッコのみ行はれる。たゞ鹿角郡は却つてホイドのみ用ひる。山形縣の庄内地方はヤッコが主、鶴岡市や酒田市の如きはホイドは用ひない。その反對で村山地方はもつぱらホイドでヤッコがなく、置賜地方は兩語殆ど同等の勢力を持つてゐる。

(五) 料理人

メンバンと云ふ語がある。仙臺を中心として擴つたに違ひなく、宮城縣は全部に行はれ、山形縣では南置賜を除く置賜地方・村山地方全體、福島縣では伊達・信夫・相馬・雙葉・石城諸郡までは濃厚に行はれるが、その以外は極めて稀薄で、岩手縣も全體に行はれるが紫波郡・九戸郡・二戸郡に至ると殆ど無い。秋田縣・青森縣では稀にあると云ふ報告を得てゐるが、それもメンバ、メーバなど云ふ形に訛つてゐる。

(六) 庭

ロジとツボ。純粹にロジのみを用ふるのは宮城縣と岩手縣の仙臺領の大部分、福島縣の福島市・雙葉・相馬の二郡で、山形縣・秋田縣・青森縣及び岩手縣の紫波・九戸・二戸諸郡は全くツボを用ひ、岩手縣のうち岩手・稗貫・上閉伊・下閉伊等は兩者混じて居り、この地方ではツボは多くツボマエと云ふ。福島縣のうち信夫・伊達・安達・安積諸郡はロジが主で、稀にツボを用ひ、前記諸郡以外ではロジもツボも稀に用ひられるだけである。

(七) 蝶

(1) チョーマ、チョマンコなどチョーマ系 (2) テビラ、テビラコなどテビラ系 (3) テガラ、テグラ、テグラコなどテグラ系 (4) テラコ、テコナなどテラコ系とカカベ系の五種がある。「物類稱呼」に「相模下野陸奥にてふまと云、津輕にてかゝべともてこなとも云、出羽秋田にてへらこと云」とある。南奥方言はチョーマ系を用ひ、その他の三種は北奥方言に屬する語である。

福島縣・宮城縣は廣くチョーマと云ひ、宮城縣の北部にはこの他にチョマコ、チョーマコ、チョーマンコ、チョマンコ、チョーマンコ、チョーマツコなど種々の語形がある。蝶や蛾を古くはヒールと云ひ(和名抄色葉字類抄など)、室町時代にはヒール若しくはヒルと云ひ(易林本節用集・日本一鑑など)又カハビラコ(新撰字鏡・アハビラコ(類聚名義抄)など云つたことを思ふと、新しい蝶と云ふ語との複合からチョーペラコと云ふ語が出来、bとmとの交代でチョーマコ、チョーマが出来たものであらうから、この系統はテペラコ系と語源的には關係がある。

岩手縣の伊達領がこの系統に屬し、チョーマン、チョマンコ、チョーマツコなどその他の語形を用ゐることが宮城縣の北部と共通してゐる。たゞ西磐井郡からチョーラと云ふ語形のあることの報告に接したのは、こゝにチョーマ系と併せて用ひられるテビラ系のある爲に生じた混淆形であらう。岩手縣ではチョーマ系の外にテビラ系、テグラ系、カカベ系がある。テビラ系はテビラ、テビラコ、

テビラッコ、テビランコなど種々あつて全體に用ひられ、従つて伊達領にもあるが、こゝからの報告には古語であると書いてあつた。チヨーマ系に壓倒されたのであらう。他の二系は南部領の方言で、カカベ系は岩手・紫波・上閉伊・下閉伊・九戸・二戸諸郡に行はれ、テグラ系（テガラコ、テングラ、テンガラコ、テングロなども云ふ）は九戸・二戸の二郡に用ひられる。

山形は庄内地方を除いてチヨーマ系で、ここではチヨーマ、チオンマと云ひ、まゝチヨッパ、チヨンパなども云ふ。庄内地方はもっぱらベツト、ベツトハン、ベツトサマを用ひる。最上郡は蝶の大なるものをチヨーマと云ひ、小なるものをベツトと云つてゐる。秋田縣の南部にはチヨーマ、チオンマ、チヨマコ、チヨパコ、チヨナコ、チヨビラコなどチヨーマ系も見えるが、山形縣庄内地方のベツトの影響によりベツチヨ、ベチヨ、ベチヨコ、ベツチヨコを主につかひ、ベツトそのものも由利郡には行はれてゐる。縣の北部、南秋田・北秋田・山本諸郡にはあまり勢力のある語でないが、テンカ、テカナ、テンカコ、テケナ、テケナコ、テケダコ、ケツトなど云ふ語がある。

青森縣はテラコ系とテグラ系のある所で、前者は津輕領、後者は南部領に行はれる。テラコ系と云ふのはテラコ、テコナコ、テケナコ、テランコの類で、こゝには稀であるがテビラコと云ふ所もある。テグラ系は三戸郡ではテグラ、テガラ、テグラコ、テグラッコなどいふ。テビラコも上北郡には行はれる。上北郡ではテガラコ、テングラと云ひ、外にトンバコ、タケロと云ふやうな語もあ

る。下北郡には特殊の方言がない

(八) 毛 蟲

ガイダカといふ方言がある。北奥方言に屬する語であり、「物類稱呼」に「奥の津輕にてがいだかと云」と見えてゐる。青森縣、雄勝郡・山利郡・秋田市を除く以外の秋田縣全體、東西磐井を除く以外の岩手縣全域に在る。

ガイダカ ゲアダガ ゲダカ ゲアンダカ ゲダガラ

のやうな形を持つてゐる。

秋田縣の雄勝郡・山利郡・秋田市では主にケラムシと云ふ語をつかふ。南秋田郡ではゲタカの外にケガ、ケガムシが用ひられ、山利郡でケラムシの外にシヨガラムシ、シヨガラシコが行はれる。宮城縣の栗原・本吉・牡鹿諸郡にケガラムシ、ケアガリ、ケガラバンバなど云ふ語があり、之につづく岩手縣の伊達領にこの系統の語が行はれる。

山形縣では標準語のケムシと同じ語が、ケムス、ケンムスと云ふ形で一般に行はれるだけであるが、庄内地方は特別で

ケバラ ケバラムシ オゴジ (オゴズ)

等の語がある。

福島縣には標準語の外には信夫・伊達・安達諸郡にケダラムシ、ケダラバツバ、ケダロムシ、ケダロなどがあり、石城郡・雙葉郡にヤシヤラがある。

(九) 蜻蛉

アケズとダンブリ。前者が南奥系、後者が北奥系である。青森縣はダンブリ、ダブリが主に用ひられる。岩手縣では北の下閉伊・九戸・二戸諸郡にこの系統のものがあり、ダンブリ、ダブリ、タシブリ、ダンブリコ、ダンブ、ダンブルコ、ダンブリキ、ダンビリなど云ふ。下閉伊郡では之と並んでザンブリを用ふることが多く、之をまたザンブ、ザブ、ジャンブ、ジャブとも云ふ。以上三郡以外の岩手縣ではアケズをもつばら用ひる。秋田縣では雄勝・平鹿二郡でアケズが優勢なほか全縣下ダンブリ、ダブリ、ダンブである。福島・宮城・山形三縣はアケズ系に屬し、福島ではアケズ、アゲズが主、宮城縣ではアケズ、アゲズ、アケ、アゲ、アーケその他種々の形が多く、山形縣ではアゲ、アツケが多く、アケズ、アケ之に次ぐ。山形縣の庄内地方、福島縣の會津地方では標準語同様トンボと云ふだけである。

(一〇) 飢 饑

ガシとケカズの二語がある。宮城・福島の二縣は共にガシ(ガス)のみを用ひ、青森・秋田二縣はケカズ、ケガズ(ケガシ)を用ひ、たゞ青森縣の三戸郡・上北郡にガシ系の語としてガシンが並んで

行はれてゐるだけである。岩手縣の伊達領も殆ど全くガシで、ケカズのあることを報告した町村は膽澤・江刺・西磐井・氣仙からただ一個づつであり、東磐井郡では三個町村あるが古語であると註してあるのを見れば、もと廣くケガズであつたものが伊達領になつてからガシに壓倒されてその領域となつたものと見える。上閉伊はガシが主でケカズが従、下閉伊はケガズが主でガシが従であり、その他の南部領はケカズである。山形縣でケカズを用ひるのは庄内三郡、北村山・最上で、あとはガス又はガシンである。

(11) 式

ダミと云ふ語がある。私田縣全圖、山形縣の最上・南置賜・東置賜及び同庄内三郡にもつばら用ひられるもので、青森縣の青森市・弘前市・東津輕・西津輕・南津輕・北津輕(下北・上北・三戸はソーシキ)には主に古老の語として用ひられる。山形縣のうち村山四郡(内南村山郡にはダミを用ひるもの七村)にはサラブ、ザランボン、ザランボ、ジャラボン等の語を用ひる。岩手縣には標準語のソーシキの外殆ど方言がない。ありとすれば岩手郡・紫波郡にあるガンコの如きものが擧げられるだけである。又ノベ、オノベ、ノベオクリの如き古語の残存が東磐井・稗貫・氣仙・膽澤等にあり、之が続いて仙臺市・柴田・伊具・牡鹿を除く諸郡に相當に残つてゐる。石巻市では此をノンベンと云ふ。宮城縣にはザランボン、ザランブ、ザランボ、ジャンボ、ジャンボンのやうな語が

少しづつあり、ダミも稀にはあるが葬式の馳走又は葬具のやうな意味に變つてゐる。福島縣ではザランボ、ザザンボ、ザランベその他類似の語が信夫・伊達・安積・東白川等の諸郡に廣く、岩瀬・東白川・石川・田村諸郡に多少見出されるだけで、南會津・北會津・耶麻・河沼・大沼等には全く特別の方言はない。

(CII) 墓

ランバ、ラント等ランバ系とハカド、ハガシヨの如きハガド系がある。ランバ、ラントは卵塔婆から來たもので、この語をそのまゝ傳へてゐる地方もある。福島縣にはランバ、ラントが用ひられるが、會津地方には耶麻郡を除いてこの語がない。石城郡・雙葉郡にはラントバがある。宮城縣はランバをもつばら用ひ、玉造郡・栗原郡・登米郡にはラントバがある。岩手縣に於てランバ系の行はれるのは町村數は少いが、東磐井・西磐井・氣仙・稗貫・上閉伊等の諸郡である。山形縣でランバ系の行はれるのは村山地方と置賜地方で、置賜地方ではランバをダンバと云ふことが多い。なほ村山地方では多くはこの語は火葬場を意味する。

岩手縣一般にはハカドコ、ハカドが行はれ、秋田縣にはハカドが廣く行はれるが、ハカドコも多少行はれ、南秋田郡・山本郡等ではむしろハガシヨといふ方が多い。山本郡にヤントラといふ語のあるのはラントバに關係あるものかも知らない。山形縣でハカドの行はれるのは庄内三郡及び隣接

の最上郡だけである。

青森縣では一般にハガシヨで、三戸郡・上北郡・南津輕郡などではハカドコ、ハガドが並んで用ひられてゐる。津輕地方でも焼場の意味でランバを用ひる所はある。

(一三) 體

カバネと云ふ語がある。東北地方一帯に廣く用ひられる方言であるが、青森縣には全く用ひられない、秋田縣でも河邊・山本・鹿角・南秋田・秋田市等では全く用ひないか又は稀に用ひ、秋田縣の南部のこの語を用ひる所でも身體といふ意味より體格といふ意味に轉用してゐる。山形縣の庄内地方にも比較的稀薄である。

(一四) 血 統

マケ(マゲ) マギ(マギ)の二種があり、前者は福島縣・宮城縣及び岩手縣の舊仙臺領のうち四郡(氣仙郡はマギ)に行はれ、後者は青森縣・秋田縣・山形縣及び岩手縣の舊南部領で用ひられる。

(一五) 眉 毛

コノゲ。東北全體の方言。宮城・山形・岩手・秋田の四縣は皆コノゲと云ふが、青森縣ではカオノゲと云ひ、福島縣ではコーノゲと云ふ。

(一六) 唾

(1) シタギ(スダギ)

(2) タンペ

(3) ヨダレ

(4) ペロ

の四種があるが、シタギは南奥に勢力があり、タンペは北奥に勢力がある。ヨダレ、ペロは全く北奥方言に属する語である。

福島県ではシタギ(スタギ)を用ひ、タンペは宮城県の直接接壤地帯である信夫・伊達・安達の三郡に少しばかりあるだけである。宮城縣はシタギ、タンペ並び行はれ、岩手縣では伊達領は宮城縣と同様であるが、その北、南部領では殆ど全くタンペ(タンパ)のみを用ひる。山形縣では村山地方はシタギだけであり、最上郡でも同様であるが、たゞ二村だけタンペを用ひると云ふ報告があつた。

南置賜郡はタンペ(タツペ、タン)が主だが、東置賜・西置賜二郡は宮城縣同様にシタギ、タンペを並び用ひて居り、主な形はタツペである。庄内地方はシタギを用ひず、タンペと共に他の地方に見えないツバゲ、ツラギのやうなものをを用ひる。秋田縣では①②③④の四種があり、雄勝郡・平鹿郡ではシタギをペロやタンペと同様に用ひ、ヨダレは少い。仙北郡はヨダレ、ペロ、タンペを用ひ、山形縣ではペロ、タンペを主としてシタギを多少用ひる。その他の北部の諸郡ではタンペが主で、ヨダレ、ペロを併せ用ひる。青森縣ではヨダレが主でペロを併せ用ひるが、三戸郡だけはペロのみを用ひる。

ヒダリコギ、ヒダリバチ、ヒダリツコ、ヒダリチョツケ等がある。ヒダリコギは東北地方全體に通ずるが、ヒダリバチ、ヒダリツコは北奥、ヒダリチョツケは南奥に行はれる語である。ヒダリコギは岩手縣と山形縣とではヒダリコゲとも云ふ。

青森縣の津輕地方にはヒダリコギを用ふことが稀で、ヒダリバチを主に用ひる。南部地方はヒダリコギのみを用ひ、ヒダリバチは無い。秋田縣ではヒダリツコを主に用ひ、ヒダリコギの多く用ひられるのは雄勝郡と平鹿郡とで、その他には極めて稀である。岩手縣ではヒダリコギが主で、ヒダリコゲとも云ひ、この伊達領にヒダリチョツケがある。宮城縣もヒダリコギを用ふことが多くこの縣の北端諸郡に於てヒダリチョツケをつかふ。之を略して單にチョツケとも云ひ、又ヒダリチョツケとも云ふ。山形縣でヒダリチョツケを用ふのが庄内地方であることは興味がある。この縣のその他の地方はみなヒダリコギ、ヒダリコゲである。福島縣はヒダリコギのみを用ひる。

(二八) 嬰兒籠

エジコ。赤兒を入れて置く襦袢の籠で、エジコ、エチコ、エツコ、エズコ、エンツコ、エンチコなど云ふ。秋田縣及び山形縣の庄内地方ではエジメと云ふ語の方が多く用ひられる。大里の「仙臺方言」にはイチゴとして「愚按するに、江戸にて用ゆるをばち入れのこと、百姓家にて、赤兒を其内に入れてそだてることなり」とある。東北全體に行はれる語。

(一九) 惡　　口

ザンゾと云ふ方言がある。福島・宮城・岩手の全縣、山形縣では庄内を除いたすべての地方に行はれる語。秋田縣でも雄勝郡・平鹿郡には相當に行はれるが、こゝでは崩れてザンゾ、ザゾ、ザンゾホリなど云、語が生じ、青森縣のうち稀にこの語を持つてゐる上北郡・下北郡・戸三郡等ではジャンジヨ、ジャジヨ、ジャジヨ、ザンゾモツコなど云ふ形になつてゐる。

(二〇) 轉　　寢

キドコロネと云ふ方言がある。東北全體に分布してゐる語で、福島縣・山形縣でキドコロネ、キドゴロネ、宮城縣ではキドコロネ、キドゴロネ、キドコネ(キドゴネ)。秋田縣はキドコロネ、キドゴロネで、キドコネ(キドゴネ)は南秋田郡・山本郡・北秋田郡に在る。岩手縣ではキドコロネ、キドコネ。青森縣ではキドコネ(キドゴネ)、キドグネなど云ふ。

「舊觀帖」にも「イヤおらアふろのかわりにきどころ寢でもしていますべいかいどころねのことなり」とある。

(二一) 居　　睡

ネムカケ、ネムカゲ、ネブカケ、ネブカケ、ネブカキ、その他類似の語形があり、東北一般に行はれるが、福島縣では信夫・伊達・安達の一區劃、ついでは雙葉・相馬地方に少し行はれる外、その他の諸郡には用ひられない。同じ系統の語と思はれるが、青森縣では之と殆ど同等に多く用ひら

れるものにネブリカケ(ネブリカゲ)があり、これが秋田縣を間に隔てて庄内地方に通じ、こゝではネブリカケ、ネムリカケの方がネムカケよりも寧ろ多く用ひられる。

(三三) 暇つぶし

ヒマダレと云ふ。東北全體に行はれるが、山形縣では庄内地方にはあまり用ひられない。

(三四) 噫

阿克シヨ、阿克シヨ、阿克シヨ、阿克セン、阿克シエンなど云ふ「舊觀帖」中卷に「今夢にあくしよのうしたくおもつたアが」と出てくる。福島縣と山形縣とは阿克シヨ、阿克シヨ。宮城縣と岩手縣とは阿克シヨと阿克シエンとが主である。岩手縣では南部領に入ると阿克セン、阿克シエンの方が多い。秋田縣は雄勝郡・平鹿郡・仙北郡は阿克セン、阿克シエンが行はれるが、その他の諸郡はクシヤミ、クシヤビ、クサミ、クサビ等の語を用ひる。山形縣の庄内地方はこの系統に屬し、クシヤミ、クシヤビをもつばら用ひる。青森縣もクシヤミ、クシヤビ、クサミ、クサビを用ひるが、南部領に於ては之を用ふることが少く、むしろ岩手縣の南部領と共通に阿克センや阿克シエンを用ひる方が多い。

(三五) 軒

ハナオト、ハナグラ、ハナビキと云ふ語がある。東北地方ではイビキと云ふ語は山形縣・福島縣

に用ひられる外、その他ではあまり用ひられないもので、ハナイビキといふ語が行はれてゐる。イビキは枕草子「憎きもの」の條に「さるまじうあながちなる所に隠しふせたる人のいびきしたる」とあり、又「新撰字鏡」に「斯久豆知又伊比支」とあるやうに古へから中央に行はれたものだが、それがこの地方に傳つてハナイビキと云ふやうな語を作り出したのでなく、この地方に今日ももつとも廣く行はれてゐるハナオトが古くからあつて、そこへイビキが傳つた結果、混淆形としてハナイビキが出来、ハナビキも出来て來たものであらう。ハナグラは福島縣から宮城縣南部にあり、福島縣河沼郡・宮城縣宮城郡等にハナカグラと云ふ語があるから、まづ發源的な語として發生し、それが崩れてハナグラにもなつたのであらう。これは栃木縣・茨城縣にも及んでゐる。ハナオトは最も廣く岩手縣・秋田縣・青森縣全體と宮城縣の登米郡・栗原郡・牡鹿郡等に互つて行はれる。ハナイビキ、ハナビキは宮城縣と岩手縣の仙臺領に多く行はれるもので、岩手縣のその以外の地方と秋田縣にもあるがその分布は多くない。ハナゴトは岩手縣の九戸郡・二戸郡・下閉伊郡と青森縣の津輕領とに行はれる。山形縣にはこの種東北特有の方言はなく、純粹に標準語と同じイビキを用ふことを特徴としてゐる。

要するにハナオトは福島縣・山形縣を除いた東北地方全體に分布するもので、ハナグラ、ハナイビキは南奥方言のもの、ハナゴトは北奥方言のものと云ひ得る。

(二五) 垢

コビと云ふ語がある。「類聚名義抄」に鱗をイロコともコビとも云つてあり、鱗の意味から垢に用ひるやうになつたもので、古語である。この語はもつぱら北奥方言に属する語で、たゞ一つ福島縣で田村郡・石川郡・東白川郡で頭垢をコッペと云ふのが之に關係ありと思はれるだけである。山形縣の庄内地方から秋田縣・青森縣に通じ、それから岩手縣に分布してゐる。この縣の伊達領である江刺・西磐井等からは一二町村この語のあることを報じたばかりである。山形縣の庄内以外にも無いではないが、これも各郡一二町村づつその報告を得たばかりである。

(二六) 熱 灰

ホド。東北地方全體に通ずる方言である。

(二七) 火 の 粉

ヒボエと云ふ語がある。福島・宮城全縣、鶴岡市・酒田市・西田川郡を除いた山形縣全體に行はれる方言で、秋田縣では由利郡に在り、雄勝郡・平鹿郡・仙北郡にも多少用ひられる。これらの諸郡にもその他でも秋田縣ではヒボコリと云ふ語が行はれる。ヒボコリは山形縣の庄内方面にも及んでゐる。

(二八) 火 傷

ヤゲ、ヤケパタ、ヤケボツボと云ふ語がある。青森・秋田・岩手・宮城の四縣と山形縣の庄内地方がヤゲを用ひ、青森縣と岩手縣の南部領、山形縣の庄内を除いた地方と福島縣にヤケパタがある。ヤケパタは山形縣の村山地方ではヤケパツとも云ふ。宮城縣・岩手縣の伊達領にヤケボツボがある。岩手縣の南部領のヤケパタは下閉伊・上閉伊等ではヤツパタとなつた形を多く用ひ、福島縣の相馬・雙葉等にはカンパチと云ふ語が多く、石城郡にはカンパと云ふのも多い。

(二九) 出る

デキルとデハルがある。デキルは「舊觀帖」に「兄兒きんアは一度出來たこともおざるとよ」と云つて、それに註を附けて「出た事を出來た、出來たことを出た、くたびれた事をこわいなどいふはみな國ことばなり」と書いてゐるほど特徴のある東北方言と古くから考へてゐた語である。しかも出來ることをデルと云ふから、東京語などとまるで反對になるので「月かできたか園子がでたか」などいふ言葉もできてゐる。然し室町時代の桃源の「勅規桃源抄」に「佛ノ處へ文珠ノテキラレタソ」(卷一)「阿難ノソホくトシテ面目ナウテキラレタソ」(同)とあるやうに、嘗ては中央でも同じくつかつた語であつたのだ。デハル、今の出張の語源を成すもので、出張は畢竟それに漢字を當て、音讀したものに過ぎない。「互相記」に「越國景虎、已出張于關東之風説多聞之間」などあるのがそれである。

分布を見ると青森縣・秋田縣・山形縣はもつぱらデハルを用ひ、岩手縣ではデハルと共にデキルを用ひるが、その勢力は云ふに足らない。宮城縣ではデハル、デキル並び用ひられ、北部ではデハルが優勢であるが、南部では五角である。福島縣ではデハルが福島市・信夫郡・伊達郡に用ひられるが、デキルは殆ど全くこの縣にはない。

(三〇) 目が覺める

オドログ、オドガル。この語は全く北奥方言に屬するものであるが、自分が北奥方言に入れる山形の庄内方言にはない。

岩手縣の南部領ではすべてオドログであり、伊達領のうちでも氣仙郡にはこの語が多少見えてゐる。青森縣は一般にオドガルである。然し上北・下北・三戸にはこの語が無いではないが、むしろ主として岩手縣と同じオドログの方を用ひる。秋田縣でオドガルの最も多くあるのは北秋田郡で、仙北郡・山本郡・鹿角郡がそれに次ぎ、由利郡・平鹿郡等にも多少あると云ふ報告がある。

(三一) 死ぬ

メオドス。東北地方全體にある。

(三二) 坐る

ネマル。福島縣以外東北地方全體に用ひられる。

(三三) 始める、始める

ハダツと云ふ語がある。主に南奥方言に属する語である。福島縣・宮城縣・岩手縣と庄内を除く山形縣全部に行はれる。大里の方言集には「端立の字なり。すべて事をはじめること。仕事ニハダツ、雨ガフリハダツなど用ゆ」とある。

(三四) 弱る、困る

ガオルと言ふ。東北全體に行はれるが、青森縣では北津輕郡・西津輕郡に多く行はれるほか、その他では各郡に一二町村之を用ふる所があると云ふだけの分布である。

(三五) 吃る

ゴッコフカゲル、ママナク、モンズクルの三種があり、第一のものは北奥方言の系統、第二、第三は南奥方言の系統に属する語である。

ゴッコは名詞で、それに種々の動詞がついて吃ることを云ひ、青森縣ではゴッコフカケル、ゴッコツカル、ゴッコツク、ゴッコツマル、ゴッコツバル、ゴッコツマル、ゴッコツマクルなど雑多な語となつてゐるが、ゴッコフカゲルがもつとも多く使はれる。従つて津輕地方では單にフカゲルだけで吃ることを云ふ方が普通である。秋田縣ではゴッコ系は全體に行はれるが、南部の雄勝・平鹿・仙北・山利四郡にはママ系のママナクが並び行はれ、殊に仙北・山利ではママ系が優勢でゴッコ系は極め

て微々たるものである。この縣のゴッコ系は主にコ、メク(ココメク)でココメル、ココツカル、コツカウは北部に於てココメクと共に用ひられる。フカゲルの行はれるのは南秋田・山本二郡である。雄勝郡・平鹿郡・仙北郡には第三の種類に屬するモンズクルが稀にあらはれる。

岩手縣ではゴッコが廣く行はれ、ゴッコヒカゲル、ゴッコツカル、ゴッコヒグなど雑多な動詞となる。その他ドマズク、マゴツクのやうな語も廣く行はれる。ママ系のママナク、ママズクは和賀・膽澤・江刺・東磐井・稗貫・氣仙諸郡に於て勢力がある。モンズクルも稀にある。山形縣は一般にママナグでモジクル、モズクル、モンズクルが置賜地方ではママナクより優勢である。宮城縣はママズクが一般でママナクを多少用ひる。刈田郡と伊具郡にだけゴッコ系のゴッコツグが少しある。福島縣は會津地方にモンズクル、モズクル等モンズクル系があり、又その變つたオズグル、オジクル、オンズクル、オンジクルなどが行はれるのみで、その他の地方では以上すべての者と全く關係のないドマズクが用ひられる。

(三六) 持つ(持上げる)

タナグ、タガクと云ふ。前者は北奥系、後者は南奥系である。青森縣はタナグのみ。秋田縣もタナグであるが、雄勝・平鹿・仙北・山利・河邊・南秋田にはタガクも用ひられる。岩手縣もタナグであるが、伊達領はタガクと云ふ。タナグとも云ふのは膽澤郡・東磐井郡等である。山形縣の庄内

はタナグが多いがタガクとも云ふ。山形縣の其の他の地方及び福島縣はもつばらタガクと云ふ。タガクは又タンガクとも云ふ。

(三七) 下りる

オチル(オツル)。これは東北方言として人の興がる語であるが、もつばら南奥方言語彙で、青森縣・秋田縣にも山形縣の庄内地方でもこの意味では用ひない。

(三八) 難儀する

ウザニハグ、ウザネハクと云ふ語がある。これも仙臺を中心とする方言のやうである。宮城縣ではウザニハク(ウザニハグ)が主で、ウンザニハク、ンザニハクなど云ひ、岩手縣では伊達領で極めて普通の語であるが、その以外では上閉伊・下閉伊・稗貫等に少し行はれるだけである。岩手縣ではウザネハグと云ひ、伊達領でない諸郡ではオザネハグともなつてゐる。宮城縣の牡鹿・桃生の如きところではウザネトルとも云ふ。秋田縣でも鹿角郡・北秋田郡等にこのウザネハグ(ウジャネハグ)があり、こゝではウジャリヤル、ウジャミル、ウンジャミルなどの形にもなつて居り、青森縣に入るとウジャネコグ、ウジャネスル、ウジャネダの如き形の語もある。然しウジャネトルがもつとも多く、秋田縣に比較すると青森縣に於てむしろ多くこの語は行はれる。

仙臺の「濱荻」を見ると、その時代にはウザネと云ふ名詞が生きて居り、結喉とある。さうする

とウザネハクは結喉を吐くと云ふことで、「骨を折る」式の比喩的な表現から見たと考へられる。
ウザネトルも同趣の表現である。

(三九) 怒 る

ゴセヤグ(ゴセヤク)、ゴシヤグ(ゴシヤク)、ゴッシヤク等の語がある。「舊觀帖」に「ごせのやけた、ごてへさうな呼やうだ」「無禮なことのお多かるべいからごせのうやかずに附合つてくんないもし」など見える。福島縣ではゴセヤクと云ふ。宮城縣ではゴッシヤクが一般で、ゴシヤクも用ひるが、本吉郡のやうな僻地ではゴセヤグの方が多い。山形縣ではゴシヤクが普通であるが、ゴセヤクは置賜地方に相當に用ひられる。岩手縣ではゴシヤク、ゴセヤク同等の勢力があるが、氣仙郡の如きはゴシヤクは全く用ひられず、ゴセヤグであり、上閉伊・下閉伊・九戸・三戸の諸郡もゴセヤグを用ふことが多い。秋田縣ではゴシヤクが一般に用ひられるが、平鹿郡・由利郡・北秋田郡・鹿角郡などではゴセヤクを用ひる。青森縣ではゴセヤグが上北郡・下北郡で用ひられるが、この語は「おせつかい」など云ふ意味になつてゐる。津輕地方では「怒る」意味の語としてキモヤグ、キマグなど云ふものがある。これが秋田縣の山本郡・北秋田郡等にあり、岩手縣では九戸郡・二戸郡にあり、こゝではキモヲヤグと云ふ。この他小地域に行はれる語としては山形縣の庄内地方にゴゲルと云ふのがあり、秋田縣では雄勝郡・由利郡等でゴゲルと云ふ。青森縣の三戸郡にはエヘル、

エセルと云ふ語がある。ゴセツパラヤケルと云ふ語が宮城縣・山形縣に少々あるが、これはゴセヤクを基として出来た語であらう。

ゴセヤグについて眞山青果氏の「仙臺方言考」に常磐大定氏の説として「父がしばしば後世を焼くといふのが縮つたのであると言はれた。成る程瞋恚の煩悩が一たび起れば自分の後世をすべて焼き亡ぼして仕舞ふのに相違ない」と云ふのが引いてあり、眞山氏自身はそれを信じがたいと云つて居られるが、岩手縣下閉伊郡宮古町や同郡岩泉町等にはゴセヤク(ゴセヤグ)と云ふ語がまだそのまゝ行はれてゐることから考へると、常磐氏の説は案外當つてゐるかも知れない。

(四十) 凍る

シミル(スミル)と云ふ。東北全體に行はれる方言である。

(四一) 惜しい

イタマシー、イタワシーと云ふ語がある。青森縣はイタワシーが主で、イタワシ、イダワシー、イタシなどと云ひ、之と重つてイタマシが少々あり、イタワシは秋田縣でも北部の山本・北秋田・南秋田・鹿角の諸郡に及んでゐる。青森縣を除く五縣はすべてイタマシーに屬し、イダマシー、イタマシー、イダマシ、イタマシなどの形がある。

(四二) 穢ない

ウダテ。古語の「うたて」である。「悲惨な」「恐しい」「きたない」「いやな」等、意味は少しづつ變るが、青森・秋田二縣全體に廣く用ひられ、岩手縣の九戸・二戸兩郡・山形縣の置賜地方や福島縣の相馬郡・雙葉郡にも残つて居り、それが崩れてグツテ、ダテ、ダテーのやうな形になつたものは山形縣の村山地方、岩手縣の江刺・東磐井・西磐井・氣仙・上閉伊諸郡、宮城縣の栗原・本吉・刈田等諸郡にも極めて稀ではあるが残つてゐる。

(四三) 臆病、不器用

ブクナシと云ふ語がある。青森縣・秋田縣・岩手縣では臆病の意味につかふ。山形縣では不器用、岩手縣の伊達領では無力、意氣地なしの意味につかふ。その他には殆ど無い。

(四四) 醜い

ミダクナエ、メグサエ。二語共に東北全體に通ずるが、青森・秋田から山形縣の庄内地方にかけてはメグサエの方勢力が少く、福島縣にはこの外にメンコクナエを用ひる。

(四五) 弱い

カイナイ。東北地方全部に行はれるが、福島縣と山形縣の庄内地方では勢力がない。

(四六) 淋しい

トゼン。徒然と云ふ漢語から來てゐるが、退屈と云ふ意味よりも「淋しい」意味につかふ。宮城

・岩手縣全體にあり、岩手縣にはトゼンコと云ふ形がある。秋田縣にも全體に行はれるが、ここではトゼナイ、トゼネアと云ふ形容詞化したものを用ふことが多い。山形縣では最上郡・置賜地方・庄内地方にあり、庄内地方ではトゼタエ、トゼテ、トジエテともなる。福島縣では信夫・伊達地方と相馬・雙葉・石城諸郡に多く、他には諸處に散在する程度である。トゼナイと云ふ語は九州方言と通することに於いて興味がある。福岡縣にトゼナイ、宮崎縣・鹿児島縣・大分縣にトゼネがあり、トゼンナカと云ふのは佐賀縣・長崎縣・熊本縣・鹿児島縣等に行はれる。

(四七) 癒れた

コワイ(コワエ)。東北全體に通ずる。

(四八) 丁寧、儉約

マテ(マデ)。山形縣を除く五縣すべてに通じ、岩手縣の九戸・二戸・下閉伊と之に接する青森縣の三戸郡にマテ、コ(マデコ)がある。山形縣では村山・置賜地方にマテが少し使はれると云ふ程度で一般にネツズエ、ネツズ、ネズイ、ネツジ、ネズと云ふやうな語がつかはれる。マテは「全い」から來たものであらう。「浮世風呂」に「正直で律義でまづ。とな人が能うございます」とある「全う」が之に通ずる。

(四九) 聡しい

オショシ、ショシ。東北地方全體に通ずる方言であるが、青森縣でも津輕は之を用ひずメグサイと云ふ。

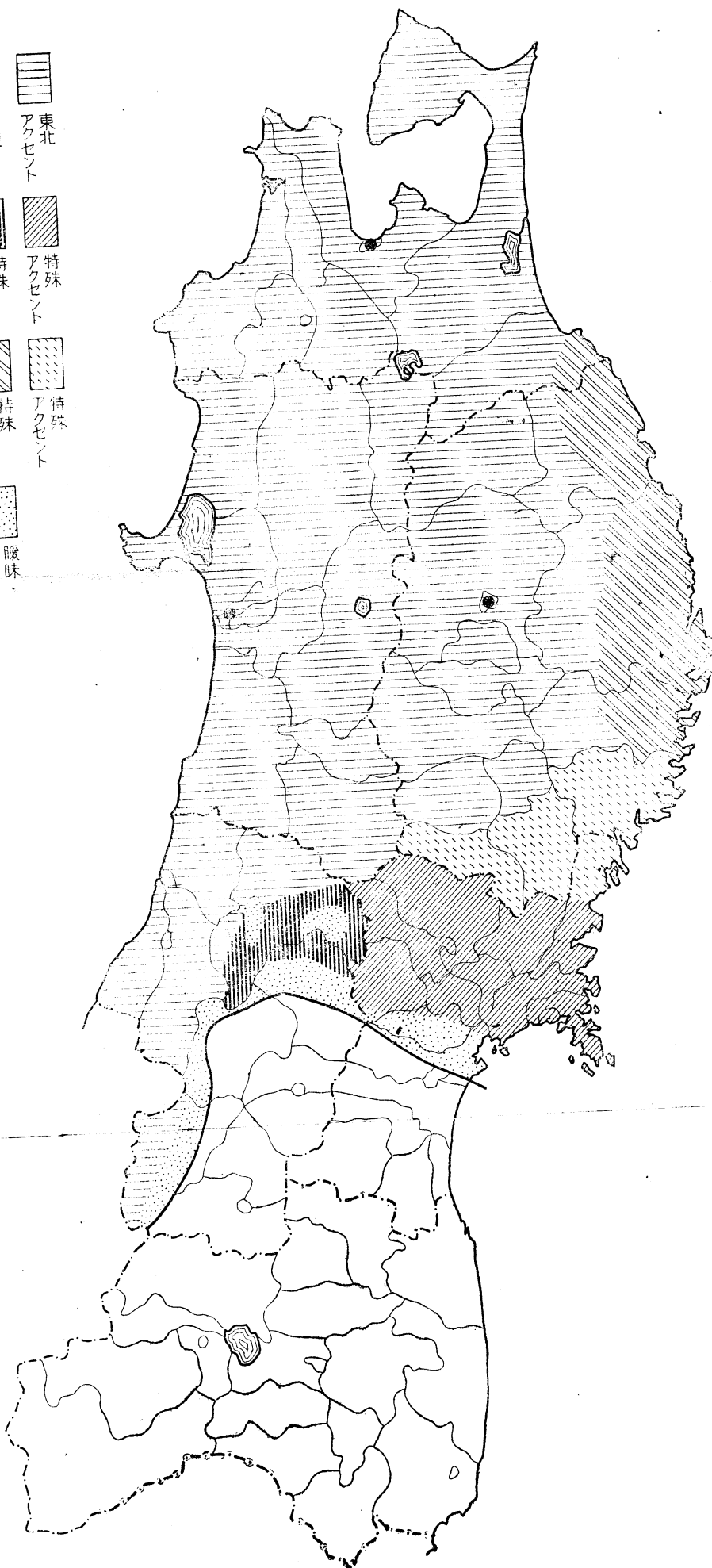
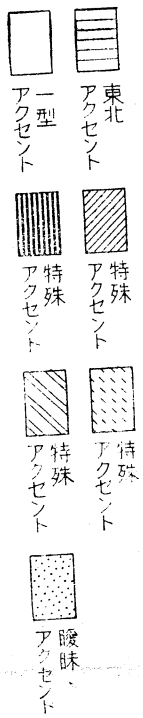
(五〇) かはゆい

メゴイ(メゴエ)、メンコイ(メンコエ)。これは東北全體に廣く用ひる。それが各地に於てメゲ、メンゲともなる。メゴエと變つたものは宮城縣・岩手縣全體と福島縣の伊達・信夫兩郡、山形縣の村山・置賜地方に分布してゐる。この外カナシと云ふ古語が青森縣と秋田縣の北秋田・南秋田・山本諸郡に在る。

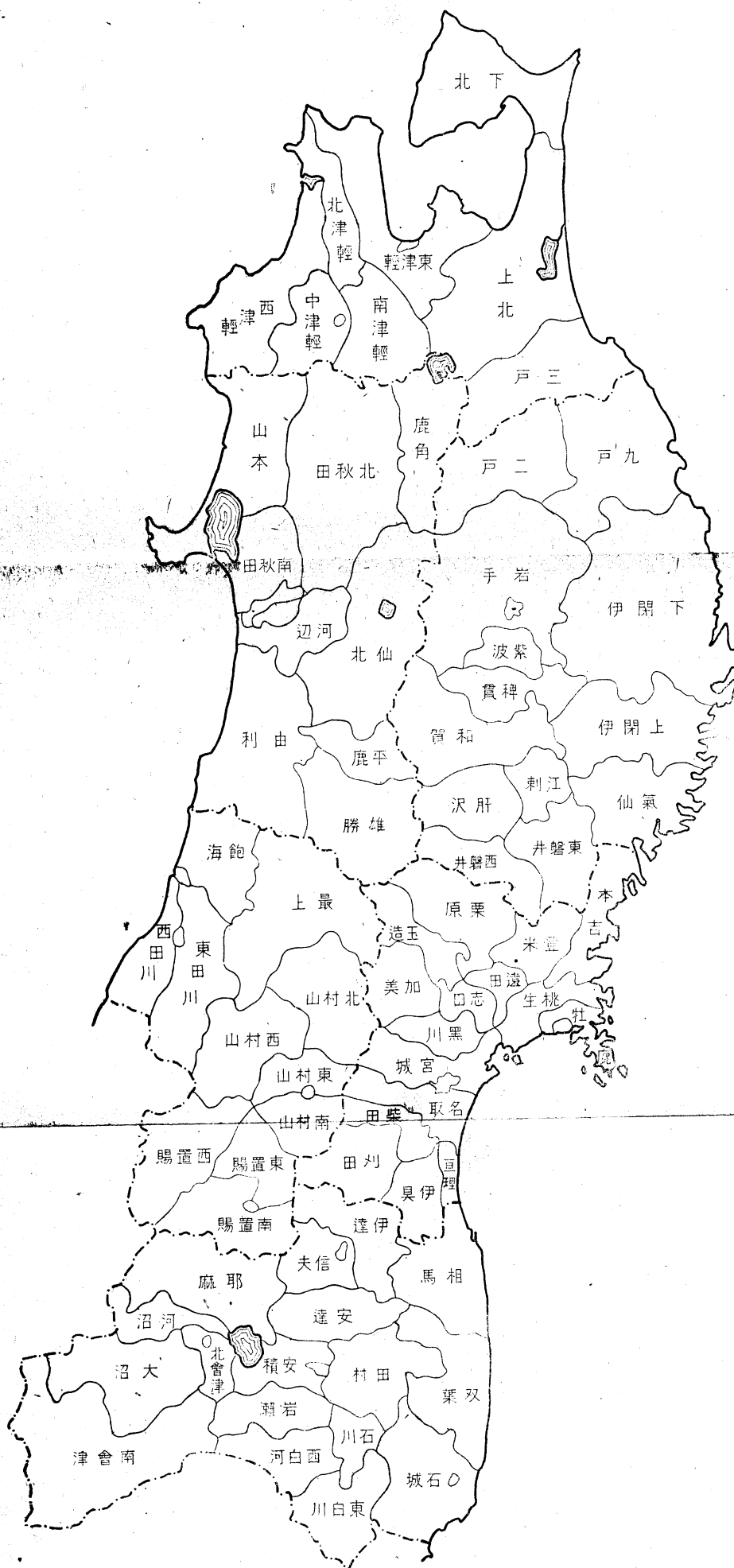
紙數に限があつて擧げたものは少いが、是だけでも北奥方言と南奥方言とを兩分すべく、山形縣の方言のうち庄内方言は、同じ縣内の他の地方の方言と切離して北奥方言に屬せしむべきものであり、同時に岩手縣の仙臺領の方言は同じ岩手縣の方言でも之を南部領の方言と分つて南奥方言のうちに列せしむべきことが觀取される。又青森縣の方言は東北方言のうちでも特に違つた色彩を持つて居ることは確かであるが、福島縣の方言にも他の特色、云ひ換へれば東北方言一般の特徵とするものを多く缺いてゐることに於て青森縣の方言に劣らぬ特徴を持つてゐるが、自分はまだこれら兩縣の爲に東北方言に一個特別の方言區劃を限るに躊躇する。

〔完〕

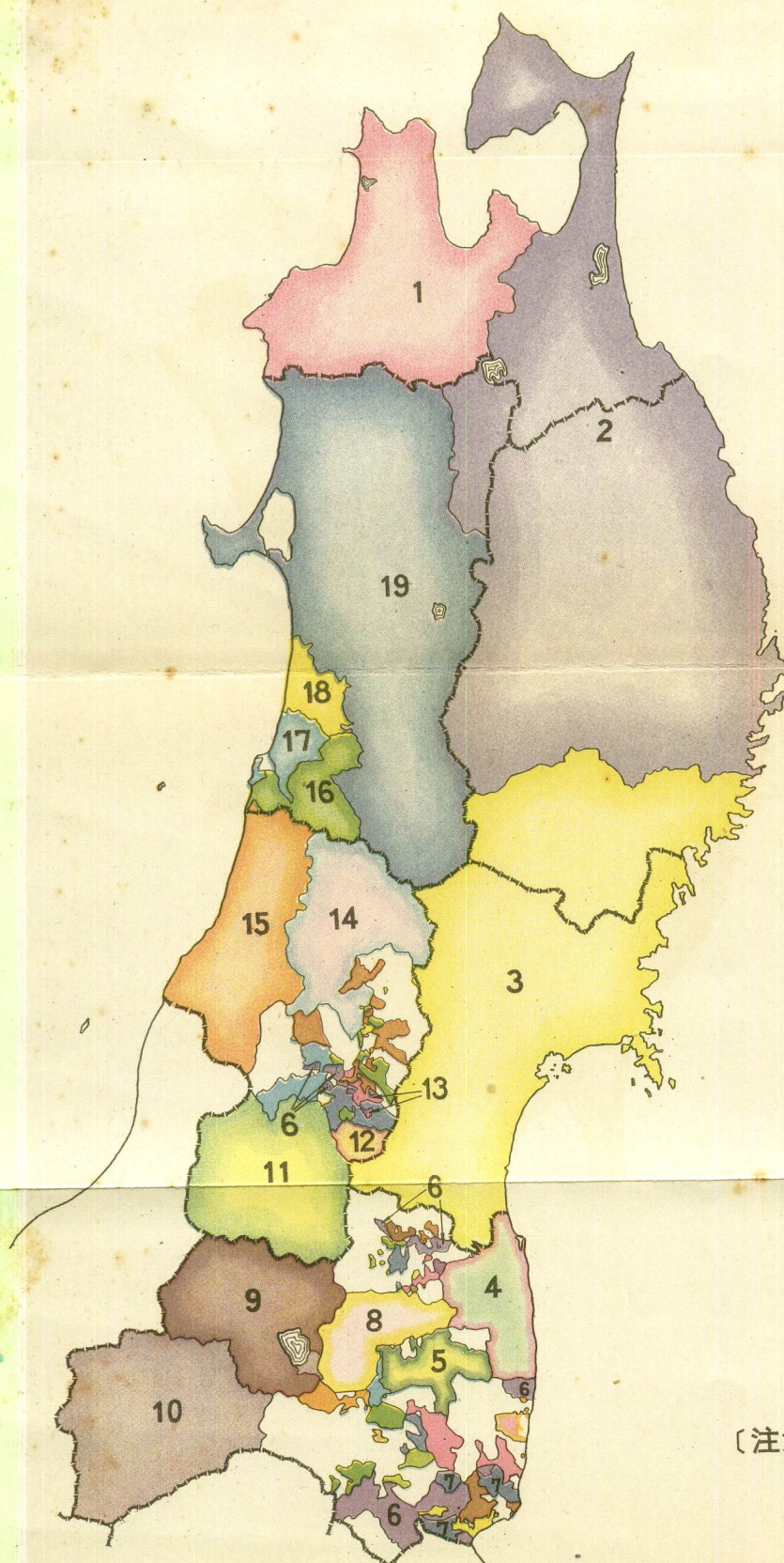
第三圖 東北地方アクセント分布圖



第一圖 東北地方郡別行政區劃圖



第二圖 東北地方幕末大名領地畧圖



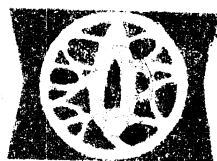
- 1 弘前藩 津輕氏
- 2 盛岡藩 南部氏
- 3 仙臺藩 伊達氏
- 4 中村藩 相馬氏
- 5 三春藩 秋田氏
- 6 棚倉藩 阿部氏
- 7 平藩 安藤氏
- 8 二本松藩 丹羽氏
- 9 會津藩 松平氏
- 10 會津藩 預幕府領
- 11 米澤藩 上杉氏
- 12 上山藩 藤井氏
- 13 山形藩 水野氏
- 14 新庄藩 戸澤氏
- 15 鶴岡藩 酒井氏
- 16 矢島藩 生駒氏
- 17 本莊藩 六郷氏
- 18 龜田藩 岩城氏
- 19 久保田(秋田)藩 佐竹氏

〔注意〕小藩並二他領飛地ノ
名ハ省略、無着色ハ幕府
領社寺領

昭和十九年三月十日初版印刷
 昭和十九年三月十五日初版發行

(三三〇〇)

(出版會承認號)
 (い32646號)



東北の方言

（巻）定價一圓五十錢 特別行爲税 相當額	八錢 賣價一圓五十八錢
---	---

著者

仙臺市米ヶ袋中 坂通三〇
 小林好太郎

發行者

東京都神田區神保町一ノ一
 株式會社 三省堂
 代表者 龜井 豐治

印刷者

東京都神田區三崎町二ノ一六
 東京印刷製本株式會社
 代表者 荻野 貴久
 東京四七

發行所

東京都神田區神保町一ノ一
 株式會社 三省堂
 日本出版會會員番號一一一五〇一

配給元

東京都神田區淡路二ノ九
 日本出版配給株式會社

(東北の方)

昭和十九年三月十日 初版印刷
 昭和十九年三月十五日 初版發行
 (三, 000)

(出版會承認)
 (い 320646 號)



東北の方言

特別行爲税 相當額	宝價一圓五十錢 八錢	寶價一圓五十八錢
-------------------------------	--------------------------------	-----------------

著者

仙臺市米ヶ袋中 坂通三〇
 小林好日

發行者

東京都神田區神保町一ノ一
 株式會社 三省堂
 代表者 龜井豐治

印刷者

東京都神田區三崎町二ノ一六
 東京印刷製本株式會社
 代表者 渋谷貴石
 東京四七

發行所

東京都神田區神保町一ノ一
 株式會社 三省堂
 日本出版會會員番號二二五〇一

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九
 日本出版配給株式會社
 (東北の方角)

國語叢書刊行豫定

各B6判・頁〇〇二・定價一八〇

國語の特質	池上禮造
國語研究法	時枝誠記
國語歷史概説	井上誠之助
現代國語の諸問題	石黒修
言語學概説	小林智賀平
國語の音韻	有坂秀世
日本語のリズム	相良守次
日本語のアクセント	金田一春彦
國語法構造原理	小林英夫
國語法品詞論	杉山榮一
國語法文章論	三尾砂
國語法	史今泉忠義
敬語	法江湖山恒明
現代口語の文法	佐久間鼎
解釋文法の體系	木枝増一
日本語小文法	宮田幸一
(ローマ字文法の試み)	
國語と漢語	龜井孝
外來語概説	荒川惣兵衛
翻譯語の考察	吉武好孝
新語の考察	加茂正一
俗語の考察	淺野信
民俗語	桑倉田一郎

國語叢書刊行定

各6B判・二〇〇頁・定價一・八〇

日本辭書史	鈴木一男	江戸時代の國語	吉田澄夫
國語意義論	横山辰次	方言學の可能性	柳田國男
片假名平假名概説	春日政治	國語方言研究法	東條操
國語表記法の問題	柴田武	東京語	中村通夫
萬葉假名の研究	松田好夫	大阪方言の語法	島田勇雄
國語史概説	安藤正次	東北の方言	小林好日
原史時代の國語	金田一京助	關東の方言	上野勇
奈良時代の國語	佐伯梅友	近畿の方言	境田四郎
平安時代の國語	遠藤嘉基	中國の方言	藤原與一
鎌倉時代の國語	湯澤幸郎	四國の方言	奥里將建
室町時代の國語	土井忠生	九州の方言	吉町義雄

國語叢書刊行豫定

各6B判・二〇〇頁・定價一・八〇

琉球語の史的考察 伊波普猷
 那霸方言概説 金城朝永
 話言 葉神保格
 國語の位相 菊澤季生
 文章語の研究 白石大二
 女性語の性格 眞下三郎
 兒童語の研究 西原慶一
 朝鮮語の歴史 小倉進平
 朝鮮語概説 河野六郎

アイヌ語概説 知里眞志保
 南方諸言語概説 仁平芳郎
 北方諸言語概説 高橋盛孝
 支那語概説 永島榮一郎
 國語と日本精神 鎌田春雄
 國語教育論 態澤龍
 標準語の問題 石黑魯平
 國語と日本文化 長谷川如是閑
 國語の風格 金原省吾
 國語とラジオ 三宅武郎
 佐藤孝

國文學評論の權威書

各冊B 6判 裝美 約三〇〇頁

關 少 著 二〇〇	清 秋 生 著 二〇〇	河 村 秀 根 二〇〇	實 方 清 著 二〇〇	香 川 景 樹 二〇〇	顯 久 曾 神 昇 著 二五〇	筑 士 鈴 寬 著 二五〇	慈 兒 山 敬 一 著 二〇〇	正 宅 清 著 二〇〇	富 士 清 著 二〇〇	伊 藤 正 雄 著 二五〇	小 林 一 茶 二五〇	前 田 善 子 著 二五〇	小 野 小 町 二五〇	石 田 吉 貞 著 二〇〇	頓 阿 慶 運 二〇〇		
木 枝 増 崎 著 三五〇	島 崎 藤 村 著 二〇〇	橘 成 季 著 二〇〇	小 川 壽 一 著 二〇〇	阿 佛 尼 著 二五〇	白 石 大 二 著 二五〇	兼 好 法 師 論 著 二二〇	喜 多 義 勇 著 二二〇	道 綱 の 母 著 二五〇	富 倉 德 次 郎 著 二五〇	右 京 大 夫 ・ 小 侍 從 著 二五〇	坂 本 浩 著 二〇〇	國 本 浩 著 二〇〇	吉 田 精 一 著 二五〇	芥 川 龍 之 介 著 二五〇	阪 口 玄 章 著 二〇〇	金 春 禪 竹 著 二〇〇	瀧 生 磯 次 著 二八〇

三 省 堂 刊

柳田國男編
全 國 昔 話 記 錄
各 冊 6 B 判 • 均 二 〇 〇 頁 • 定 價 〇 九

佐 渡 島 昔 話 集	磐 城 昔 話 集	島 原 半 島 昔 話 集	紫 波 郡 昔 話 集	阿 波 祖 谷 山 昔 話 集	喜 界 島 昔 話 集	南 浦 原 郡 昔 話 集	壹 岐 島 昔 話 集	御 津 郡 昔 話 集	直 入 郡 昔 話 集	上 閉 伊 郡 昔 話 集	讚 岐 佐 柳 島 志 々 島 昔 話 集	甕 島 昔 話 集
----------------------------	-----------------------	---------------------------------	----------------------------	--------------------------------------	----------------------------	---------------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------------------	---	-----------------------

三 省 堂 刊